

私的 国語辞典

二文字言葉とその例文
第I集 【あ行】

榑崎 六呂

まえがき

初めまして、檜崎六呂と申します。
趣味で物書きを始めたのは10数年ほど前のこと。
書いてはインターネット上に公開し、書いては公開しを繰り返すこと数年。
突然ネタが尽きて、何も書けなくなりました。

そこで、当時の私は考えました。
お題を基に超短編を書いていくのであれば、何とかなるのではないか、と。

しかしそれも、数作書いた時点で限界が来ました。
そして、筆を置いたのが10年ほど前のこと。

そして去年。
何となく始めたmixiにて、何となく物書きを復活したくなり、
リハビリも兼ねて10年前に中断していた「二文字からなる物語」を復活。
タイトルも「私的国語辞典」と変更し、mixiの日記にて毎日更新を目標に執筆を進めています。

なお、この作品集は、物書きとしてのリハビリを兼ねているため、
基本はノンジャンル、ノンテーマで、文章の長さも長かったり短かったりしていますので、
ご了承下さいますよう、よろしくお願い致します。

嗚呼（あーあ）

長い長い緩やかな上り坂を、僕はひたすらペダルを漕ぐ。

坂が終わるまであと50m。

あそこまで上れば、きっと素晴らしい風景が見れる。そんな期待を胸に、重いペダルを懸命に漕ぐ。

大学を辞め、愛用の自転車を手に札幌駅から降り立ってから3時間程。

変わり始めた周りの風景を見る余裕も無くなっている。

早くも悲鳴を上げている両足を宥めすかし、顔を上げれば、あともう少しで坂の頂上だ。

ひと漕ぎするたびに速度の上がる鼓動に急かされるように、僕は少しずつ進んで行く。

まだ、終われない。

こんなところで、終われない。

あと5m。

大学に置いてきたいろいろなものが、頭を過ぎるが、ふざけるな。知ったこっちゃない。

1m。

後悔なんて...

「...するもんか！」

そして、坂の頂上。

僕は自転車を降り、目の前の光景を見つめる。

そして、頭の中にはただ一言だけ。

嗚呼。

愛（あーい）

私の頬を優しく撫でる手が、そのまま顔の輪郭をなぞるようにゆっくりと下がっていく。
私は一糸まとわぬ姿で寝かされ、その体は熱かったが、
その優しい手が顔から胸、お腹と触れていくに従い、その熱が収まっていくのを感じた。

...ここはどこなのだろう。

そんな疑問が湧き、私は目を開く。

暗闇に目が慣れていたので、あまりの眩しさに周りが見回せない。

「...起きたのね」頭上から声が聞こえた。

見上げるが、まだ目が慣れないため姿がよく解らない。

解らないことに苛立ちをおぼえ、泣き叫びたくなった。

「いいのよ、もう少し眠りなさい。愛してるわ」

女性だろうか、その人は優しい声で囁くように言うと、再び私の頬を撫でる。

その声に先程の苛立ちがすうっ、と収まり、私はゆっくりと眠りに落ちて行く。

これが母の声だったと知ったのは、二十歳になった昨日のこと。

私を知る、唯一の母の声だった。

遭う（あーう）

いやだなあ、と思っていた。

顔も見ることのない相手と待ち合わせをすること自体嫌なのに、待ち合わせ場所が相手の指定したところというのが余計に嫌だ。こんな地方の駅前では、それらしい店が一件もないため、隠れて様子を見ることもできない。

ふと時計を見ると、既に待ち合わせ時間の6時を10分過ぎていた。手帳を確認するが、待ち合わせ時間に間違いはない。辺りを見回すが、既に薄暗くなった駅前のロータリーには、人の姿はない。

...そうだ、人の姿はなかった。何故この時間に、サラリーマンが帰宅するこの時間に、人の気配がないのか。嫌な予感がした私は、帰ろうと駅の方を向き...

...それを見つけた。

安っぽいUFOの着ぐるみに、ぶくぶく太った脚とハゲたおっさんの頭が生えていた。

その手には、1枚のプラカード。
そこに書かれていたのは...

「ようこそ、UFOのまち、羽咋へ」

蒼（あーお）

洗濯物をベランダに干してリビングに戻ると、亮介が床にうずくまって何かやっていた。
亮介は戻ってきた私に目もくれず、...どうやら何かを懸命に描いているらしい。

「亮ちゃん、何描いてるのかな？」

私が笑顔を作りそっと声をかけると、亮介はびよこ、と顔を上げて、
「おそとかいてるの」
と笑顔で言う。

その返事に、私は思わず笑顔のまま固まった。

生まれた時から亮介は身体が弱く、外に連れて行くにしても車内か病院位しか見ていないはずなのに、何を描いているのだろう。

私は少し不安を感じつつ、そっと画用紙を覗き込み...

...そして、思わず窓の外を見上げた。

そこには、一面の蒼。

泣きたくなる位に、綺麗な蒼だった。

朱（あーか）

お風呂から上がってリビングに戻ると、亮介が床にうずくまって何かやっていた。
亮介は戻ってきた私に目もくれず、...どうやらテストか何かを懸命に書き直しているらしい。

「亮介、何やってるのかな？」

私が引き攣った笑顔でそっと声をかけると、亮介はびくう、と顔を上げて、
「い、いや、何でもないよ」
と笑顔で言う。

その返事に、私は思わず笑顔のまま固まった。

生まれた時から亮介は身体が弱かったせいか、甘やかしてしまい、勉強もろくにしないでゲームばかりしているはずなのに、テストの復習でもしてくれるようになったのだろうか。

私は少し不安を感じつつ、そっと覗き込み...

...そして、思わず赤く染まった窓の外を見上げた。

そこには、一面の朱。
おまけに、右上の大きく書かれた『10』に『0』を書き足していた。

ほんと、泣きたくなる位に、見事な朱だった。

空き（あーき）

消防設備士という職業柄、室内の各部屋の天井に付いている感知器を点検していたりするので、睦坂妙かアトに遭遇する。遭遇するのが大抵団地やアパートの空き室に居るときだったりするから、アトや幽霊か...などとドキドキしたりもするが、残念なことに私は幽霊を見たことが無い。

だから、今片隅に見えたのは多分目の錯覚だ。

会口の占絵は、築50年位の市営団地。近い内に改築が予定されていることもあり、ほとんどが空き室になっていた。

いや、しかし、アの401号室で、人傷沙汰が有ったって話も聞いて無い。私は和室の感知器に異常が無いことを確認すると、恐る恐る背後に有る押し入れを見た。

いた。押し入れの天井板が2cm程浮いていて、...そこから覗く何かと目が合った。

うん。不法入居者だ。

多分。可笑相か人なんだ。きっと。

こういう時は手は一つ...トラブルは回避するに限る。

私はいつも入居者にするように、爽やかな笑顔で会釈をして、元気な声で、「すみません。消防設備のてんげ...」

言い終わらないうちに、天井板が勢い良く閉じられた。

うん。目かかったアトにしよう。何もいなかった。

大体、ここの天井裏って、10cm位しか隙間が無いじゃないか。

うん。

その時、手に掛けていたトランシーバーから、「何か昇堂でも有りました？」と相方の声。

「いや、大丈夫...押し入れの感知器もオッケーです」

そう返答して、私は部屋を出た。

開く（あーく）

新築のマンションに行くと、最近のトイレの進歩に驚くことがある。
中でも衝撃だったのが、近づくと便座の蓋が自動的に開くトイレだった。

点検の時に間違っってトイレのドアを開けた途端に『ぱかっ』と開き、思わずのけ反ってしまった。

もちろん、人が居ないとこれまた自動的に蓋が閉まる。これにも関心した。

このトイレで更に驚いたことがある。

部屋に誰も居なかった事もあり、面白がってトイレのドアを開けっ放しにして、中の様子が分かるようにリビングの感知器を点検していたところ...

...何と、誰も居ないのに再び蓋が開いたのだ。
しかも、今度はなかなか閉まらない。
おまけに、水まで流れ始めたではないか。

驚く私を尻目に、トイレのドアがゆっくりと閉まった。

いやあ、最近のトイレは、凄いなあ。

...ん？

誰かに肩を叩かれたような...

そして私は後ろを振り向

朱（あーけ）

彼は座り込んだまま、呆然とした表情でそれを見つめる。
足元に眠るように横たわっているそれは、全体が見事なまでに朱に染まっており、ピクリともしない。
その美しさから、傍目には朱色に塗りたくった等身大の日本人形にも見える。

それはもともと、数時間前までは彼の義姉だった。
彼は激しい痛みを訴える頭をゴツゴツと殴り、懸命に記憶を手繰り寄せる。

『確か、いつものように兄貴から逃げて来たんだ...よな？』
彼は更に思い出そうとするが、後頭部の痛みが酷いためか、考えが纏まらない。

恐る恐る左手で後頭部に触れると、出血しているのかぬるっとした手応えを感じた。

彼は左手を見る。
その手もまた、血で朱に染まっていた。

そして、ゆっくりとブラックアウトしていく視界。

その視界の隅に、兄が立っている気がしたのは、気のせいだったのだろうか。

顎（あーご）

「はい、あご引いて下さいーい」
カメラを構えた茶髪の女の子のその指示に、椅子に座って背筋を伸ばした私は『そらきた！』と身体を強張らせた。

何をかくそう、私はこの『顎を引く』という指示が苦手なのだ。
いつも同じような加減で顎を引いているのだが、ほぼ間違いなく店員から『もうちょっと戻して下さいーい』とか、『まだ引いて下さいーい』とか言う指摘が入る。
もういっそのこと、顎を水平方向に3cm後ろに...という様な具体的な指示をしてくれる方がずっと気が楽なのだが、目の前のお姉さんにそこまで求めるのは酷って言うものだ。

多分今回も一発ではOKは出ないだろうな、と思いつつ、顎を1cm程下げしてみた。

どうだ？
祈る様な気持ちで彼女を見る。
彼女は一瞬難しい顔を見せるが、直ぐに笑顔に変わり、
「オッケーで一す。じゃあ撮りますねー」
とシャッターを押した。

よし、勝った。

40分後。
出来上がった写真を見て、気が付いた。

ああ、そうか。
あの笑顔はただの営業スマイルだったのか。

がっかりする私を、顎の引きすぎで二重顎みたいになってる私が、にんまりしながら見ていた。

朝（あーさ）

新しい朝が来た。
希望の朝、だ。

私はポストの新聞を抜き取る前に、朝焼けに向かって大きく伸びをした。

会社の皆に定年退職祝いの会を開いてもらった昨夜の事が嘘のように、普段と変わらない朝だ。

私は新聞を抜き取ると、そのまま家の中に入る。
そこでふと私は頭の中で、する必要のない朝の支度の段取りをしている事に気がつき、思わず笑みがこぼれた。

万年平社員だった私にとって、会社とは出世の階段ではなかった。むしろただの生活のリズムだったのかも知れない。

私は新聞をテーブルの上に置き、仏壇の前に座る。
目の前には、妻の笑顔があった。

仕事の為に死に目にも会えなかった妻。

お前なら、今日この朝をどう迎えていただろうか。

「なあ、お前はどう思ってたんだ？」

そう遺影に問い掛けるが、妻はただ笑うだけだった。

脚（あーし）

俯いた人は必ず、その視界に自分の脚を見つける事になる。
彼は謝罪の言葉を繰り返しながら、ふとそんなことを考えていた。

金曜日の午後7時。

大半の人が仕事を終えている中、彼は新入社員のミスフォローすべく、取引先の課長さんの前で深々と頭を下げている。
ミス自体は大したものではない。対処の仕方が最悪だったただけだ。

『...しかし、太くなったな、俺の脚』
そんなことを考えている彼に、頭を掻いた課長さんが声をかける。
「...まあ、ねえ。入りたての子なら仕方ないか。うちの子も同じようなものだしな」
「...誠に申し訳ありません」
「いやいや、もう良いよ。こうやってすぐに君が謝罪に来たことだし。貸しひとつ、ってことで」

そう言って笑いながら課長さんは立ち上がる。
彼は顔を上げ、ふと課長さんの脚を見る。すらりとした体躯に見合った、すらりとした脚。

『...ダンディな男って、脚もすっきりとしたもんなんだな』

彼は立ち去る課長さんを見ながら、ジム通いする為の費用の事を考えていた。

明日（あーす）

（彼は勉強机の上にあった日記を手に取り、最後のページを読み始めた）

『〇月〇日

これでもう三ヶ月。今日も酷い1日だった。

私が何をしたって言うんだろうか？

何もしてない。

何もわるくない。

なのに、どうしてあいつらは私を目の敵にするんだろう。

わからない。

明日になれば。

きっと、みんな元通りになる。

そう信じてここまで来たけど。

ううん。

大丈夫。

みんな友達だもん。

もうちょっと信じてみよう。

明日は、きっと良い日になる。

きっと。』

（彼は最後まで読むと、もう続きの書かれないその日記を元に戻す。既に生活感の薄れたその部屋で、その日記だけは、彼の愛する娘が生きていた事を今だに主張していた）

汗（あーせ）

こめかみから汗が一滴、じんわりと降りていく。

拭き取りたい衝動を堪えて、私はファインダーに神経を集中した。

ファインダーの先には、長年追い求めていた獲物が、居る。

獲物はゆっくりと辺りを見回すと、前脚の辺りをうろうろしていた子供に、その精悍な鼻を近づけている。

私は震える手を必死に抑え、シャッターチャンスのタイミングを狙う。

子連れである以上、下手に刺激をしたら、幾ら10mは離れていたとしても、私に襲い掛かってこないとも限らない。

なんせ、相手はオオカミ...しかも、ニホンオオカミなのだから。

私は緊張のため唾を飲む事も出来ず、ただひたすらその親子を見つめる。

オオカミの親子は辺りの様子をひとしきり伺うと、沢の水を飲み始めた。

ファインダー越しに見る親子は、月の光に照らされて、果てしなく幻想的に見える。

私は流れ落ちる汗が口元を伝うのを感じながら、親子の動きを見守る。

そして、とうとう親子が水を飲み終え、顔を上げた。まるで親子揃って月を見上げるように。

今だ。

私は迷わずシャッターを切った。

仇（あーだ）

里は 自分の手下が次々と倒されていくのを 静かに見つめていた
手下を斬らざる重で相手の刀筈を目極め 更に刀心を土曇の血で曇らざるのが木卒の目的であるとは言え、50人は居た手下の大半をほんの一時で地に伏せるその腕前は並ではない

しかし、男の眼に浮かんでいるのは絶望ではなく、むしろ歓喜の色であった。

里は心底嬉しそうに手下を次々と斬り殺しては里を目でいる
その里 牛程夕を名乗った気がするが、彼は名など不要と、北辰一刀流の一人だとしか理解しなかった。

彼は 楽しみをしているのだ
里の北辰一刀流が睨つか 自分の暗殺剣 宗相直流が睨つか
アアアアの里に睨てば 彼と以蔵が度重なる暗殺の日々の中で習得したこの暗殺剣が、
一気に知名度を上げる
これは、剣の名を上げなくてはならない彼にとっては、人生最大の機会であったのだ。

幸いに 里は付き添いの餓鬼の仇討ちを任ずるために来ている
木卒から御法度である仇討ちに加担したとなれば、例えこの場で斬り殺されても罪にはならない。

そう アの戦いは彼にとっても仇討ちであった
幕府に刃向かい それ故に守ってくれる筈のものの手で壮絶な最期を遂げた相棒、岡田以蔵の仇討ちである。

故に 餓鬼には里が彼に斬り負けるのを見届け、世間に広めてもらわねばならない。
だから、餓鬼は殺さない。

彼の思いを知るか知らずか 里は最期の一人を切り伏せると 立派とした表情で彼に向き直った。その落ち着き払った姿に、彼は男の潜った修羅場の数を見た。

恐らく 勝負は一瞬
以蔵と編み出した彼の宗相直流は 従来宗相直流と同じく 一撃で勝負を決めるための剣術であるが、全ての力を速く刀を振ることに注ぎ込み、誰よりも速く敵を斬る事が出来る。

更に言えば 彼の剣術を里は見たことが無い。
彼はにやりと笑い、刀を構えた。

「やはり、以蔵殿のお身内か」

里の呟きに 彼が一瞬固まる
改めて男を見るが、その顔にまったく見覚えが無い。

「まあ良い 汝がめが アれも縁と申い 成仏下され」
里はにアやかにそう告げると ゆっくりと刀を構えた

彼は鼻から息を一気に吸い込むと、躊躇か気合いと共に全身で大地を踏み締める。
男は静かに刀を正面に据え、彼を見詰めている。

そして、彼は大地を蹴った。

あつ（あーつ）

「あつ、海だよ、海」

緩やかなカーブを曲がると、後部座席でおとなしく眠っていたはずの大輔が、運転席と助手席の間からひょっこりと顔を出した。正面を見れば、確かにうっすらと海が見える。

「ああ。確かに海だな」

大輔は私の返事に元気に頷くと、ちゃんと座り直して窓の外を嬉しそうに見つめている。私はバックミラー越しに大輔を見て、思わず笑みがこぼれた。

きっと、海の様子をしっかり記憶しようとしているんだろう。

後で涼子に話すために。

涼子が精神を患って療養所に入るようになってから、はや1年が経とうとしている。

毎週末の訪問も今では当たり前の事となり、最初は涼子に対し若干怯えていた大輔も、今では母親との面会を楽しみにしているようだった。

カーナビが目的地まであと5kmあると告げ、それに呼応して大輔が「あと5キロ～」と叫ぶ。

その嬉しそうな声と、最近涼子が見せる笑顔が重なって、私は再び微笑んだ。

きっと療養所に着いたら、わざわざ出迎えてくれている涼子を見て、大輔は先刻以上に元気な声で叫ぶのだろう。

『あつ、お母さんだぁ～！』と。

宛て（あて）

都会の一人暮らしで嫌なものひとつに、自分宛ての郵便物がある。
少なくとも人付き合いの非常に悪い私のような人間にとってはそうだ。
まだダイレクトメールなら、シュレッダーにかけてやれば済む。
問題は、普通の便箋で送られてきた郵便物だろう。

例えば...今手にしているようなものがそうだ。
ファンシーな便箋に丸文字で書かれている私の名前。
切手も住所も無く、無論消印も無いこの封書を、一目見て面倒だと思わない女子はおるまい。
私は薄気味悪さを感じながら、恐る恐るひっくり返して裏を見る。
すると、裏面の右下隅に、『サンタクローズ』と書かれているのを見つけた。

...既に年を越して久しいと言うのに、全くもってふざけている。
私はため息をつく、そのふざけた封書をひらひらさせながら、玄関のドアを開けた。

靴を脱いでリビングに向かい、着替えをしようと封書をこたつの裏に放り投げる。

『いてっ』

私はその...少なくとも封書が発するであろうとは思えない擬音に、ジャケットを脱ぐ手を止めた。自然と右手は脇のホルスターに触れている。
そのままの姿勢で封書へ目を向けるが、封書はぴくり、ともする気配は無い。

...まあ、当然だろう。
私は右手をナイフの柄から離し、ジャケットを脱いだ。

着替えも終わり、カップラーメンにお湯を入れてこたつに座り、さて目の前の面倒事の対処について考える番となった。
面倒なのでそのままシュレッダーにかけたい所だが、さっきの擬音が気になる。
もしさっきのが...まあ、何と言うか、いわゆる声ならば、シュレッダーにかけた瞬間に絶叫するかも知れない。
もしこの部屋でそんなことになれば、事態は更に面倒な事になる。
かと言って、中身の確認無しに、このまま捨てる訳にもいかない。

『やはり、開けるしかないか』

私はため息をつき、愛用のナイフを手にとり、華麗なナイフ捌きで封を切る。
そっと封書の両端を指で押して口を開いたその瞬間、封書から目が眩まんばかりの光が放射された。
その光の中から小さな腕が伸び、封書の切り口に手をかけるのを細目を見た私は、即座に反対側の人差し指でその手を弾き、すぐさま封書の口を閉じると、引き出しに眠っていたセロテープを片手で取り出し完全密封した。

「...さてと」

私は本気で考える。

これは、紙ごみと生ごみのどちらになるのだろうか、と。

跡（あーと）

「決め手は、この足跡です」
探偵気取りの学生が平然とやってのけると、その場に居た全員が一瞬動揺を見せた。
「いやしかし、その足跡に見合ったサイズの方は、この中には居なかったはずでは？」
私の隣に立っている太ったおっさんがそう反論すると、学生はにこり、と微笑んだ。
「ええ、そうですね...ただ、この足跡はわざと付けられたものですので、靴のサイズ自体は何の意味もありませんから、気になさらない方が宜しいかと思います」
その言葉に再びどよめく一同。
「じゃあ何か？このサイズの靴をわざわざ履いて現場に行った奴が居る、って事か？」
今度は向かいに居た作業服のおっさんが呆れたように呟く。
そりゃそうだ。
靴のサイズがでかいなら言ってる事も解る...が。
私は目の前にある足跡を見つめる。
雪の上に残されたそれは、誰がどう考えても、幼稚園児の長靴サイズしかない。
ここに集まってる連中は、全員おっさんおばさんばかり。
少なくともこれを履ける人間がここに居るとは思えない。

学生さんは笑顔のまま、くると全員を見回す。
「ええ、誰かが、わざわざ小さい靴の足跡を付けたんです。捜査を攪乱させる為にね」
「はあ？どう考えても無理だろ」
作業服のおっさんが素っ頓狂な声を上げ、隣に立っているダウンジャケットのおばさんも同意するように頷く。
「ええ、まともに履こうとしても無理ですね」
学生さんはあっさり同意すると、現場の方を見た。

伝説の双頭千年桜。
昨夜、その太い枝の一本に、メンバー唯一の若い姉ちゃんが首吊り死体になってぶら下がっていたのを思い出す。

...多分、トラウマになるな、こりゃ。

「この足跡は、あの木から数m離れた所までしか残ってません。そして、もうひとつの足跡は亡くなった女性のものだった」
学生さんはそこで一旦言葉を切り、再び全員を見回した。
「ならば、答えはひとつしかない。この足跡を残したのは...」

（解答編に続く...までもないか（笑））

穴（あーな）

その異変に気が付いたのは通学開始直後の事、具体的には向かいの家に住む明子さんに挨拶した時の事だった。

明子さんの細い綺麗な首の辺りに、10円玉位の穴がぽっかりと空いていたのだ。

「...な！？あ、明子さん、どうしたのその首！？」

思わず素っ頓狂な声を上げた私を、明子さんがきょとんと見つめる。

「え？首？」

「そうそう、その首の付け根辺り！」

私が慌てて指を指すと、明子さんはああ、と納得しつつ、穴の辺りに触れる。そんな仕種も色っぽい。

「今日寝違えちゃって、朝から痛いよね、首」

「へ？寝違え？」

「そうよ...でも、良く分かったわね。知らない内に変に庇ってたかな」

そう言って穴の辺りを軽く揉みながら苦笑する明子さん。その色っぽい仕種に同性ながらもクラクラしそうになる。

いかん。クラクラしてる場合じゃない。

どうやら異常なのは私の方だ。

「あ、...ああ、うん、ちょっとだけね。あでも気にする程じゃないと思うから大丈夫だよ」

私は慌ててごまかすと、行ってきますと叫んで駆け出した。

おかしい。

自分の席に着いて一息入れながら、私は学校に辿り着く迄の道中を振り返る。

あの後も穴がある人を何人か見かけた。明子さんみたいに首にある人も居れば、膝や胸、頬やお腹にある人も居た。

穴の大きさも様々で、凄いものには頭が入る位の穴も有ったりした。

思い切って声をかけてみるとやはり明子さん同様、穴の位置で何らかの痛みを訴えていたのも分かった。

「...分かったところで、それがなんだ、っちゃう話なんだよねえ...」

「なるみ、どしたの？フラれた？」

突然声をかけられ、私は思わず振り返る。そこには、親友のガッキーがニンマリと笑って立っていた。...そのほっぺたにも、1円玉位の穴。

「ガッキー、虫歯痛む？」

何となくそうカマをかけてみると、ガッキーはほっぺたを押さえて苦笑いする。

「腫れてる？いやね、今朝から急に痛み出してさ、参っちゃって」

ほら、正解。

「鏡見てくる」と言って立ち去ったガッキーを見送りつつ、私は小さくため息をついた。

結局ろくに授業の内容も頭に入らないまま一日が終わり、私はトボトボと学校を後にした。

まあ少なくとも自分自身に危害が及ぶ事は無いよと言う事は分かったので、穴を見かけても今では比較的冷静に観察出来るようになってる。

だけど、やっぱりこんなの気持ち悪い。

私は今日何度目かのため息をつく、通学路の途中にある公園に入った。

この公園は駅の側の高台にあって、夕方のベンチからの見晴らしが最高なので、私の数少ないパワースポットになっている。

...と。あれ？

普段なら誰も居ないはずのベンチに誰か居る。

うちの近所に住むアキラ君...かな？

ベンチで寝ているように見えるが...

「うわ」

近づいた私は、思わず声を上げた。

アキラ君の腹部に、バスケットボールが入る位の穴が空いていた。息も荒くしている。

やばい。なんか内臓がダメになってるんだ。

私は迷わず携帯を取り出し、消防に電話した。

「ふう。散々な日だった」

病院でアキラ君のとりあえずの無事を確認し、アキラ君のお母さんからの繰り返しの感謝の言葉を照れつつ受け入れ、病院を出て来たのは8時を過ぎた頃だった。

疲れたが、決して悪い気分じゃない。

私は、命を救う手伝いをしたんだ。

そう考えると、この異常事態も悪く無いように思えてきた。

「まあ、なるようになる、か」

私はそう呟くと、愛する我が家に向かって走り始めた。

姉（あーね）

「行ってきます」
凛々しい軍服に身を包み、父親や伯父に最敬礼をする姉を見て、僕は悲しみを覚えた。

何故我が姉が死地に向かわねばならないのか。
既に妙齢の女性は尽く戦争に駆り出されているとは言え、姉は他の女性と違って肉体労働は向いてないのに。

僕は力無く微笑みながら、皆からバンザイ三唱を受けている姉を見つめていた。

事の始まりは、明治維新の事だったらしい。
江戸の頃に散々虐げられてきた女性が、黒船と共にやって来た外の知識を得て、女性復権の名の元に幕府に対し一斉蜂起をしたらしい。
らしい...と曖昧に語るのを許して欲しい。
何せ100年近く経った今では、男性は家を守る事が第一となっているため、学業一切を禁じられているから、真実を知る術が無いのだ。
今回の戦争も、世界の男尊女卑を無くすためだ...とか言うお題目の元に大陸への侵略を推し進めてきた結果らしいのだが、僕や父親にはお国の言う『男尊女卑の権化』である大国メリケンと開戦した...と言われても、さっぱりその実感が沸かない。

ただひとつはっきりとしているのは、これで僕達の村から妙齢の女性が居なくなった...と言う事だけだ。

昨夜、姉が僕に告げた事を思い出す。

『いいかい、良くお聞き。...恐らくこの戦争は負ける。負けたらきっと、この国の女性は危険分子として処分され、他の国から新たな女性が大量に連れて来られる事だろう。...良いかい、どんな事になっても、自分が日本人である事を忘れちゃいけないよ』
姉の、まるで遺言のような言葉を思い出し、僕はまた泣きそうになる。
そんな僕の様子を見て、父親がそのかさかさした手で優しく頭を撫でてくれた。

父親の手。
家事ですっかり手が荒れてしまったその手は、姉が大好きだった手だ。
僕はこれから、一人でこの手を守らなくちゃいけないのだ。
しっかりしないと。

僕は溢れそうになる涙を堪え、汽車の窓から僕達を見詰める姉に微笑む。

どうか無事に帰って来てくれる事を願いながら。

あの（あーの）

あの日、あの時にあの人に出逢わなければ...。
私は最近、そんな事を考えるようになった。

今の生活に不満がある訳では無い。
趣味も仕事も充実してるし、愛する人も居る。
仕事が仕事だけに退屈もしないし、お金にも困らない。

ただ。
このままで良いのだろうか、とは前から考えていた。

疲れたのかも知れないな。
私は苦笑いしながら、再びライフルの暗視スコープを覗きこんだ。
スコープの先、ホテルの一室にはバスローブを着た男が居る。
強引な方法で買収を繰り返す、中国ファンドの代表者の一人。
依頼は彼によって被害を被った企業体からで、理由も報酬も悪くない。むしろ悪いのは、私の精神状態だ。
『目標は大抵スコープの遥か彼方に居る。心の迷いで生じる誤差は、例え小さなものでも君の死に直結しているものと肝に命じて置くことだ』あの人の言葉が脳裏を過ぎる。

あの日、クリスマスイヴの夜。
もし私が飛び降りようとしなかったら。
適当に選んだビルが、違うビルだったら。
もしあの屋上に、あの人が居なかったら。
そして、もしあの時のあの人の眼を見なかったら。

くだらない。
私のあのくだらない人生は、16のあの日に全て吹き飛んだのだ。
悔いは、無い。
早く帰って、作り置きのローストビーフで一杯やろう。

私は再び狙いを付けると、引き金を引いた。

虻（あーぶ）

「はあ...」
私は途方に暮れながら、海の彼方を見詰めていた。

船は迎えに来ない。
気温は下がってくる。
そして、この島に生きている人間は誰も居ない。

最悪だ。
まったくもって最悪だ。
何でこんな事になったんだろう。

「...ねえ、困ってるんだけど」
私は隣で体育座りをしている彼に呟く。

もちろん、彼は答えない。
当たり前だ。体育座りの鎧武者の幽霊が私の問いに答えてきたら、それはそれで怖すぎる。
私は再び砂浜に座り込み、荒れた日本海を見詰めた。

確か、昨日の夜は金沢の自分の部屋に居たはずだ。
それなのに、目が醒めたらここに居た。
パジャマではなくジーパンにダウンを着込んでいる所を見ると、寝ている最中に連れて来られた訳では無いようなんだけど、さっぱり記憶がない。

そして、なんで私はこの島...虻が島に居るんだろう。
この島には海水浴をしに1・2度来たことは有るし、その度に変な感覚を感じていた事もある。
でもなんで、しかも遊覧船も出ていない冬真っ只中にここに來れたんだろう。

虻が島は富山県の沖に有る小さな島だ。
昔はどうだったか知らないけど、今は海水浴場と公衆トイレと船着き場しかない...いわゆる無人島、って奴だ。

いつ、なんで、どうやって。
同じ疑問を頭の中でぐるぐると繰り返していたから。
そう。だから隣に鎧武者が座ってるのに全然気が付かなかった。

そりゃもう、びっくりしたのなんのって。パニックでダッシュで逃げ出して、トイレの陰に隠れて様子を見てたりしたんだけど、さ。
一時間位見てたんだけど、奴は砂浜に体育座りしたまんまでピクリともしないし、だんだんアホくさくなってきて。
だってさ、このままだと、飲み水も無いし、食べ物もないから、私死んじゃうしさ。
死んじゃう人が幽霊怖がっても意味ないか、ってね。

だから私は結局、さっきの場所、つまり鎧武者さんの横に座り直したんだ。

それから2時間位経った今、私は大の字に寝て一面の曇り空を見ている...と言う訳だ。
不思議とお腹も空かないし、喉も渇かない。
退屈なのに眠くもならない。
ただひたすら、考えてた。...いや、考えてたのとも違うかな、昨日までの事を思い出していた。

私は人付き合いが苦手だ。

会話の合間に感じる相手の自分勝手な部分が嫌で、それが露骨に顔に出ちゃうらしく、だから会話も盛り上がらない。会話が盛り上がらないから友達も少ない。少ないからあせって自分の性格を治そうとする。あせるから余計に会話が盛り上がらない…。

…とまあ、こんな感じの悪循環が続き、今では友達らしい友達は居なくなっている。

「まあさ、だからといって、こんな所に一人ぼっちで放り出される事にはならないよね」

また何となく鎧武者さんに呟いてみるが、当然のことながら、頷きすらしやしない。

くそう、ほんとにありえないから。

…あ、待てよ。

そうか、こんな事はありえないんだ。

ありえないなら、これは現実じゃない。

夢だ。

夢なら、この虻が島に居る理由も解る。

キーワードは島じゃない。

虻だ。

三日前だったっけ。

外を飛んでいた虻を見て、ふとくだらない事を考えたんだ。

虻っていつ見ても一匹で、見た目が攻撃的だから人からは敬遠され、それでも懸命に生きている。

その孤独さが、自分に似てるな…そう思ったのだ。

だから『虻』が島なのだろう。

そして、目の前の光景は私の心の中。

…あれ？じゃあ、鎧武者は？

私が鎧武者に向き直ると、すでに鎧武者は立ち上がっていた。

そして、兜に手をかける。

私は思わず、ごくり、と生唾を飲む。

そして、兜が外れた。

そこには…。

尼（あーま）

加納大祐は息を切らせながら地面にはい上がると、ぐったりと仰向けになった。

ヒカリゴケでも生えているのだろうか、光の射さない洞窟の中にしては明るく、彼の辛そうな表情もぼんやりとだが見て取れる。大祐はしばらくの間息を整えていたが、やがてゆっくりと起き上がり、何とか持って来れた耐水バッグを手元に引き、中身の確認をし始めた。

「携帯食料、マグライト、飲料水とボイスレコーダー、携帯電話...って圏外かやっぱり」

大祐は声を出して確認すると、水を軽く口に含んだ。水の冷たさが喉の渴きを癒していく。

本来の落ち着きを取り戻した彼は、ボイスレコーダーのスイッチを入れ、マグライト以外をバッグに戻し、ゆっくりと立ち上がった。

彼が八百比丘尼に興味を持つようになったのが、中学時代の国語の授業中の、所謂先生の脱線話だった。

落語をやっていると言う国語の先生の語りは非常に面白く、それまで地元の八百比丘尼の伝説なんて興味のかげすら湧かなかった彼に強烈な印象を残したのだ。

ただ偶然に口に入れた肉のせいで壮絶な人生を歩む事になった、自分と同年代の女の子。

彼女が犯した罪は、欲に目が眩んだ父親の残した人魚の肉を知らずに食べてしまった事だけなのに、そのために死ねない、歳を取れない身体になって。

そのせいで人々から疎まれても彼女はくじける事無く、全国各地を渡り歩いて貧しい人を救い続けて...そして世を儚んで岩窟に籠ってしまう。

まるでアメコミのヒーローのようなその伝説に魅入られた彼は、現在、卒論のテーマとして彼女を扱っていた。

すなわち、八百比丘尼伝説のその後を調査する事で、彼女が何処に籠ったのか、そして八百万歳は生きるという人魚の肉を食べてしまった彼女が現在どうなっているのかをはっきりさせようとしていたのである。

地表に露出していた岩窟の調査が全て空振りに終わり、それでも諦め切れず今昔様々な地図を睨み続けた結果、卒論締切まで残り2ヶ月を切った先月になって、彼はようやくこの洞窟に行き着いた。

この洞窟は入口が海底深くに存在しているのだが、周囲に海流の渦が混在している事から、知り合いの腕の良いダイバー達も誰一人として近づけない危険地帯となっていたが、彼のテンションは一気に急上昇した。

何せ彼女は不老不死なのだから、強引にでも中に入ってしまうえば、このような洞窟の方がかえって安全である筈だ。

当然ながら、周囲の者達は激しく反対した。特に同じゼミの尼子という美人研究生は、ダイバーとして許せないと、人を使って力づくで止めようまでしてきた。

しかし彼の八百比丘尼への想いは揺らがない。彼は、彼女の為なら道半ばで死んでも悔いはない...と、皆が制止するのも聞かずに単独強行突入を敢行したのだ。

そして、今。

彼は洞窟の最奥で、呆然と立ち尽くしていた。

彼の前には、藁で作られた敷物が一枚敷かれ、その脇には様々な年代の品物が整然と並べられていた。

「...加納大祐メモ。1月15日、15時28分、目的地到着。彼女の姿は無いが、遺留品から存在の形跡を発見」

彼は埃が極力立たないように静かに近づくと、それらの物品を一つひとつ確認していく。

「保存状態は良。ほとんどが生活必需品かお守り等の記念品だ。各史料館にあった物品の、恐らく対になるものか、こちらがオリジナルなのだろう」

彼はボイスレコーダーにメモを取りながら、更に物品を調べていく。

「私の推測通り、彼女は岩窟に入るまでに出会い、愛した者達の遺品をずっと手元に置いていたと思われる。...それはすなわち...」

そこで言葉を切り、彼は上を見上げる。そこには、何を使って描かれたのか、畳一枚位の大きさの壁画があった。

海岸に、質素な建物が幾つか建っている絵であった。

「...すなわち、八百比丘尼は、不老不死である以外はただの人間...いや、ただの女の子であると言う証拠であるとも言える」

彼は静かに目を閉じ、そして彼を静寂が包み込んだ。

しばしの静寂ののち、再び彼が口を開く。

「さて、彼女は何処に居るのだろうか。少なくとも此処には彼女の骨一本存在しない。また、遺留品を見ると、昭和に入ってから作られたと思われる物も存在している」

彼は物品の手前に置かれていた一枚の紙を覗き込む。それは戦時中に使われた、赤紙だった。

「この洞窟は、少なくとも戦後すぐまでは死を司る禁忌の地として畏れられていたと聞く。故に、此処に赤紙をわざわざ持参する意味が無い。ならば何故これが此処に存在しているのか」

彼はそこで言葉を切る。

入口の方から、水音がしたように感じたのだ。

「...結論はひとつ。少なくとも彼女は、戦時中までは生きていて、何らかの手段でこの赤紙を拾い、そして再び外の世界へ旅立ったのだ」

遠くから微かに聞こえて来るのは、足音だろうか。

「本来この地は、彼女にとっては世を棄てる為の仮染めの地。恐らく彼女は、二度と戻らないつもりでこの地を出たに違いない」

彼は赤紙の送り先を確認する。そこには戦争に行った一人の若者の名が書かれていた。

『尼子誠一』

赤紙に書かれていた名前である。

「故に、現在彼女がどうなっているのかは不明であり、その生死を知る方法も無い」

足音は徐々に近づいてくる。

「これ以上は調査不可能と判断し、これにて調査を終了とする」

足音が彼の後ろでびたりと止んだ。

「...悔しいが、私はこれで良いと考える。なぜなら、彼女が絶望の淵から再び立ち上がったからだ」

彼の後ろの気配が、若干揺らいだように感じるが、彼は構わず続ける。

「一度絶望を味わった人は、誰にもまして強い。だから彼女は今でも、この世界の矛盾に苦しみながらも、懸命に生きているに違いない」

彼はゆっくりと立ち上がり、振り返る。

彼の背後には、ウェットスーツに身を包んだ若い女性が立っていた。

彼は静かに女性を見つめる。

「願わくば、彼女に幸福と平穏なる日々が訪れんことを」

彼は女性...尼子八重という研究生に微笑むと、無言でボイスレコーダーを差し出した。

彼女は最初、それが何か分からずびくり、としたが、差し出された物とその理由を理解し、目を見開いて彼を見つめる。

「...良いの？」

彼女が声を詰まらせながら問う。

「良いですよ。どうせこんな話、誰も信じないですしね」

彼が笑いながらそう答える。

その笑顔の無邪気さに、彼女も呆れたような笑顔を見せた。

網（あーみ）

『さあて、暇だし、お題を基にみんなに即興ショートショートを考えて頂きましょーか！』
突然の雄叫びに、のんびりライトノベルを読んでいた部員の面々ががたがたと椅子から転げ落ちる。

『ええ？そんな無茶振りしないで下さいよ、部長』
一番最初に立ち直った副部長が反論するが、部長は聞く耳を持たない。
『まあ突然の話だし、すぐに結果発表もして欲しいから、...そうね、穴埋め問題にしましょう』
そう言って突然何かを書き始めた部長を見て、他の部員は諦めたようにため息をついた。
『まあ仕方ないか、ここは文芸部だし』
『と言ってもほとんどライトノベル部だけどね』
『全く、部長、今度は何に影響されたんだ？』
ぶつぶつ呟く部員を尻目に、部長は書き殴っていた紙をびっ、と上に掲げた。
『さすが私！見事なお題の完成よ！』

部長は雄叫びと共に、その紙切れを部員達の前に有る長テーブルにばんっ！と叩き付けた。
『部長～、このテーブル脚が弱いんですから、部長のパワーで叩き付けたら真ん中から折れちゃいますよ』
『誰がゴリラよ！...まあ良いわ。ほら、何でも良いからみんな考えなさい。発表は1時間後ね』
そう言われて、慌てて紙切れを覗き込む部員達。

そこには、以下の文章が書きなぐられていた。

（以下、お題）

「大変よ、〇〇が盗まれたわ！」
「落ち着いて下さい〇〇さん。私どもで逃走経路に網を張っておりますので、犯人を捕まえるのも時間の問題です」

...3時間後。

「犯人、捕まらないじゃ無いのよ！何してるのよ一体！」
「〇〇さん、～」←オチを付ける。

『...え～と、部長、こんなテキトーなお題じゃ...』
副部長のツッコミもなんのその。
『さあ、始め！最下位は次回作のページ倍増！』
突然のペナルティー発表に部員達は飛び上がり、慌てて机に向かった。

1時間後。
部員から出された作品を回収し、ニヤニヤと眺める部長。

『うん、優秀作はこれね』
そう言ってテーブルの中央にびっ、と飛ばされた紙を全員が覗き込む。

（文芸部員 羽鳥真奈の作品）

「大変よ、私の大事なクリスティーナが盗まれたわ！」
「落ち着いて下さい坂東さん。私どもで逃走経路に網を張っておりますので、犯人を捕まえるのも時間の問題です」

...3時間後。

「犯人、捕まらないじゃ無いのよ！何してるのよ一体！」
「坂東さん、猫の探索なら猫に任せるのが一番と考えたのですが、猫は気まぐれ過ぎてバリケードになりませんでした」

『...ええ！？羽鳥さん、これ』

『だって、だってえ〜...』

部員からツッコミが入ると同時に泣きを入れる羽鳥さん。

これじゃ、ただの晒しものじゃん。

『さあ、お次はこれっ！』

(文芸部副部長 山下一郎の作品)

「大変よ、娘のハートが盗まれたわ！」

「落ち着いて下さいおじさん。私どもで逃走経路に網を張っておりますので、犯人を捕まえるのも時間の問題です」

...3時間後。

「犯人、捕まらないじゃ無いのよ！何してるのよ一体！」

「おじさん、実は犯人なんて居ないんです。なぜなら、娘さんは鏡に映った自分自身にハートを奪われたのですからね」

『...いや山下、そんな上手い事言ってやった的なドヤ顔されても』

『お前はどこぞの芸人か』

部長はそんな部員のヒソヒソ声に構わず続ける。

『さあ、お次はこれっ！』

(文芸部員 田中晴美の作品)

「大変よ、うちの秋刀魚が盗まれたわ！」

「落ち着いて下さいサザエさん。私どもで逃走経路に網を張っておりますので、犯人を捕まえるのも時間の問題です」

...3時間後。

「犯人、捕まらないじゃ無いのよ！何してるのよ一体！」

「サザエさん、犯人はお腹を空かせたタラちゃんでしたよ。ちょっと署までご同行願えますか」

『何でサザエさんやねん』

『サザエさんネグレクトしてるやん』

『だからドヤ顔やめいって』

(文芸部員 三井明夫の作品)

「大変よ、フォンティーアーナ・ド・フォンシュタイン・デル・ソルアータが盗まれたわ！」

「落ち着いて下さいシャルル・ド・アルバリオーネさん。私どもで逃走経路に網を張っておりますので、犯人を捕まえるのも時間の問題です」

...3時間後。

「犯人、捕まらないじゃ無いのよ！何してるのよ一体！」

「シャルル・ド・アラバマクリスティーナさん、貴女は関係無いでしょう...って言うか、貴女は誰？」

『長っ！名前が長っ！』
『オチて無い、これオチてないやんっ！』
『なんでこれでドヤ顔できんねん！やめいや！』

(通りすがりの漫研部員 ツボイボイス (ペンネーム))
「大変よ、給食費が盗まれたわ！」
「落ち着いて下さいワタナベさん。私どもで逃走経路に網を張っておりますので、犯人を捕まえるのも時間の問題です」

... 3時間後。

「犯人、捕まらないじゃ無いのよ！何してるのよ一体！」
「ワタナベさん、まだドラマごっこやってたんですか？分かりましたから、大人しくご飯食べちゃいましょうね。ああもう、ほらまたこぼして...」

『通りすがりの...っていつ書いたんだこの人』
『って言うか、漫研部員の方がまともにオチとる』
『ああっ、ドアの窓の向こうでドヤ顔してる！ムキーッ！』
『ムキーッて、お前はパーマン2号か』

気が付けば、部室の中は大混乱になっていた。
何故か部外者が数名入っている気もする。
だがしかし、部長はそんな瑣末な事は気にしない。

『さあ、残りも2枚になったし、先に最下位の発表しちゃいましょう！』

(最下位 文芸部員 結城裕也の作品)
「大変よ、私の落としたばかりの薬指が盗まれたわ！」
「落ち着いて下さい組長さん。私どもで逃走経路に網を張っておりますので、犯人を捕まえるのも時間の問題です」

... 3時間後。

「犯人、捕まらないじゃ無いのよ！何してるのよ一体！」
「組長さん、ヤクの打ちすぎアルね。カワイソだけどワタシもイソガシから、これにてシツレイするよ。いい夢見ろよ、じゃあな！」

『...まあこりゃ酷いわな、確かに』
『最後、何で柳沢慎吾やねん、中国人ちゃうんか』
『こらまた高校生らしからぬネタやのう』
『さすがに最下位と聞いたら、ドヤ顔はできんかったか』

『はいはい、これで終了よ！解散、か・い・さ・ん！』
そう言って仁王立ちする部長に、全員がジト目を向ける。
副部長がゆっくりと立ち上がり、部長の横に立った。その迫力にたじろぐ部長。
『な、何よ。何か文句でも...ああっ、だめっ！』

(文芸部部長 相田楓の作品)
「大変よ、私の天才的頭脳が盗まれたわ！」
「落ち着いて下さい相田さん。私どもで逃走経路に網を張っておりますので、犯人を捕まえるのも時間の問題です」

... 3時間後。

「犯人、捕まらないじゃ無いのよ！何してるのよ一体！」

「相田さん、貴女は天才的頭脳なぞ無くても、そのお姿と美しい声だけで十分魅力的ですよ...ああすみません、貴女が余りにも美しいのでつい余計なことを（以下、美辞麗句が続く為省略）」

『ぶ・ち・よーっ！』

全員が真っ赤な顔を上げるが、そこには既に部長の姿は無かった。

いとをかし。

編む（あーむ）

ええと、どうすれば良いのだろう。
僕がそのテレビ番組を見た時、まず思ったのがこれだった。

今僕は、残業帰りの途中に立ち寄った食堂で、少し遅めの晩飯を食べている。
たまたま立ち寄った食堂で、たまたまテレビが付いていて、たまたまやっていた番組に付き合っている彼女が出てくる...って、偶然が重なり過ぎて運命すら感じないだろうか。
僕はただ呆然としたまま、番組を見続けた。

どうやらそれは、編物の素人参加型選手権のような番組らしい。
もともと編物オタクっぽい感じだった優実...ああ、彼女は優実って言うんだけど、だからこういう番組にチャレンジしても何の不思議も無い。
僕が編物にまるっきり興味が無く、現在遠距離恋愛中だという事もあって、途中失格とかしちゃったから気恥ずかしさの余りに教えてくれなかったのだろうか。

『さあて、決勝戦はこの4人で行います！』
おいおい、決勝戦に残ってんじゃん。

優実が他の3人と共に、真面目な顔をして立っている。
テロップを見るが、やはり彼女で間違いない。

...しかし、いくらテレビに写るからって、ちょっと派手な格好すぎやしないか？

『さて、決勝戦の課題は、『大事な人へのプレゼント』です！さあ開始！』
司会者の合図と共に、4人は一斉に動き出す。

僕は優実の真剣な表情よりも、不真面目っぽいからヤダと言って絶対にしなかった茶髪にしている事が気になって仕方が無かった。

...と。
突然携帯にメール着信。
見てみると、優実からだった。

『やっほ💕今何してる？』とだけ書かれたメールに、僕は返信する。
『残業中だよ。どしたの？』
『何でも無いよ～💕来週のイヴ、びっくりするようなプレゼント持ってくるからね💕』

...びっくりするような？
僕はメールを見ながら、首を傾げる。
優実には毎年、編物のプレゼントをくれる。僕は手作りする時間も才能も無いから、お返しに彼女が欲しいアクセサリーを買うだけなんだけど...

『ほう。楽しみにしています😊』
僕はそう返信して、再びテレビを見た。

テレビでは司会者が優実にマイクを向けているところだった。
『これは、セーターですか？』
『はい！せっかくなんで、彼氏にあげるセーターを作ってます！』

『へえ、この短時間に？そりゃ良いね。観てる人の参考にもなるねえ』
感心する司会者を横目に、優実は見事な手際で編物を続けている。

ああそうか。
この番組を観てるかどうか、チェックしたんだ、優実は。
ならば今年のプレゼントは、今テレビで作っているあれか。
きっと、短時間で作ったなんて知られたく無かったんだなあ。
僕はそう納得して、テレビの向こうで頑張っている優実を応援し始めた。

『さあ、結果発表です。チャンピオンは...松谷優実さん！』
テレビの中で歓声が沸き上がるのを、僕は複雑な気持ちで見詰めていた。
なんだこれは。

『いやあ素晴らしい！彼氏がアメフトをやっていたから、セーターにパットを入れて、プロテクターのようなデザインを見事に編み上げています。もちろん暖かさは損なっていません。見事と言うほかありません！』
司会者の大絶賛に、しきりに照れる優実。

いやいや、僕がやっていたのはラグビーだって。
僕がプロテクターなんて着けた事が無いことくらい、優実は知ってる筈なのに。

『で、この人が彼氏ですか？さすがアメフトやってるだけあって、いい身体してるねえ』
司会者はそう言って、優実の隣で今作り上げていたセーターを着た男の肩を叩く。

...いや、いやいや、そいつ誰？
その、いかにもやんちゃそうな、ガタイの良いあんちゃんは誰だ？
なんでそんなうっとりとした表情で抱き着いているんだ？

僕は呆気にとられたまま、トロフィーを片手に満面の笑みを浮かべる優実を観る。

そこに、またメール着信。

『我慢できないから教えちゃうね💕プレゼントはあ・か・ち・や・んだよー💕』

僕はスタッフロールの流れるテレビ画面を見詰めながら、返信する。

『それって、アメフトの兄ちゃんとの子かい？』

僕は送信を完了させると、無言のまま携帯の電源を切り、すっかりのびてしまったラーメンを食べはじめた。

はあ。
明日も残業するかな。

雨（あーめ）

外は、雨が降っている。

彼女は飲み干したカップを遊びながら、ぼんやりと雨に濡れる街を見下ろしていた。

ここは高台にある小さな喫茶店。

窓からの景色が美しい事がポイントとなり、特に窓際の席はいつも客で埋まっている。

その客の中でも、特に良く来店するのが彼女だった。

年齢は20代前半...といったところだろうか。すらり、としたスタイル、すらり、とした頬に印象的な切れ長の瞳が日本女性らしさを醸し出す。

彼女はお昼過ぎにふらりと現れ、コーヒーを何杯か注文した結果、太陽が沈みきった事を確認したかのように7時には店を出る。

そして出る時には必ず、私の頭を撫でてくれるのだ。

失礼、言い忘れていたが、私はこの喫茶店の世話になっている、ゴールデンレトリバーのジョーだ。悪党からはゴールデン・ジョーと呼ばれている。

私の仕事は主に客への挨拶と不審者の対応...まあ要するに、用心棒だ。

ああもちろん、私は容姿にも自信が有るので、客にちやほやされるのも想定内なのだが、彼女の場合は他の客とは少し違う所が有る。

その違いが何なのか解らないからだろうか、私は気が付けば店に来る彼女の姿を目で追うようになっていた。

彼女の毎日のリズムを見ていて、一つ分かった事が有る。

雨の日には、先程のようにカップを遊ぶ事が多くなるのだ。

恐らく彼女は、雨の街に何らかの辛い思い出があるのだろう。そして、その思い出を忘れる事が出来ないでいる。

私の中で、何かが締め付けられるように感じる。

彼女を助けたい、と私のハードボイルドが疼き始める。

私は彼女の席に近づいて、彼女を見上げる。

彼女は悲しそうに薄く笑っていたが、私に気が付くと、優しく微笑んだ。

そして、いつものように優しく撫でてくれる。

よし、私の気持ちが通じ...

「ごめんね、何もあげられるおやつは持ってないの。申し訳無いけど、他のお客さんの所に行ってね」

...通じなかった。

私は仕方なく、定位置に戻る事にした。

まったく、人生はハードボイルドだ。

綾（あーや）

複数で遊ぶ綾取りは、傍から見ていると意外と面白い。

夕食後、嫁の佳奈と10歳になる娘の楓が炬燵を挟んでやっているのを、最初はほのぼのとした気分で見っていたのだが、普通に世間話をしながら毛糸で出来た綾の隙間に躊躇なく指を入れ、するり、と捻ると、それまでよりも更に複雑な別の形に姿が変わる様子に、次第に魅入られていくようになった。

そんな事で驚いている位だから想像がつくと思うが、私は綾取りについてはまったくの素人である。

知っているとしても、せいぜいが先程楓が作ったのが『東京タワー』だ、という知識位だ。

だから、負けず嫌いな二人が、ややムキになって、

「出来た。スカイツリー！」

「ようし...ほら、ティラノサウルス！」

等と自慢げに相手に見せているのを見て、本心から感心するのだ。

そもそも、どんな抜き方をすれば、スポーツカーからティラノサウルスが出来上がるというんだらうか。

「これでどうだ！東京都庁舎！」

「うわお母さん凄い...でも負けないもん。...ほら、キリン！」

いやキリンって、麒麟かい。

私は二人が織り成す毛糸の競演を、飽きることなくいつまでも魅入っていた。

鮎（あーゆ）

私は小学生の頃の記憶をあまり持ち合わせていない。

その数少ない記憶の大部分が、浄法寺の婆ちゃん家での夏休みの思い出だ。

離婚して出ていったはちゃめちゃんな母親のおかげでかれこれ20年は疎遠になっている婆ちゃん家なのだが、だからこそかえって記憶が鮮明に残っている。

その中でも、一番はっきりと覚えているのが、川辺でのバーベキュー大会だった。

婆ちゃん家の夏休みには、本当に沢山の親戚が集まってきた。

確か、従兄弟だけでも10人位は居たはずなので、全員で少なくとも30人位は居たはずだ。

そんな集団がバーベキューをすとなれば、やはり河原しか場所が無かったのだろう。

もちろん、遠出するのも一苦労だった為、結果、場所は手頃に婆ちゃん家の前にある坂を下った先にある、九頭竜川の河原を使う事になる。

確かその日は、親達が朝から食材の確保のため、女性陣は野菜やおにぎり等の準備、男性陣は九頭竜川で鮎釣り、子供達は河原で水遊びと、上を下への大騒ぎとなっていたと思う。

確かこの日は、あまりこっちの婆ちゃん家に来ない父親も、朝から九頭竜川に入り、鮎を釣っていたと思う。

友釣りとは、ルアーや餌を使わずに、罎用の鮎を使って鮎を釣る釣り方で、この友釣りを得意とする父親は意気揚々と鮎を釣り上げていたのを良く覚えている。

実を言うと、遊んでいてテンションが上がりまくったためか、夕方から始まったバーベキュー大会まで記憶が一気に飛んでしまう。

私は炭を使う小さなコンロの前に座り、串刺しになった鮎を左手に、自分の拳位有るおにぎりを右手に持ち、隣に居た父親から鮎の塩焼きのコツを聞いている記憶だ。

周りの大人はにこにこ笑い、従兄弟や我が弟はテンションが上がって走り回り、母親は伯母さん達と楽しそうにしゃべっている。

これが、私が最も楽しかった夏休みの思い出であり、私の婆ちゃん家での夏休みの最後の記憶となった。

あれから25年が過ぎた最近、婆ちゃん家での楽しかった夏休みを思い出す事が多くなった。

当時の従兄弟達も、すっかりおっさんおばちゃんになっているだろうし、...祖父や婆ちゃんも、もうさすがに生きてはいないだろう。

またいつか。

許されるならば、あの家に笑って遊びに行こうと考えている。

両手いっぱい鮎を持って。

あら（あーら）

「...あら、何かしらこれ」

美月が玄関のドアを開けると、目の前に小さな箱が置かれていた。

どう考えても怪しき満点なのだが、だからといって放置しておく訳にもいかない。

美月は腕組みをしてしばし思案していたが、やがて諦めたように肩を落とすと、部屋の奥に姿を消した。

「あら。久しぶりじゃない。どうしたの？」

紗枝はドアフォンのモニター越しに懐かしい友人の姿を見つけ、慌てて玄関のドアを開けた。

紗枝とドアの前に立つ美月は幼稚園からの付き合いで、仲も大変良かったが、最近は互いに多忙を極めていたため疎遠になっていた。

その美月が遊びに来た事に何の疑いも無くドアを開けた。

「いらっしゃ...ん？どしたの？」

ドアの前に立つ美月の様子がおかしい。

いつもの露出の多い服ではなく、更に珍しい事に手袋まで付けている。

そしてその手で恐る恐る持っているのは何やら小さな箱のようなもの。

美月は紗枝の顔を見ると、今にも泣きそうな顔に変わる。

「紗枝ちゃん...助けて...」

紗枝は初めて見る美月の泣き顔に驚きながらも、彼女を部屋に招き入れた。

『あら。珍しい人から電話がかかってきたわね。何かあったの？』

電話の向こうで嫌味たっぷりの台詞を吐くのは、紗枝の知り合いで『鉄の女』を地で行く原田祥子である。

「やむを得ない事情が有ってね。今から伺っても良いかしら」

紗枝はそう告げると、空いている右手の親指でこめかみを軽く押さえる。

背後の美月が気になるが、見れば自然とあの箱が視界に入ってくるので、迂闊に振り向けない。

『...急用のようね。良いけど、高くつくわよ』

紗枝の普段と様子の違う声音に何かを察したのか、祥子の声も真剣身を帯びる。

「覚悟のうえよ。じゃあ今から伺いますから」

紗枝はそれだけ言うと、そっと受話器を下ろした。

「あらまあ」

これまでどんなトラブルにも動じる事の無かった祥子も、箱の中身を見た瞬間、流石に言葉を失った。

持って来た二人も、最初に見た時の様に叫び声は上げなかったものの、目の前で起こっている珍妙な出来事に動揺を隠せないでいる。

「...これ、なあに？」

祥子の質問に、二人は無言で首を振る。

「なんでこんな...モノ？が私の部屋の前に置かれてたのか、まったく解らないのよ」

「あらそう...ふうん...」

祥子は一人頷くと、再び箱の中を覗いた。つられて二人も覗き込む。

箱の中のそれは、敷かれたタオルの上で、丸くなってすやすやと眠っていた。

身長12cm位の、すらりとした美しい男の子。
歳の頃は、17歳位だろうか。

「...裸の美男子よね」

「ええ、美男子よ、間違いなく」

「美男子なんだけどねえ...」

三人は途方に暮れたように、ため息をついた。

蟻（あーり）

私達は国道を北に向かっていた。

北に向かう理由に根拠は無く、単に、寒い所に行けば、奴らも近づけないだろう...という推測でしかない。

至る所に転がっている事故車をすり抜け、ようやく東北地方に入ったのがつい先程の事。

車内に居る私以外の4人も、この3日間の精神的負担からか疲労の色が強い。

無理もない。

食料やガソリンの調達、トイレの時等、油断して車を停車していると、奴らはすぐに車内に潜り込み、私達に襲い掛かってきたからだ。

奴らが一匹二匹程度なら、指で潰してしまえば良いが、何百匹と来られるとどうしようもない。

「...どこまで行けば、安全なんですか」

助手席に居る山根さんがロードマップを手にぼつり、と呟く。

渋谷でバイト中に奴らの襲撃に会い、たまたま店の前に停まっていた私の車に飛びこんできたメイド服の高校生。

この5人の中では最も長い付き合いをしている人だ。

「解らないが、ここに来てようやく事故車の数が減ってきたところを見ると、期待は出来るかも知れないね」

「だと良いけどね」

私の答えに、後部席で寝ている娘の頭を撫でている川田さんがため息をつく。

「まったく、なんであんな狂暴な蟻が大量発生したのかしらね」

川田さんの呟きに、後部席の最後の一人、斉藤君がびくり、と反応する。

軍隊蟻が東京に大量発生して、結果日本の首都は物の見事に壊滅した。

異常気象。生態系の異常。ペットの違法輸入。テロ。

可能性はいくらでも考えつくが、私は少なくとも彼が何らかの答えを持っている筈だと確信している。

私はバックミラー越しに彼を睨みつけた。

「まあ、原因はいずれ解るでしょう。とりあえず今は安全の確保が最優先です。皆さん、車外の様子、しっかり確認して下さいね」

私は全員に念を押すと、再び正面を見据え...そしてため息をついた。

「仙台も、駄目みたい...ですね」

山根さんも正面を見据え、ため息をつく。

街の至る所から立ち上る煙が、私達の行く末を暗示しているように感じて、私は背筋に寒気を感じた。

兄（あーに）

小学生のころ、同級生に『鬼子』と呼ばれていた女の子が居た。
容姿が鬼のようだった...とか、性格が狂暴だった...とかではなく。
問題は、彼女の兄貴だった。

彼女の兄は、まさしく鬼のようだった。
中学生なのに身長は2 m位でガタイも良く、三白眼に薄い眉、低い鼻に大きな口と来れば、今ならともかく、当時の小学生が見れば誰もが震え上がるだろう。
もちろん、彼はこの小学校の卒業生なので、在学当時の伝説が嫌というほど残っている。
曰く、
『5年生の時に、臨海学校先でサメを倒した』とか、
『4年生の時に、暴走族が五月蠅いからと、チーム1個潰した』とか、
『修学旅行先の北海道で行方不明になり、見つかった時には熊の首を手にはぶら下げていた』とか。

まあ真実がどうだったは今でもさっぱり分からないが、少なくともそんな噂のある兄を持てば、例え容姿が可憐で病弱そうで文学少女っぽくても、普通なら敬遠してしまうだろう。
実際、彼女の周りには、少なくとも5年生位になる頃には、僕以外は誰も近寄らなくなっていた。

そう、僕を除いては。

僕と彼女は、保育園からの幼なじみだった。
だから、彼女の兄が本来は優しい人で、今でも真っ直ぐ帰宅すると、庭の家庭菜園を嬉しそうに弄っている事を知っていたし、彼女が本当は明るい子で、家では兄を蹴り飛ばしたりする位活発なものも知っていた。

もちろん、同級生の誤解を解こうと努力はしたが、ウルトラマンや七不思議を信じて止まない小学生相手に、同じ小学生の言葉での説得は通じなかった。
「いいよ、大ちゃんが分かれば」
そう言って微笑む彼女に、僕は初めて挫折感と無力感を感じたんだっけ。

その後、誤解はある事件を境に解けるのだが、その事件のことには触れたくないのでここには書かない。

ひとつだけ言える事は。

悪意の籠った噂は、その対象者の人生を狂わせる事もある...と言うことだ。

幸いに、大人になった今でも、彼女は不甲斐ない僕の妻として、笑顔で過ごしている。

恐らく今日も、兄の遺した庭の草木を世話している事だろう。
あの、優しい微笑を浮かべながら。

在る（あーる）

間違いない。

あの日、確かに彼はここに居たのだ。

私は泣きそうになるのを堪えながら、一人、誰も居ない境内の階段で、手に持った小さな石を見つめていた。

現代に戻って来てから、まず頭を抱えたのが周囲の質問責めだった。

まさか自分が江戸時代末期にタイムスリップしたとは誰にも言えない。

だいたい、タイムスリップが事実だと言う証拠が無い。もし誰かに話して妄想だと否定されてしまったら、反論するだけの確実な何かを持っている訳でも無い。

なので、結局私は記憶障害で押し通して無理矢理退院したのだ。

退院後しばらくは、周囲に悟られないように普通にしていたのだけど、何をやっても、心の何処かに穴が空いているような気持ちになって。

それを自覚する度に、雪之信のまっすぐな笑顔が脳裏に浮かんで来て、更に胸が苦しくなって。

だから、周囲が落ち着いた今になって、彼との逃走中に来たこの神社を見つけた時は本気で身体が奮えたのだ。

そして、今私の手には、あの時雪之信が石段の隅に隠した小さな石が在る。

その表面には、うっすらとではあるが、彼が刻んだ星印が残っている。

間違いない。

彼は...私を愛していると言ったあのまっすぐな男は、確かにあの時代に存在していたのだ。

そして、私の初恋も、確かにそこに在ったと言う事になる。

私は石を強く握りしめると、空に向かって彼の名を叫んだ。

あれ（あーれ）

ある雪の降る夜に何気なく立ち寄ったバーのカウンターに、一組の男女が座っていた。どう見ても『軽い』としか表現できない40代の男性と、シックな装いの30代位の女性の組み合わせで、傍目には男性が一方的に迫っているように見える。

私は退屈凌ぎにちょうど良いか、と彼等の隣に座ると、バーテンダーにカミカゼを注文した。

「だからさあめぐみちゃん、チミは大事なことを忘れてませんか、って言ってんの！」
男はなかなか酔っているようで、呂律の回らない声で女性に絡んでいる。
その、なめ回すようなねちっこい喋りに嫌悪感が増したのか、めぐみと呼ばれた女性は眉をひそめて彼を見る。
「しつこいですよ、手取さん。だいたい私が貴方のような人の何を忘れていたと言うんですか」
彼女の返答に、手取と呼ばれた男性はカウンターにわざとらしく突っ伏した。
「何をじゃないよ。まったくもう、いくら恥ずかしいからって、アレを女性が忘れるはず無いでしょお？」
私の呆れ顔が視界に入ったのか、めぐみさんがこちらにちらっと目を向ける。

ああ、多分あれは、自分で対処出来るから余計な事をするな...と言うサインなのだろう。

私は苦笑いを返し、グラスの中身を一気に飲み干した。
「...さあ、アレって言われても、男みたいだ、って言われている私にはさっぱり解りません」
「まあたまた、めぐみちゃんは魅力的な女性ですよお！たとえばあ...」
男性が語ろうとするのを右手を上げて遮る彼女。拗ねる男性。

...おじさんの拗ねる姿が、ここまで気持ち悪いとは思わなかった。気をつけよう。

彼女はため息をつくのと、諦めたように彼に声をかける。
「で、アレって何ですか？」
「いやだからさあ、オトコにそこまで言わせるのかなあ。ほら、今日は何日だい？」
「2月11日...ですね」
彼の嫌味たっぷりの質問に、にこやかな笑顔で答える彼女。
「解ってるじゃないよ。なら、もうすぐ何の日かなあ？」
ニンマリと笑って質問する彼。

だから顔がいやらしいってこのあんちゃん。

彼の質問に、彼女は前を向き首を傾げる。
成る程、彼女は解っていて、あえて徹底して惚け通すつもりなのだ。
「もうすぐ...ああ、解りました。大事なことですよね」
彼女の返答に、彼の表情が一気に明るくなる。
「そうそう、大事なことだよ！...で、どうするのぉ？」

彼の質問が如何にも舌なめずりしているように聞こえ、私もさすがに手助けしようかと思ったのだが、彼女に目で止められた。
彼女はにこやかな笑顔のまま、荷物を持って立ち上がる。

「そうですね、早急に処理を進めます。アドバイスありがとうございました」

そう言ってレシートを左手で掴む彼女に、慌てた彼が文字通りわたわたと声をかける。
「ええっ、ちょ、ちょっと待ってよねえ。チミは何の話をしてるんだい？」
彼女はため息をつくのと、右手の平でカウンターを勢い良く叩いた。

「決まっています。もうすぐとは、年度内決算の事ですよね？確かにおっしゃる通り、こんな所でのんびりしている場合ではありませんでした。では失礼します」

彼女は一気にまくし立てると、背筋を伸ばしてまっすぐに出口へと向かう。
彼は何が起きたのか把握出来ていないのか、ぼかんと口を開けて彼女を見つめている。

上手い事やったな...と私は苦笑いしながら、彼女が先程カウンターに叩き付けていった紙切れを手取る。
それは、彼女の名刺であろう。いつの間に書いたのだろうか、『この様な良い店で騒いでしまい、ご迷惑をおかけしました』というお詫びの言葉が添えられていた。
私はその手紙をコースターの下に挟むとバーテンダーににやりと笑い、ブラッディメアリーを注文した

泡（あーわ）

私の記憶は、まるで水面に浮かんでくる泡のようだ。

若い頃は炭酸水のように次から次へと浮かんでくる記憶が、歳を取るごとに、まるで炭酸が抜けるように、近い記憶から少しずつ浮かんでこなくなり、今では何を覚えていて何を忘れたのかさえも解らなくなった。

だから私は、この何処に在るとも知らない施設の中で、椅子に座っている。

ぼんやりしている訳では無い。

泡が浮かんでくるのを待っているのだ。

それも、とても大事な泡を。

幸いにも、残りの人生、私には他にすることも出来ることも無い。

残された時間もたっぷりある。

まあ、例え明日あの世に旅だったとしても、あの世でも時間はたっぷりある筈だ。

これまで一世紀近く生きてきて、少なくとも悔いは無い。

いや、悔いが有っても、覚えていないだけか。

「...さあん、何か良いこと、有ったんですかあ？」

すぐ傍で誰かの呼ぶ声が聞こえ、私にはこりと微笑んだ。

案（あーん）

「いや、良い案が有るんだよ」
ファミレスの片隅で、向かい側でパフェスプーンを振り回しながら、雄一が楽しそうに切り出した。
俺はいつも通りアメリカンに砂糖を二杯入れながら、はいはい、と答える。
「いや、はいはいは無いだろ。俺の中ではマイベストアイデアなんだからさ」
雄一とは小学生からの長い付き合いだ。マイベストアイデアなんてこれまで腐る程聞いている。
「なんだよ唐突に。だいたい何についての『良い案』なんだよ。いきなりすぎて訳分かんねえよ」
そこまで吐き捨てるように言って、しまった、と苦いものが込み上げてきた。
予想通り雄一は俺が食いついた、と勘違いし、ニヤリと笑う。
「決まってるじゃないよ、女さ、おんな」
また型にはまった見事な答をくれるもんだ。
俺は大袈裟にため息をつく、とわざと真剣な表情を作って雄一を見つめる。
「お前さ、そろそろ自分の人生についての良い案を考えたら？もう良い歳なんだし」
俺の言葉が聞こえているのかいないのか、雄一はニヤニヤしながら俺を見ている。
「まあ良いじゃねえか。聞きなってる」
ああもう、聞いちゃいねえ。
「ったく、わかったよ、どんな案だよ」
俺の返事に納得したのか、雄一は椅子に身体を預けるように座り直す。
「良いか純也、俺らはこれまで、女にがつつきすぎだったよな」
「...まあ少なくともお前はな」
俺の返事に肩をすくめる雄一。
「要はやり方がまずかった訳だ」
「まあそうだよな」
そりゃ半ば力ずくのナンパなんて、うまくいくどころか、下手すりゃ警察のごやっかいになりかねない。
「だろ？だからやり方を360度変える」
「いや雄一、360度じゃ何も変わってな...」
俺の言葉を右手を振って遮る雄一。
「要はさ、今までががついて失敗ばかりだった訳だからさ...」
「だから？」
雄一はそこで一旦話を区切り、パフェのグラスを掴んだかと思うと、残りを一気にすすり、グラスを置いてニヤリと笑う。
いや口の回りが真っ白だって。カッコついて無いって。
「だからさ、モテル仕事に就いてやりゃ、女から寄ってくるんじゃないかね？って話よ...おい、純也、純也君、聞いてんの？...ってなんで立ち上がるのよ、なあちょっと待っておい...」

言う（いーう）

「...言うよ。言えば良いんでしょ？」

三枝はとうとう観念したのか、ため息とともに、吐き出すように呟く。

そんな三枝の様子に満足したのか、晴香がにっこりと頷く。

「そう。言えば良いのよ。早く言いなさいな」

まるで脅迫するような晴香のもの言いにテンションが少し下がったが、でも悪いのは三枝なんだから仕方が無い。

「ってかさ、なんであんたにそんな風に言われなくちゃダメなんよ。あんた関係ない...」

「言うの？言わないの？」

ここに来ての最後の抵抗も、わが高の女帝の迫力には勝てないのか、ふん、と一言呟くと、のけ反るように座り直した。

（まったく、あんな事をするから...）

私はつい出そうになるため息を、既に冷えきったブレンドコーヒーと一緒に飲み干す。

「良い？あなたが学内でつつもたせ行為を働いたのは間違いないのよ」

「へえ、女帝でも『つつもたせ』なんて言葉知ってた？どこで聞いたんですかぁ？まさか女帝も...」

「菊地秀行の『魔界医師メフィスト』よ。下品だったけど面白かったから読んでみたら？それより人の話の腰を折らないでよ。まだ質問の途中なんだから」

いや、腰を折りまくってるのは晴香、あなたよ。

「三枝さん、あなたの事は正直どうでも良いの。私が知りたいのは、あなたが私を襲わせようとした連中の正体よ。うちの生徒じゃ無いのは間違いないわよね？」

一気に畳み掛けた晴香の勢いを、水を飲んでやり過ごす三枝。

そのふてぶてしい様子に、晴香は顔を真っ赤にして立ち上がった。やばい。

「ちょっと、晴香、アレはダメだって」

慌てて止めようとした私に「トイレに行ってくる！」と言い残し、晴香は立ち去った。

「なにあれ、おっかしいんじゃない？」

三枝の馬鹿にするような物言いに、流石の私も呆れるしかなかった。

「何よ、あんたもあたしが悪い、って？」

三枝の攻撃的な口調が、今は正直煩わしい。

「なんか言ったら？女帝のしもべなんでしょ？ねえ」

「三枝、あなたね、このままだと面倒なことになるよ」

私の返答に、三枝はぶすっとした顔でそっぽを向く。

「その様子だと知ってるんだよね。中原くんの末路のこと」

中原くんの名前を出した途端、三枝の身体がびくつ、と震える。

「なんで晴香が『女帝』って呼ばれてるか、もう知ってるんだよね？なら、早く...」

「あいつらもヤバいんだって！バラしたなんて知られたら、あいつら...」

三枝はそこまで言って、黙り込んだ。

馬鹿は馬鹿なりに、苦労してたんだね。よしよし。

「大丈夫。そいつらに反撃する暇はあげないから。ね？」

私の言葉に、三枝は大きなため息をついた。

「全く、無駄な時間と体力の浪費をさせてくれたもんね」

外に出てすぐ晴香がぼやいたので、私は携帯を閉じて晴香を見つめた。

「晴香、四天王には黒幕のこと伝えたよ。もうすぐタグッチが来るから、三枝の事はタグッチに任せるから」

「田口先生？あの淫乱保健教師で大丈夫なの？」

淫乱って。

「あのねえ、晴香のその菊地秀行的視点、やめなよ。変な誤解をされるから」

「あら、良いじゃない。最高よ、菊地秀行」

「とてもセレブとは思えないご意見ですこと」

私の皮肉に、肩を竦める晴香。まったくもう。

「...ってもしかして、『つつもたせ』の意味、本当に解ってる？」

私の問いに、呆れたような表情を見せる晴香。

「当たり前じゃないの。女性と性行為をした男性が、ヤクザ達に捕まって、臓器を抜き取られるのが『つつもたせ』じゃない」

ふふん、と自慢げに笑う晴香に、私は大きくため息をついた。

家（いーえ）

最近、我が家が脅威に晒されている。

私の仕事は夜間作業が中心で、昼間は寝ている事が多いのだが、そんな昼間に突然誰かが嫌がらせをしてきたのだ。

どんな生き物でも寝ている最中に真上からドリルの音がしたら、間違いなく飛び起きるだろう。

不幸なことに、私には我が家の屋根に上がる手段がなく、誰がそんな事しているのか追及する事ができない。

しかも、この睡眠妨害は不定期に突然行われるため、事前に対処もできない。

おまけにここは借家のため、大家がやっているなら口出しもできない。

私は打つ手を何も考え付けないまま、我が家族とともにその脅威に怯えていた。

ドリルの脅威に晒され始めてから、1週間が経った。

現時点で我が家の天井は特に変わった様子は無いため、私も今では冷静に状況が判断出来るようになっていた。

どうやらドリルは我が家の隣で作業を行っているらしく、その振動が我が家にまで伝わってきたようなのだ。まったくもって迷惑極まりない。

と言っても、隣に苦情を言いに行ける訳でもなく、悶々とした気分でしたところ...それが聞こえてきた。

最初にそれを聞いたのは、私の30番目の子供だった。

子供に起こされて、隣に接している壁の傍に連れていかれた私は、壁の向こうから何かを抜き取る嫌な音と、微かな叫び声が聞こえてくる。

隣で何か恐ろしい事が起こっているのではないか？

私はあまりの恐怖に、思わず叫びそうになった。

いや待て。叫び声？

ありえない。

私達は声なんて出せないのだから。

「はあい、山口さん、口を濯いでくださあい」

はっ、と気が付くと、目の前にマスクを付けた女性が居た。

女性は目だけでにっこり笑うと、何かを片付け始める。

「大丈夫ですかぁ？虫歯の神経は無事抜けましたから、もう安心ですよぉ」

ああ、そうか。

虫歯の治療に来ていて、痛みで気を失ったのか。

私は起き上がり、口の中を濯ぎながら、治ったらもうこんなヤブには二度と来ないぞ、と固く決心していた。

烏賊（いーか）

僕は、烏賊が嫌いだ。

焼くと妙に甘いし、刺身だとふにふにして噛みづらく、フライだと烏賊の意味を感じない。

大体、あんな何から出来ているか見た目では想像ができないモノを旨いと思える神経が解らない。

だから、今目の前で暴れているこの巨大な軟体生物を見ても、とても旨そうとは思えないのも納得出来る話だと思わないかい？

「ジョシュ、てめえ、何ぶつくさほざいてやがる！」

おやぶ...いやいや、船長がモリを手に僕に叫ぶが、こんな気持ち悪いモノを相手にしよう、って言うこと自体がありえない。

「お...船長、無理ですって！3mはありますよこれ！さっきの嵐でみんな流されちゃって、僕達しか居ないんですよ！？」

悲鳴に似た叫び声を上げる僕を、船長が物凄い形相で睨みつける。

「それでもやるのが海の男ってもんだろが！」

「親分いつの間に海の男になったんですか！」

「うるせえ、しのごの言わずたつとコイツ始末しやがれ！」

なんて無茶振り。

こっちは腰が抜けちゃって動けないってのに。

「だから俺、烏賊は苦手なんですよ！」

「これは烏賊じゃねえ！く、クラゲだ！」

「ああ成程クラゲなら気持ち悪くないですね...ってこんな巨大なクラゲかえって気持ち悪いじゃないですか！」

座り込んだまま叫び続ける僕を、顔を真っ赤にした親分が睨みつける。

わあ、ユデダコだ。ユデダコ対烏賊の洋上大決戦だ。

「いいから何とかしろ！お宝は目の前なんだぞ！」

ユデダコがそう叫んだ瞬間、クラゲだか烏賊だかの脚がユデダコに巻き付く。

やばい、と思ったその時、僕の視界をでかい何かが遮る。

そして、丸太かなにかで撲られたような痛みが顔面を襲い...

...僕は気を失った。

息（いき）

何かがおかしい。

恐らくリングサイドで観ていたほとんどの観客が、同じ事を感じていたはずだ。

いつも通りの3 VS 3の試合。

いつも通りの3人のはずなのに、今夜は何か違っていた。

確かに相手は現在トップ独走中のユニットのメンバーだし、彼らも普段から気合いをこめて試合に臨んでいるのは間違いないのだが...

「まっちゃん、なんか今日は3人とも、怖いね」

隣で同じように彼らを応援している洋ちゃんが、何故か恐る恐る私に囁いてきた。

「うん...なんか、息が詰まる...」

つい私の声も、何故か囁き声になる。

考えてみれば、試合開始直後に彼らが突っ掛かっていった時から様子がおかしかった。

攻撃の一つひとつもいつもより激しく、試合をしていると言うよりも、力任せに暴れているようにしか見えない。

「なんか...リアルの時みたい...でも、当たり前だよな。こんな事になっちゃったら...」

洋ちゃんのつぶやきに無言で頷く私。

そう。彼らがキレても仕方のないのだ。

私はそう思いながら、彼らの反対側のコーナーで彼らを睨みつける一人の選手を見た。

去年不調のため負け続け、結果怪我で休場を余儀なくされていた彼。

前回の試合後に、相手ユニットの新メンバーとして電撃復帰を宣言した彼。

リーダーだった、そしてその帰りを待っていた彼に裏切られた彼らの怒りは、並大抵のものではないはずだ。

目の前ではC Kが彼の名を叫びながら両手でHAGEとD K 2人の頭を掴み、引っこ抜くように背後に放り投げ、その2人の頭部目掛けてY Kの2人がえぐい角度の低空ドロップキックをみまっていた。

隣で洋ちゃんがひっ、と悲鳴を上げるが、私は彼らから目を離せない。

会場に充満した重い空気のせいかな、息ができない。

2人がぴくり、とも動かないため、相手ユニットはただ一人。

ぐったりしている2人をフォールしないC Kに何かを感じたのか、雄叫びとともに突っ込んでいくが、逆にC Kのラリアットがカウンターで入り、倒れかけたところにヤマPのスピアーが入り、隙間なく...え？

「じ...ジョン・ウー？」

「うそお...」

かけ声など一切ない、無言で仕掛けられたジョン・ウー。

彼らが倒れている3人を足で踏み付けると、レフェリーが3カウントを取り、試合終了。

彼らは3人を踏み付けたまま、どよめく観客の声を掻き消すような雄叫びを上げる。

それはどこか、悲痛さを感じさせる叫びで、私は胸が苦しくなった。

行く（いーく）

いつもこの時期になると、僕はあの駅のホーム一面に舞う桜の花びらを思い出す。
電車の到着アナウンス、暖かな春の日差し、強めの風に乗って雪のように舞い降る桜の花びら。
そして、目の前には寂しげに微笑む真由美の姿がフラッシュバックし、僕の胸の奥がちくり、と痛む。

...約束したのに。
言われた記憶の無い言葉が、桜舞い散るホームに佇む彼女の口から放たれる。

...ずっと一緒だって言ってくれたのに。
...寂しくさせないって言ってくれたのに。
...どうして。どうして。どうして...

脳裏を次々と過ぎる彼女の言葉に、私は激しく頭を振る。

ただ静かに微笑んでただけで、彼女は一度もそんな事は言わなかった。
ただの私の悔恨でしかない。

私は思いを振り切るように小さく深呼吸をして、目を閉じて気分を落ち着かせる。

しっかりしろ。
あの日、新天地に行くこと決めた事は後悔していないはずだ。
それに、今もあと少しで行かなくちゃいけないのだから。

私は目を開き、ゆっくりと下を向く。その先には、現在の彼女の姿がある。
その美しくドレスアップされた姿に、私の胸の奥が締め付けられたように苦しくなる。

胸の奥だってさ。
胸の辺りに手を押し付けながら、私は苦笑する。
もう、胸どころか、身体も無いと言うのに。

あの日、新天地アメリカに向かう途中、乗っていた飛行機が太平洋上で墜落し、私の身体は消滅した。
あれから5年経ち、当時は自殺までしかけた彼女も立ち直って、ようやく幸せになろうとしていた。

これで安心して行く事が出来る。
今の彼女の隣に自分が立てないのは正直悔しいけど、彼女をあそこまで立ち直らせてくれた彼なら、私以上に彼女を幸せにしてくれるだろう。

ふと気が付くと、私の身体がぼんやりと輝き始めている。
どうやら時間のようだ。

私は苦笑しつつ、最期にもう一度下を見下ろし...目を見張った。

彼女が驚いたようにこちらを見上げている。

まさか。
私が見えるのだろうか？

ならば。

私は小さく深呼吸をすると、泣きそうになっている彼女に向けて微笑んだ。

私の微笑の意味を理解したのか、彼女も泣きそうになるのをぐっと堪え、微笑みを返してきた。

今度は。今度こそは。

心から幸せそうな微笑みだった。

池（いーけ）

『うちの池

3年1くみ 佐々木かずま

ぼくのうちのうしろの山には、おっきな池があります。

どんだけおっきいかというと、池の回りを思いっきり走ったらまんなかくらいでつかれちゃうくらいです。

うちの池は、とこのまから良く見えます。

おじいちゃんがいなくなってからはみんなほったらかしにしてるので、草とかいっぱいはえてます。

ぼくは、その池がこわいです。

なので、夜はこわくてとこのまには行きたくありません。

ときどき、夜に、池からへんな声がします。

もしかしたらおじいちゃんの声かもしれないけど、おかあさんに聞いたらおこられたのでこわくて聞けません。

ぼくは、うちの池にはおばけがいると思います。』

（数馬くんの作文発表から3日後。佐々木家の裏山にある貯水池から、行方不明になっていた佐々木良蔵さん（83歳）の遺体が発見された）

囲碁（いーご）

僕が縁側を歩いていると、床の間からおじいちゃんが顔を出して手招きしてきた。

『おお数馬や、囲碁でもせんか？』

僕は囲碁が苦手なので、わざと顔をしかめて大きく首を振った。

『やだ。おじいちゃん強いもん』

『まあまあそう言わんと。ハンデ付けるから。な？』

おじいちゃんは本気で強いので、ハンデなんて貰っても勝てるとは思えないが、おじいちゃんがそこまで食い下がるのには何か理由が有るのかも知れない。

『んもう、ちょっとだけだよ』

僕の返事におじいちゃんは満面の笑みを見せた。

囲碁とは、要するに陣取りゲームだ。

駒を四方から取り囲む事で、駒と、その駒が居た土地、そして自動的に取り囲んだ四方の土地をも手に入れる事が出来る。

そして最終的には、どれだけの土地を手に入れる事が出来たかで勝敗を決める訳である。

現在、あと残り4分の1位で、ハンデを貰ったにも関わらず、盤上の領地の半分くらいがおじいちゃんに取られている。

『やっぱりこうなったじゃん...』

僕は涙目になりながら、ぼつり、と呟く。

おじいちゃんは困った様な顔で僕を見つめていた。

『まだ諦めちゃいかん。お前は良く頑張るとるよ、数馬』

『でも...無理だと思うけどなあ...』

僕はため息をついて、再び盤上を見る。

『のお、数馬や』

『ん？なに？』

おじいちゃんの声に、僕は顔を上げずに返事をする。

『お母さんのこと、許してやってくれないか』

その瞬間、全てを思い出した。

おじいちゃんが昔、おばあちゃんを井戸に突き落として殺しちゃったこと。

その事を知ったお母さんが、おじいちゃんを貯水池に落として殺しちゃったこと。

貯水池から聞こえる悲しげな声。

井戸から現れた女の人の悲しげな様子。

『全て、わしが悪かったんだよ。他の男と逃げようとしたあいつを許せなかったわしの、な』

そうか。これは夢だ。

『敬子は母親を愛していた。8歳位までしか一緒にいなかったとしても、それでも大好きだった。いつか帰ってくると信じていた』

あれから10年。

もうすぐ母親も出所する。

『あれと同じ運命を、数馬、お前にもしよわせてしもたが...』

お母さんのせいで、学校生活は地獄だった。

苗字を亡くなった父方の田中にし、大学に入ってから名前も和馬に変えた。

僕は既にお母さんとは違う人生を歩んでいるんだ、おじいちゃん。

『...お前はまだ取り戻せる。敬子は良い子だ。助けてやってくれないか。頼む』

そう言って深々と頭を下げるおじいちゃんを、僕は見つめるだけしかできなかった。

石（いーし）

今日け我が大学の大学祭初日

僕達写真部も、例年通り写真部を室協オスために、昨夜キアトを下への大騒ぎだったが、
頑張った田中先輩あっておス程度満足出来ス什トがりになっていた。

特に今回の日玉は、特大サイズの巨大写真である

厚み枚分の大きさの印刷紙を壁に貼付け、映像機の中をプロジェクターのように印刷紙に
当てて露光し...とまあ、傍目には写真を現像しているとは思えない作業を徹夜で行った
自信作だ

会場入口直前正面にその作品が立てられているため、入口から離れた所で、巨大な
我が愛犬が愛くすしい表情でお嬢さんを見つめてくれるという演出も自分なりに満足出
来る仕上がりになっていると思う。

と、言う訳で

朝の爽やかな空気に匂まれた今の僕は、満足感と疲労感とでぼんやりしながら、大学の
メインストリートをぶらぶらと歩いていた

メインストリートの脇には他のサークルの仮設テントが立ち、それぞれの準備で忙しそ
うにしている

僕はその様子を眺めながら、カメラを忘れたアトを少し後悔していた。

（アホもまた、大学祭の風物詩だよか、ん？）

生協会館の前通りまで来た時、ふと工学部校舎側に目を向けると、テントの隙間に小さ
な立て看板が立っている

不意に思っ近づいてみると、そこには縁石に体育座りしているみすぼらしい姿の男子
学生が...

「先輩？！なにやってんですか？！」

僕の叫びに、のろりと顔を上げる田中先輩。

「決まってる、庄出してるんだ」

平然と言っのける先輩の足元を見ると、確かにブルーシートの上に何かを並べている

その何かを見て、僕は思わず言葉に詰まった。

「あれ、石、ですよ」

「ああ、石だよ」

近づいて確認したが間違いかい、大小様々な石が、比較的整然と並べられている。

「あれ、なんか特別な石なんですか？」

僕が石を指差して質問すると、先輩は早めたかのように言葉を締めた

「そんな訳ないだろ、兄羽川の河原で落ちてた普通の石だよ、普通の石」

さも当然と言わんばかりに答える先輩に二の句も継げない。

いや、あれは無いだろ

子も子もアの先輩、あれまでも様々な奇行を繰り返し、一部の学生には伝説になってい
る人ではあるが、あれはかい

「つまりア言う事ですか？先輩は僕達が徹夜までしてやっていた写真部の展示準備
をほったらかして、兄羽川まで出かけ、この...なんの変哲もないただの石を拾ってきて
アアに庄を広げたよ」

僕の若干怒気を令んだ吉にも構わず、平然とした顔で頷く先輩。

いやもうほんとに有り得かい

「太休、太室に許可もらったんですか？！こんな...ええ？500円って...こんな目立つ
場所って庄広げちゃって」

「許可？ ああ、貰ってないかあ」

駄目だ、頭が痛くなってきた

「先輩　いくら先輩でもそれじゃ駄目じゃかいかなかあ」
「かんだよ　良いんだよ　別に誰も困らないんだから」
先輩は早めたようにそう言うと　追い払うように右手を振った。
「ほらほら　商売の邪魔すんな。じゃあな」
駄目だ　問いちゃいわえ
僕はわざと大きなため息をつくと、ゆっくりと立ち上がった。
「あ　ちょっと待て」
立ち去ろうとした僕に　先輩が舌をかけてきた
「何ですか？作品から問に合ってますから大丈夫ですよ」
僕の返事にまた舌を舐める先輩
「出すわけかいだス　作品かんで」
「かんで　ってせんぱ　っ！！」
奴喰えうとした僕に　先輩は無言で右手を差し出した。
その手の中には、小さな石がひとつ。

まさか。

「はい　５００円か」
先輩はそう言うと、満面の笑みを見せた。

椅子（いーす）

私が陽子の部屋に入ると、彼女はリビングの中央で仁王立ちしていた。

「...ドアホン鳴らしたんだけど。居たんなら出てくれれば良いのに」

私は鞆をリビングの隅に置いて、彼女の横に立つ。陽子は聞いていないのか、こちらをちら、とも見ずに、黙って一点を見つめている。私もついづられて同じ方を見ると、そこには椅子が一脚。

「お。新しい椅子、買ったんだ。なんかかっこいい椅子だな」

私がそう言って椅子に近づこうとすると、陽子は手を伸ばし私を制した。

「だめよ。近づかないで。けがれるから」

「けっ、けがれるって...」

予想外の返答に思わず陽子を見るが、彼女は厳しい表情のまま椅子を見つめている。

「なんか、まるで、その椅子が悪さしないように監視してるみたいだな...」

そこまで言って、ようやく彼女の言う『けがれ』の意味が解った。

「...ああ、『穢れる』ね」

またその類いのご依頼ですか...と言いたいのをぐっと堪え、私は再び椅子を見る。

誰がどう見ても、何の変哲も無い、デザイナーズチェアにしか見えないが...

「このお札はいつものと違うようだけど、陽子が貼ったの？」

私の問いに、陽子は首を振った。

「いいえ、既に貼ってあったの。紋様からして中国の術師が貼ったのでしょけど、少なくとも今は効果が無くなっていると思う」

「そうなのか？こちらから見てもとりたててナニカが取り憑いているようには見えないけど」

ぼそりと呟く私を呆れたように見つめる陽子。

ああそうですよ。

付き合い始めて3年になるが、相変わらずそっちの知識や能力についてはとんと疎いですよ。

「...これが届いたのは昨夜のこと。嫌な予感がして、触れずにここまで引きずって来たのだけど、背景が解らないから打つ手が何もなくて」

「畏にハマった、って事か...ん？じゃあまさか、まる一日そうしてたのか」

薄く苦笑する彼女の顔が少しやつれているように見えるのはそのせいだ。

「...あの宅急便の人、大丈夫だったのかな...」

彼女の呟きに、先程の事故のニュースを思い出したが、あえて何も言わない事にした。

「何か、打つ手は無いのか？...いや、俺に出来る事は無いのか？」

私の問いに、彼女は力無く頷く。

「この椅子に関するデータが有れば良いのだけど、調べるだけのデータも無いのよね...」

そう言う彼女の声も力が無い。ここまで意気消沈している彼女は初めてだ。

うん、そうだ。

こんな時に助けられなくて、何が恋人だ。

私は黙って鞆からノートパソコンを取り出すと、心当たりをひたすら検索し始める。

「馬鹿にするなよ。こう見えても建築士の端くれだ。こんな目立つデザイナーズチェアならすぐ調べてやるって」

私の言葉が聞こえたのかどうか。

前を向く彼女の口元が、少し緩んだように見えた。

さあ、反撃開始だ。

磯（いーそ）

誕生日という事で、今日は私の約30年前の思い出を話そう。

小学4年から5年の夏休みのこと。親父の鶴の一声で、海に行く事になった。

そして向かったのが、越前海岸の磯場。

砂浜じゃ無いんだ...と少しがっかりしている私を尻目に、せっせと何かを準備している親父。

その頃親父は船釣りに興味を持ち、この時も何処からか手に入れてきたゴムボートを使ってみたかった...と言うのが本心だったらしく、さっさとボートを完成させると、母親に弟の弟の面倒をまかせ、「深い所に気をつけるんやざ」

と言い残して、さっさと沖に出て行った。（あくまで記憶の中のイメージです）

まだその頃は弟も小学1年くらいで、さすがに磯場で遊ぶには覚束なく、自然と母親は弟に付きっ切りになっていたため、私は仕方なく磯の辺りで浮輪を使ってばちゃばちゃ泳いでいた。

私は当時（も現在も）所謂カナヅチで、浮輪が無いと泳げない子供だったのだが、少なくともこの日までは海で泳ぐのが大好きだったと思う。

そう。この日、あの出来事さえ無ければ。

それはお昼前くらいの時間だったろうか。

記憶に有るのは、母親の、

「弁当食べるんやで、はよ戻ってきねま〜！」

と言う声だったと思う。

（わーい、おべんとだ）

とか浮き立ちながら、岸部に向かって足をばたつかせた時だ。

突然視界が水でいっぱいになったかと思うと、すぐに辺りが真っ暗になった。

どれくらい暗闇の中に居たのだろう。

ふと気がつくと、目の前には青空と親父のほっとしたような顔があった。

その後、何年か後に親に何が有ったのか聞くと、苦笑いしながら以下のような有り得ない話をしてくれた。

・母親が岸部に泳ぎ始めた私を見ていた所、突然浮輪を掴んでいた両腕を上へ上げ、バンザイ状態で海にスポンと沈んだため、慌てて海に飛びこんだが、浮輪の下には私の姿が無かった。

・親父は岸部の異変に気づき、あわてて投げ入れていた釣竿を巻き始めたのだが、何か大きいものが釣れているらしく、なかなか巻き上がってこない。釣り人の習性で釣り糸を切っては駄目だと焦りながらも慎重に巻き上げた所、釣り上がったのは海藻まみれの私だった。

確かに、気がつくとボートの上だった訳だし、くそ真面目な親父が嘘や冗談を言う筈もない。二人が言っていたことにもつじつまはあっている。

いやでも有り得ない話だった。

恐らく気がつかずに泳ぎ疲れていた私が浮輪を放し、海流に巻き込まれた時に、たまたま親父の釣り針に海水パンツが引っ掛かったのだろうが、そんな話が有り得るとは思えない。

しかし今考えてみても、直前に足に何かが触れた気はしたが、海藻の感触だった筈だし、それが絡んだ感覚も無かった筈だから、何かに引っ張られたと言うことはない。

やはり、偶然引っ掛かったのだろうか。

しかし。

私は覚えている。

目の前が真っ暗になる寸前に微かに聴こえた笑い声。

それ以来、私は海で泳いでいない。

板（いーた）

ある晴れた日曜日。

暖かな日差しが優しく照り付ける中、私はホームセンターの駐車場の一角で観衆に笑顔を振り撒いていた。まあ観衆と言っても20人程度の少人数ではあるが、これから行うイベントの内容から考えると、まあ妥当な人数だろう。私はおもむろに腕時計を見る。

うん、時間だ。

私は一人頷くと、観客に目を向ける。

3組の家族と2組の老夫婦、1組の若夫婦。

うん、理想的な組み合わせだ。

私は観客に見えないように軽く深呼吸をした。

「はい、時間となりましたので、本日のDIY実演会を始めたいと思いまーす！」

ここで観客からのまばらな拍手。無理しなくて良いのに、有り難い事だ。

「今日はDIYコーナー主任、山倉恵輔が担当致します。...あ、今回は実演のみですので、肩の力を抜いて、のんびり見ていて下さいね」

私は軽口でそう言うと、左手に持った書類を右手の甲で軽くはたいた。

「本日実演するものなのですが...実は特に決めていません」

私の発言に多少のどよめき。

うん、今日は暖かいせいか、反応が良いな。

「最初は色々考えていたんですが、外があまりにも良い天気なので、私の得意技を皆さんに御披露することにしたいと決めました」

私はそう言うと、後ろに立てかけてある様々な板に手をかける。

「こちらに、うちで販売している様々な板がございます。本日はこの板を使って...」

ここで反対側の手を広げて観客に向けて伸ばす。

「...皆さんから一つ頂いたお題で、何か作ってみたいと思います！」

途端にどよめく観客。

ちょっと反応が良すぎるな。

もしかして、今日の観客はDIYマニアばかりか？

私は笑顔の裏で、難易度の高いお題が出ませんようにと強く願った。

「早い者勝ちです。何かご希望はございますか？」

私に問われ、観客はそれぞれの顔を見合わず。やはり遠慮するか。

「因みに出来上がったものは、今回だけ特別にどなたかにプレゼント致しますから、ご遠慮なくどうぞ！」

私は笑顔と共に奥の手を発動する。

途端に観客の表情が変わった...が、やはりまだリクエストは来ない。

仕方ない、椅子でも作るか...と諦めかけた時、

「いすほしい！いすつくって！」

と子供の声。

見上げると、正面に体育座りしていた小学生がにっこり笑っていた。その子に近づいてしゃがみ込む私。

「君が座る椅子かい？」

私の問いに大きく頷く小学生。

「いつ座る椅子かな？ご飯用かい？テレビ用かい？」

「ごはん！」

私はにっこり笑って頷くと、すっと立ち上がり、

「注文承りました！では早速、開始致します！」

まあそんな訳で、私の大道芸が始まった。

なお、途中に見せた華麗なテクニックや椅子を作る際の重要ポイントの解説等は、企業秘密のため割愛させて頂くが、少なくとも観客は私の大道芸に大いに湧き、数分後作成が完了する頃には観客の数が倍近くに膨れ上がっていた。

「...と、言う訳で。完成です！」

私は掛け声とともに、出来立ての椅子を観客に披露した。

申し訳ないくらいの盛大な拍手と、リクエストしてくれた小学生の歓声。

私がこの仕事をやっていて良かったと思う瞬間である。

私の名前は山倉恵輔。板一枚で何でも作る『即興D I Y』を特技とする、流れの3流インダストリアルデザイナーである。君の店でも必要になったら呼んでくれ。いつでも参上するよ。

...あ、チップと必要経費、それと板を一枚忘れずにな。

位置（いち）

ある冬の日。

地下鉄の席に座ってうつらうつらとしていた時、正面からお兄ちゃんの声が聴こえてきた。

「...だからよ、ケータイによ、『位置情報サービス』って有るべや」

目だけをちら、と上げて見てみると、そこにはいわゆるチャラ男が2人。

何の話をしているのだろう。

「おう、あるよな」

「桜前線追っかけるのによ、あれ使えば良くね？」

...は？

何を言ってるんだ、この兄ちゃん。

「なに訳わかんないこと言ってんのよ。どうやんのさ、そんなの」

呆れたように返事する相方にニヤリと笑いかけるチャラ男。

「んなの簡単しょ。九州とかで桜が咲いたらさ...」

そこで一旦言葉を区切り、相方を見るチャラ男。

「咲いたらさ？」

相方のおうむ返しに、どや顔になるチャラ男。

「その桜にケータイくっつけてやんのよ」

...ん？桜に？

「おお！すげえ！」

「すげえっしょ？後はGPS使ってやればよ、桜がどこに居るかすぐわかるっしょ」

いや、おいおい。

「だよな！そうすりゃ俺らの花見の準備もカンペキっしょ！」

私は高笑いする2人をチラ見しながら、どうつつこむか正直迷っていた。

車内では静かにするよう注意するか？

...それとも桜前線は桜の木そのものが北上してくる訳じゃないことをつっこむか？

迷っている私の前で、2人はいつまでも高笑いしていた。

何時（いーつ）

何時からか解らないが、最近どうもおかしい。

もちろん、この場合におかしいと言えば、私自身の事に決まっている。

私がおかしいと私自身が認識出来る位だから、多分他の人達から見ても一目瞭然なのであろう。

もともと周囲から変人扱いされてきた私なので、本来そう言った類の視線は気にしないのだが...どうも今回は勝手に違う。

他人の視線が気になるのだ。

人に変な目で見られるのが、とても恥ずかしいのだ。

これも私がおかしくなっているのが原因なのだろうか。

私はため息を窓に窓に向けて吐き捨てると、頬杖をついて窓の外を眺める。

外は、静かに降り積もる雪、雪、雪。

その降り方はまるで...

「まるで、クリスマスの時みたいですね、この雪」

突然の背後からの声に、私は椅子から転げ落ちそうになる。

「な?! な...あ、ああ、和馬くんか。びっくりさせないでよ」

私の苦情に笑顔で応える和馬くん。

「すみません。思わず見とれてしまって、声をかけるタイミングを誤りました」

普段の私なら鼻で笑うようなそんな台詞が、何故か今は私の深い所を貫いてくる。

「ば、馬鹿な事言っていないで、早く行きなさい! 教授がイライラしてたんだから!」

私の逆ギレに、彼は肩を竦めて応える。

まるで彼との間に有る3つの歳の差が逆転したような気になってきた。

ほんと、何時からこんな事になったのだろう。

「まあそんなに怒らないで下さい」

何時から彼と親しくなり、

「だから早く行かないと、単位落とすってば」

何時から彼の好意に気付き、

「はいはい。では行ってきます」

...何時から彼をそういう対象として見るようになったのだろう。

私は赤くなった顔を見られないよう彼に背を向ける。

そんな事しても、相手にはまる分かりだと承知の上だ。

仕方が無いな、と言う呟きのあと、背後で彼の立ち去る足音が聞こえ、私は少しほっとする。

何時から私は、恋愛が出来る身体になったのだろう。

何時から私は、大学でも化粧をするようになったのだろう。

何時から、彼を好きになったのだろう。

そして私がこの想いを彼に伝える事が出来るのは、何時の日の事だろう。

いや、伝えるなんて、とても無理だ。

私がそう結論付けてため息を付いた瞬間、

「大丈夫ですよ。もう伝わっていますから」

私の耳元で囁く彼の声で、私の心臓は危うく止まりそうになった。

井戸（いーど）

『おじいちゃんの井戸
4ねん3くみ 佐々木数馬

うちの家のうらには、小さな井戸があります。中には水じゃなくて土がいっぱい入っているので、水をくんだりはできません。おじいちゃんは去年亡くなったので、その井戸がだれがつくったのかわかりません。とおくに行っちゃったぼくのお母さんは、むかしその井戸をおじいちゃんが一晚で作ったんだよ、と教えてくれましたが、ぼくのお母さんはうそつきだったので今は信じてません。

ぼくはその井戸がこわいです。
夜、トイレに行くとき見ると、女の人が井戸の中から出てきているように見えるからです。
去年、おじいちゃんが見つかったからは、昼間でも見えるようになりました。
かおは見えないけど、さびしそうに見えました。
うちの井戸は、こわいけど、おじいちゃんがいなくてかなしそうだと思います。』

（数馬君の作文発表のあった夜、佐々木家の貯水池の脇にあった井戸を掘り返した所、地下5m地点にて人骨が発見された。復元の結果、20年前に離縁され消息を絶った筈の佐々木ミツさんと推定。頭蓋骨の損傷の様子から、何者かに井戸へ突き落とされ、死亡したものと思われた。井戸は昨年殺害された佐々木良蔵氏が生前に作ったもので、当局は被疑者死亡と判断。加えて佐々木良蔵氏を殺害した娘の佐々木敬子の動機も立証されたため、来月の控訴審では情状酌量の余地有りと判断される可能性も浮上した）

否（いな）

「さあ着いたよ、母さん」

彼はそう言って、彼の部屋に私を招き入れてくれた。

こんな私を。

「中は結構広いから、遠慮しないでのんびりしてね」

彼はそう言って、奥に居る誰かにただいま、と声をかける。

彼の声に、奥の部屋から一人の女性が顔を出した。

「母さん、紹介するよ。こちらは僕の大学の先輩の山崎百合佳さん。百合佳さん、これが僕の母さんです」

百合佳さんと呼ばれた若い女性が、私に丁寧なお辞儀をしてくれたが、私は上手く返答出来ずにいた。

彼に恋人が居る事より、彼に母だと紹介される方が、何となく心苦しい。

何より、まだ彼を我が息子であると自覚出来ないのが、とても心苦しかった。

私達は結局、数馬...今は和馬だったか、彼の部屋で夕方まで話し込み、晩御飯をいただく頃には3人で笑いあえる程には緊張が解けていた。

「実はさ、最初は、迎えに行くつもり...無かったんだ」

和馬が唐揚げを口に入れながら、ぽつり、と呟いた。

「...先月のことかな、夢におじいちゃんが出てきたんだ」

父さん。

憎い筈だったのに、脳裏に浮かぶのは、笑顔を浮かべた父の姿。

憎い筈だったのに。

「おじいちゃん、相変わらず囲碁強くてさ。悔しくて泣いちゃって」

そう言って朗らかに笑う和馬。

「ああ、そう言えば、昔良く泣かされてたねえ、おじいちゃんに」

そう言って無理矢理笑顔を作る私。色々な想いが頭の中をぐるぐる回り、思わず下を向く。

「そうそう。昔から容赦無かったよなあ...でさ、その夢の中で、教えてくれたんだ」

「教えてくれた？」

私が顔を上げると、和馬の優しい眼差しが私を見つめていた。

「真実を。おばあちゃんの事も、おじいちゃんの事も、そして母さんの事も」

「私の...」

和馬の眼差しは変わらず優しい。

「おじいちゃん、夢で言ってたよ。『全て、わしが悪かったんだ』ってね」

『わしが死んだら池に沈めてくれ。あいつの傍に居たいんだよ』

父の最期の言葉が脳裏に蘇る。

「あれから色々あったけどさ、『敬子を助けてやってくれないか...』って当のおじいちゃんに言われたらさ、仕方ないじゃない」

和馬は笑いながら言う。

この子にも辛い思いばかりさせてしまったのに、この子は笑ってくれるのか。

「...母さん。これからはここで一緒に暮らそう。おじいちゃんもそれを望んでる」

私を見つめる和馬の真剣な眼差し。

「...その顔、数広さんにそっくりね。父親似だったんだ」

「いやそうじゃなくて...」

言い募ろうとする和馬を、私は制した。

「それが質問であるなら、答えは否、よ。貴方と一緒に住めない」

「なんで?!」

勢い良く立ち上がる和馬。

ふと百合佳さんを見ると、彼女は私の意図を理解したのか、何とか微笑み返してくれた。

うん、この娘が居れば、和馬は大丈夫。

私は百合佳さんに微笑むと、立ち上がって和馬を抱きしめた。

犬（いぬ）

今日は昔飼っていた犬の話をしてしよう。

私が突然犬を飼いたくなかったのは、小学5年生の春頃だったと思う。

最初は当然ながら、飼える訳がないと父に反対された。

取り付くしまもない状況に、私と弟は一旦諦める事にしたのだが、いつか犬を飼いたい...と言う願望は私達の心の中にしこりの様に残っていた。

それから2ヶ月位経ったGW直前の事。突然父が私達を呼び、近所の肉屋さんに二人で行くよう言われた。

この肉屋さんは週末によく一人でコロッケを買いに行っていたので、この時ただのお使いだと思っていたのだが、それにしては『二人で』と言うのが気になる。

私達は首を傾げながら自転車で肉屋さんに向かい...そして彼女と出会ったのだ。

「お、ようきたの」肉屋さんに到着すると、肉屋の親父さんが満面の笑みを浮かべて出迎えてくれた。

「準備は出来てるで。ほら、こっち来ねの」

と調理場側の勝手口のドアを開ける親父さんに続いて、私達は外に出る。

そこには、私達が入れる位の犬小屋があった。

何が起きているのかまるで分かっていない私達を尻目に、親父さんは小屋の中から何かを取り出す。

「ほら、この子やざ」

そう言って私達の目の前に差し出されたのが、ロンだった。

ロン。

血統書上の名前は、越野公姫号。

当時肉屋さんが柴犬のブリーダーで、しかもタイミング良く子供が生まれた所だと言う話を父が聞き付け、私達に内緒で父がロハで話を付けていたのだ。

その時の事を、私は今でも鮮明に覚えている。

生後1ヶ月を過ぎた位の、ちっちゃなわんこ。

全体が黒い毛に覆われているのに、目の上だけ真っ白で。

真ん丸な瞳がじっ、と私達を見つめていて。

微かに震えているのは、私達を見て怖がっているのか。

不安げに見上げる私に、親父さんはにっこりと笑う。

「そんなことないって。ほら、尻尾振ってるやろ。これでも興味津々なんやざ」

そう言われて良く見ると、確かに尻尾が勢い良く左右に揺れている。

「飼い方はお父さんに言ってあるで、大事に育てるんやざ」

そう言って親父さんは私に彼女を差し出す。

親父さんに教わりながら、彼女を恐る恐る抱いてみる私。

小さい。

こんな小さいのに、こんなに温かい。

さっきまで震えていた筈なのに、私が抱いた途端ぴたりと震えが止まる。

ぱたん、ぱたん尻尾を揺らしながら、きょんとした表情で私を見上げてくる。

ああ、うちの犬だ。

私は意味もなく確信し、親父さんに深々とお辞儀をした。

それから、ロンは私が社会人になるまで生きる事になった。

故郷に居なかったため、彼女の臨終には立ち会えなかったが、老衰と言う事もあり、安らかな寝顔だったと母から聞いた。

今でも、あの時の彼女の感触や、たんぼの畦道を一緒に駆け抜けた事。
そして、静かに空を見つめている仕種。

彼女が亡くなってから15年が過ぎたが、彼女はまた私の中で生き続けている。

居ね（いーね）

夜も深くなってくると、テレビ番組も良く解らないものが増えてくる。

私は特に観たい番組もなく、リモコンを適当に弄りながら次々と番組を変えていく。

そんな事ならテレビを消せば良いんだろうが、なんせ私は極度の怖がりなので、深夜の...しかもこんな丑三つ時近くの時間の静寂は、とてもじゃないが耐え切れない。

なので、私はリモコンのチャンネル切替ボタンを押しっぱなしにして、画面が次々と切り替わるのをぼんやりと見つめていた。

私が異変に気付いたのは、チャンネル遊びを始めて5分位経った頃だろうか。

切り替わる画面に違和感を感じた私は、切替を続けながら画面を注視してみることにした。

この辺りのテレビ局はNHK含めて7局だが、良く観ると、映像は8つ有る。

私は首を傾げながら、チャンネル番号を順に調べてみる。

「1、3、5、17、27...ん？」

27Chと35Chの間に、何かが流れてるが、番号表示が出てこない。

暗闇に何かが座ってるようだが、このままではよく分からない。

私は...まあ、暇だったこともあり、パチスロで目押しをする要領で、そのチャンネルに合わせてみる事にした。

「1、3、...」

何だろう。何かの監視映像だろうか。

「5、17、...」

後頭部がチリチリしている気がする。

危険信号だろうか。

「27、...よし！」

タイミングを合わせてボタンを押す手を緩める。

テレビは見事に、その映像を映し出していた。

私はガッツポーズをしつつ、テレビを見る。

テレビに映っていたもの、それは。

暗闇の中。

一人の老婆が俯いて座っていた。

ハイビジョン対応でもないのに、やけにクリアな映像で、見ていると何となく背筋がぞくぞくしてくる。

「...なんだこれ」

私は込み上げる不安を押し殺すように、わざと声に出して呟く。

すると、まるでその声が聞こえたかのように、老婆がゆっくりと顔を上げた。

「ひっ」
その鬼の様な形相に、思わず悲鳴を上げる。

『居ね』

老婆のしわがれた声が、妙にクリアに聞こえた。

いね...ってなんだ？

「いね？」
思わず問い掛ける。
その声が聞こえたか。老婆は更に目を吊り上げる。

『居ね！』

拒絶されてる。
私は今、拒絶されてるんだ。

『はよう居ね！』
私は老婆の勢いに押され、思わずリモコンの電源ボタンを押した。

画面が消える瞬間、老婆がニタリ、と笑ったように見えた。

それ以来、その老婆を見たことはない。

イブ (いーぶ)

3月1日

大人気のアダイブ、とうとうGET 🤩

部屋に戻ってきて、早速取り出してみた。

中には本体と説明書、それとサンプルホルダーが2個と接続ケーブルが2本。

ネットで大騒ぎされてるACアダプターもちゃんとあった 🙌

で、さえきいにアドバイスをもらった通り (サンキュー ❤️) 説明書を読む。

以下、説明書。

アダムとイブシミュレータ、『アダイブ』を買ってくれてありがとー！

『アダイブ』は、髪の毛のDNAから作り出したアダムとイブを使って、どこまで子孫を殖やせるかをシミュレートする、画期的な次世代電子玩具ですっ！

...随分テンションの高い説明書だなあ 🤖

まあ要するに、髪の毛をサンプルホルダーに入れてケーブルで本体に繋ぎ電源を入れてやれば、ドーム状の本体の中にホログラムで二人の人間が登場し、生活を始める訳だ。

発売当初は心配されていたアバター作成時に髪の毛から抽出されるデータも、恋愛、生殖、性格などの最低限の情報のみのもので、まあ安心だ。

今日は僕の髪の毛しかないので、作動は明日以降にしてみる。

誰の髪の毛にしようかな。

3月5日

ようやく間宮さんの髪の毛GET！

最近は髪の毛狩りも流行っているので、警戒されてしまい、手に入れるのに時間がかかってしまった 🤔

で、今はアバター作成中。

説明書によれば、一人につき30分~1時間くらいかかるらしい。

ああもう、まだかなあ 🤔

3月6日

子作り初日。

当たり前だけど、出来上がったアバターは3等身デフォルメキャラなので、間宮さんぼくない。

でも、このドームの中で、僕と間宮さんの二人きり...うん、たかまるう 📡

ちなみに、中の二人はまだ距離を置いている。

こんな時も現実と同じにしないで良いのに (笑)

3月10日

ダメだ。

喧嘩して、僕が死んじゃった 🤔

仕方ないので、リセットしてみる。

間宮さんがあんなに攻撃的だとは思わなかった。

騙された気分 📡

3月17日

あれから沢山の髪の毛で試してみたが、どれも失敗。

喧嘩して片方が死んじゃったり、仲が良くても子供ができなかったりして、どうも上手くいかない。

もしかして、僕に彼女が出来ないのは、DNAのせいなのか? 🤔

3月22日

お袋でもダメってどうよ 🤔

仕方ないので、相手を男にしてみよう。

3月25日

...有り得ない。

親友の髪の毛でやってみたら、3時間で2人生まれた 🦋

大輔、男なんです(笑)

4月2日

ドームの中は、現実の1時間で1年位進む。

すなわち、大輔とのカップリングで始めてから1週間で、160年は経過した事になる。

今ドームの中には、大都市が出来ているんだけど 🦋

悔しいけど、やっぱり私は、DNA上は女なんだなあ。

やっぱり大輔の言う通り、形式だけでも大輔と結婚するかな。

なんかテンション下がるよ 📉

ふう。

異母・疣（いーぼ）

喫茶店『止まり木』のカウンターの途中で、私は暇に飽かせてカップの水分を拭き取っていた。店は閑散としていて、窓際のカップル以外に居ると言えば、カウンター席に座ってる隼人くん一人。その隼人くんは、目の前のすっかり冷えたカップを見つめ、何か考え事をしている様子に見えた。

「...深刻そうな顔して、何を考えているのかしら？」
カウンター越しに尋ねた私を、隼人くんはまっすぐに見つめる。
「聞いてもらえますか、マスター」

この喫茶店を私が一人で切り盛りしているせいか、それとも私の性格のせいか、何故かお客さんは私をマスターと呼んでいる。最初は抵抗したが、段々面倒になってきて、今では好きに呼ばせるようになっていた。

「良いわよ、どうぞ」
私は肩をすくめ、続きを促した。

「...いぼ」

どきっ、とした。
まさかこの子、私の事を。

「いぼ？」
内心の動揺を抑え、何とか言葉を返すと、隼人くんは静かに頷いた。

「はい。いぼです。...見てくれますか？」
隼人くんはそう言って、ゆっくりと左腕を私の前に差し出す。
「見てくれ...って、普通の腕、よね。あ、かわいいリストバンドじゃない」
私の返事に、深々とため息をつく隼人くん。

失礼な。
かりにも私は貴方の母親なんだけど？
...内緒だけど。

隼人くんは何か躊躇っていたようだが、決心したのか、差し出した左腕のリストバンドを一気に手繰り上げた。

「...なるほど、疣ね」
彼の言う『いぼ』は、『異母』ではなく『疣』だったのだ。
しかも、かなり大きい。
さしずめ、桃の缶詰の蓋くらいある、人の顔の様な疣が、左手首の表側に浮かんでいた。

間違いない。
あの、人面痘だ。

「3日前位から突然生えてきたんです。誰かに相談したくても、こんな不気味な形ですし、相談できなくて」
力無く話す隼人くんを見て、抱き寄せたくなる衝動を堪える私。

「これはね、『人面痘』よ」
私の声に、隼人くんは驚いたように顔を上げる。
「え？でも、人面痘って、傷口から出来るものじゃなかったですか？」

彼の質問に、ぱちぱちと手を叩く私。

「一般的には正解よ。傷口が人の形に見えた事から『人面疽』伝説が生まれたと言われてるわ。さすが一流高校の考古学研究会会長ね」

私の返答に、少し頬を膨らませる隼人くん。

「どうせ弱小研究会ですよ。...でも、ならどうしてこれが『人面疽』だと？」

彼の問われ、私はにっこりと笑いかけた。

「コーヒーのお代わり、要る？」

「ある地方の山村にね、呪われた一族の伝説が有るの」

「の、呪われた...ですか？」

隼人くんに恐る恐る問われ、私は頷く。

「ええ。まあ内容自体はとてもチープなものなだけだね」

私はそう言って、伝説をかき摘まんで話した。

「昔むかし、強欲な庄屋が居て、とうとう村人が堪え切れなくなって、村人全員で呪いをかけたのよ」

「呪い...」

「そう。内容はこう。『庄屋の一族は呪われろ、龍の毒に侵されろ、子々孫々まで侵されろ』」

「龍の...毒」

私の話をおうむ返しに反芻する隼人くん。

「それ以来、庄屋の一族の男に限り、元服を過ぎた頃から、疣のような人面疽が現れるようになり、必ず早死にした...と言われてるわ」

私の『早死に』と言う言葉に、隼人くんがびくっ、と身体を震わせる。

無理もない。伝説と同じ事が自分の身に起こったのだから。

私は彼をまともに見れず、手元のカップに目を向けた。

「...どうして」

「え？」

顔を上げると、隼人くんがまっすぐ私を見つめていた。

「どうして、マスターはその伝説を知っているんですか？」

決まってる。

私達の祖先の話だもの。

そう、私達の。

「お客さんに詳しい人が居てね、教えてもらったの」

「お客さん...そうですか...」

私の返答に、力無く俯く隼人。

隼人、しっかりしなさい。

「ただね、この話には続きがあるの」

「...続きですか？」

諦めないで、大丈夫だから。

「呪いの解き方も教わったのよ、そのお客さんから」

貴方は私が助けてみせる。

「本当ですか?!」

私の、大切な息子。

例え名乗り出る事が出来なくても、貴方は間違いなく私の血を受け継いでいる。

「ええ、ただし、現地まで行かないと駄目だけどね」

その人面瘡が、その証。
だから、絶対に貴方を守る。

「少し遠いから、週末にでも行きましょうか」
私の誘いに、隼人は力強く頷く。

貴方は、私が守る。
命に替えても。

今（いま）

短歌 2首

雪道の 大雪漕いで 進む今 ただひたすらに 一歩前へと

今起きた さあさ遊べと 耳元で ゴロゴロと 鳴く 暁の闇

猫川柳 2011

今起きた！ 鳴いて飛び乗る 腹のうえ

今は駄目 ごろん♪されても かまえない

気がつけば タワーの上で 猫饅頭

意味（いーみ）

遠くから、勝鬨の声が聞こえてくる。

男は刀を杖にしてのろのろと立ち上がると、途切れそうな意識を奮い立たせ、周囲をゆっくりと見回した。

「...終わったか」

激戦地であったこの湿原に、もはや戦う意志の有るものは居ない。

男は索敵を完了すると、死体を一つひとつ調べ始める。

むろん冥福を祈る為ではない。金目の物をいち早く確保する為だ。

出来るだけ刃こぼれしていない刀。受けた傷の少ない鎧甲。懐刀に忍び込ませている金品や食糧。

彼は死体の海を、無言のまま少しずつ掻き分けていく。

全国の大名家が一同に会し始まったこの天下分け目の戦も、結果、男から見ればただの混沌とした殺し合いでしかなかった。

ただの殺し合いに意味などありようも無い。

彼は死にかけている獲物が誰かを呼ぶ声を聞きながら、それでも助ける事なく黙々と戦利品を奪い進んでいく。

何体目の死体であったろうか。彼が懐刀に差し込んだ指先に袋のようなものが触れた。お守りにしては大きい。

男が躊躇わずそれを引き抜くと、出て来たのは女ものの巾着袋であった。

見た目の派手さから、京か堺辺りで手に入れた値打ちものの品であろう。

男はそれを自身の懐刀に納めようとしたが、ふと手を止めると、巾着を縛っていた紐を緩め中を覗き込んだ。

そこには、金色の小さな金色の十字架が入っていた。

「持ち主を護れないお守りか。意味ねえなあ」

男は嘲るような笑みを十字架に向け、再び巾着袋にしまい込むと、よろめきながら次の獲物にむかっていった。

忌む（いーむ）

「あの向こうに見える家が、笹木のお屋敷だ」
タクシーの運転手はそれだけ告げると、来る時同様それ以上何も語らず、ただ静かにドアが開いた。
僕がタクシー料金を払って、デイパックを持って外に出ると、駅に降りた時と変わらない、どんよとした空気が僕を包み込む。
僕はうだる様な暑苦しさを吹き飛ばすように大きく気を吐くと、デイパックを肩に背負い、歩き出した。

喫茶店のマスターから聞いた伝説の土地は、我が家から電車で半日位離れた、中部地方の山奥にあった。
あれからすぐにネットで伝説の裏付けを取り、両親に部活の調査だと話して貯金を下ろさせてもらい、そして週末を利用してやって来たのは良かったのだけど。

「本当に、大丈夫かな...」
屋敷が近づくとつれ、不安からか、思わず独り言が口から漏れ出て来た。

『...あんお屋敷は、忌まれてるのよ』
来る途中で、タクシーの運転手がぼつり、と漏らした言葉が気にかかっていた。

伝説が生まれたのは、恐らく戦国か江戸時代初期の頃と推測される。
運転手の話からすると、それから400年近くの間、目の前の屋敷に住む一族は『禁忌』とされてきた事になる。
それはすなわち、今だに伝説が真実としてこの地に存在している...と言う事になるわけだが。

「龍の毒。呪われた一族。男衆にのみ顕れる人面疽...」
屋敷までの緩やかな上り坂を進みながら、伝説の概要を口に出して反芻する。
「血縁にのみ発症し、秘術でのみ治療可能だが、治療後、必ず家主が謎の死を遂げる...」
もともとこの地の庄屋だったこともあってか、屋敷は大きく、敷地内には我が家より大きな蔵も見える。
「でっかいなあ。門前払いされなきゃ良いけど」
マスターが口を利いてくれるはずだから大丈夫だとは思うけど、目の前にそびえ立つ立派な門構えを見ると、少し気後れする。

「とんでもない。ようこそいらっしゃいました、お坊ちゃま」
突然背後から声をかけられ、僕が慌てて振り向くと、そこには和服姿のマスターが居た。
「マスター?!今日は用事で来れないんじゃない?!」
マスターは僕の問い掛けに怪訝そうな表情を見せる。
「マスター?旦那様ならお屋敷でお待ちですが」
意味が解らない、と言うその表情を見る限り、嘘やドッキリではなさそうだ。どうやら他人の空似らしい。
「すみません。貴方に似た方を知っていたので、勘違いしていました」
僕がそう謝罪すると、女性はああ、と納得した様子で微笑んだ。
「陽子の事ですね。双子ですから、似ていて当然です」
彼女の返答に驚いている僕に軽く頷くと、彼女は僕の手を取り、屋敷へと導いていった。

芋（いーも）

縁側に面したその和室は、普段は使われていないのか、暖かな日差しが優しく降り注いでいるにも関わらず、空気が冷たく感じる。

僕がこの応接間に通されてはや1時間くらい経つ。

途中、先程のマスターに似た女性がお茶と山盛りの大学芋を置いて行ったきりで、そのどちらも既に冷えきってしまった。

「大体、なんでこんなに大学芋なんだろう」

僕は首を傾げながら、また一個大学芋を口に運ぶ。カリッとした歯ごたえの後に広がるサツマイモの甘さが、待ちくたびれた僕の心を少し和ませてくれた。

「やあ、待たせましたね」

ここの主人、笹木也継氏が登場したのは、更に1時間程経過したお昼前の事だった。

「いえ、こちらこそお忙しいなかお時間を頂き、すみませんでした」

立ち上がり深々とお辞儀をする僕に也継氏は笑うと、下座にゆったりと座った。

その立ち振る舞いに何故か既視感を感じ、頭がぐらっと揺れた気がした。

「ん？大丈夫かね」

「はい、ちょっと眩暈がしただけです」

既視感？ありえない。

ここに来るのは初めてのはずなのだ。

「うむ、ならば良いが」

心配そうに僕を見る也継氏。

まるでその表情は、父親が息子を見る時のそのような...

馬鹿な。

僕は大きく頭を振って、このくだらない妄想を振り切った。

「さて、どのような用件だったかね」

也継氏の問いに、僕はこれまでの事をかい摘まんで説明した。

突然手首に顕れた人面痘のこと。

知り合いからここの伝説について聞いたこと。

也継氏は僕が説明している間、目を閉じて静かに聞いている様子だった。

「ここに来れば、治療法があると聞きました。もしご迷惑でなければ、治して頂けませんか」

僕の問いに、也継氏は黙って目を閉じている。

やはり、駄目だったか。

「...二、三、宜しいかな」

也継氏は口を開くと、僕に問い掛けてきた。

「え？は、はい、なんでも」

僕の返答に、也継氏は真剣な表情を見せる。

「まず、その人面痘を見せて貰えないだろうか」

僕は黙って腕を差し出し、リストバンドを取った。そこには、まるで断末魔の表情のような人の顔があった。

也継氏は黙ってそれを見ると、大きく頷いた。

「うむ、確かに。ならば次だ。君はそれが、悪いものだと思っているのだね？」

僕は少し混乱した。質問の意味が解らない。

「え？しかし、人面痘は基本的に良くないものだど...」

「人によるのだよ、実は。...まあ良い。最後の質問だ」

也継氏はそう言って、テーブルの上の大学芋をひとつ口に入れる。

「うん、今日は旨く出来てるな。やはり君が来たから張り切ったのだね」

也継氏は一人頷くと、改めて僕を見つめる。

「君は、人を殺せるかい？」

嫌（いや）

「はい？」
突然の質問に、僕は何を聞かれたのかさっぱり理解できなかった。
質問をした当の本人は、しかしいたって落ち着いた表情で僕を見ている。

「ああ、聞き方が悪かったね。君は、人の命を引き換えにしても、その人面痘を取り払いたいかな？」
「人の命を引き換えに...？」
質問をしようとした瞬間、来る途中で反芻した資料が脳裏を過ぎった。
「...謎の当主の死、ですか」
僕の答えに、微笑みを返す也継氏。
「ああ、その通り。要するに、秘術には対価が必要でね、それが術者である当主の命、と言う訳なのだよ」
「そんな！」

僕は思わず立ち上がる。
「それが呪いの本当の姿、って言う訳ですか！」
人面痘を取らなければ命に関わるかも知れず、取るためには当主が死ななくてはならない。
「『当主殺し』と言うレッテルを貼られて生きていくか、人面痘と死ぬまで付き合うか...『家』を重んじる時代だからこそ効果を発揮する呪い、なんですね」
僕の答えに真剣な表情で頷く也継氏。

...あれ？ちょっと待てよ。

「そもそも、どうして僕が？」
そうだ。僕はこの一族とは何の繋がりも無い。
なのにどうして僕がこの呪いにかかっているのだろう。
混乱している僕を、也継氏は静かに見つめている。

「こちらに来る際、ご両親はなんとおっしゃってたかね？」
也継氏の問いは、僕にとって予想外のものだった。
「え？ええ、普通でした。...まあちょっと寂しそうには見えましたけど」
僕の答えに、也継氏はただ見つめるだけだった。
「あの...それが、何か」
「何故君に呪いがかかったのかは、ご両親に聞くと良い。まずはその呪いをどうするか、ではないかな」
畳み掛けるように告げられた言葉に、僕はそれ以上聞く事ができなかった。
「さて、改めて伺おう。君は秘術を受けるかね？」
也継氏はそう言って、静かに僕を見つめる。
もちろん、答えは決まっていた。

「嫌です」

僕の即答に、不思議そうな顔を見せる也継氏。
「何故かね？秘術を受けなければ、君のその人面痘は無くならない...」
「とも限りません。まだ手があるかも知れませんし」
僕は也継氏の言葉を遮り答えた。少なくとも、それが本心だった。
「少なくとも、僕の...この害が有るか無いかよく解らない人面痘のせいで、あなたを死なせる訳にはいきません」
「君、しかし...」
也継氏の言葉を振り切るように、僕は静かに立ち上がる。
「僕は、僕のせいで誰かを犠牲にしたいは無いです。それに、秘術まで含めての呪いなら、それをまとめて解く方法が有る筈ですから」
僕は一気にそこまで言うと、勢い良くお辞儀をした。
「お時間を取らせまして、どうもすみませんでした。後は自分で何とかやってみます」
僕の言葉に、深々とため息をつく也継氏。

「仕方が無いか。これも血...なんだろう」

僕が何か答えようとしたが、也継氏が真剣な表情でこちらを見ていたので、何も言えなくなった。

「よいか、打つ手が無くなったら、必ず私の元に来なさい。私は今、その為に生きているようなものだからな」
そう言ってにこやかに笑う也継氏の様子に、僕は何も言えなかった。

入り（いーり）

つぎの「入り（いり）」ですが、
この言葉、単独ではあまり使われませんよね。
大抵『入り〇〇〇』って後ろに何か付け足すことが多い気がします。
そこで、新たなチャレンジ！

「以下に列挙する『入り～』という言葉全てを使用し、ショートショートを作成せよ。

入会（ある地域の住民が一定の場所を共同で利用し、共同で利益を得る事）
入り相（夕刻のこと）
入り海
入り江
入り口
入り組む
入り込む（無理やり入り込む、もぐりこむ）
入り日（夕日のこと）
入り浸る
入り混じる
入り乱れる
入り婿

さて、どこまで出来るか。

入り相も深まった頃、入り日に染まった入り江にある洞窟の入り口に、そこにはかなり不釣り合いの不良学生達が出た。
本来なら立入禁止のこの場所に彼らのリーダーが入り込んだことから、なし崩し的に彼らが入り浸るようになり、今では彼らの根城となっているのだ。

今、そこに、隣町の不良学生達が強襲をかけてきた。

狭い洞窟に総勢20名程度の不良が入り乱れ、洞窟内は怒号とうめき声が反響して入り混じり、辺りは凄惨な地獄絵図と化していた。

そこに現れる、新たな勢力。

ただでさえ入り組んだこのタイミングに登場したのは、3人の女性であった。

「あなた！いつまでこんな所で遊んでるんですか！」

「ゆ、ゆきえ?!」

中央の女性の怒号に、地元の不良学生達のリーダーが反応し、直立不動のまま硬直した。

「この辺りの入り江や入り海は、我が相場家が可哀相な土地の方の為に、わざわざ入会として使わせてあげている場所じゃないの！だいたい、入り婿でアラフォーの癖に何の役にも立たないから、やむなく専門学校に押し込められたくせに、遊びほうけているとは言語道断！さあ、帰って家事を終わらせなさい！」

一気にまくし立てながらリーダーを引きずって去って行く女性たちを、不良（専門）学生達は呆気にとられて見ているしかなかった。

さあ、どうだ！

射る（いーる）

彼女に出会ったのは、ある晴れた冬の朝のことだ。

何となく家に居づらくてやって来た早朝の学校。ふと見えた生け垣の隙間に、彼女の姿があった。

最初はそこがどこで、彼女が何をしているのか良く判らなかった。

板張りの大きな縁側みたいな空間の中央で、制服姿で大きく脚を広げ、両方の腕をだらん、と下げて静止している。

遠目で良く見えないが、どうやら彼女は目を閉じて、精神集中をしている最中のようなようだった。

少なくとも、此処が弓道場である事は判ったのだが、彼女は弓を持っておらず、袴も胸当ても付けていない。

ただの普通的女子高生が、制服のまま弓道場で佇んでいるだけ。

それだけなのだが。

何故か僕は、彼女の立ち姿から目を離す事ができなかった。

彼女の容姿が、と言うより、立ち姿が美しかったからだ。

と、彼女が動いた。

目を開き、ゆっくりと顔を上に向けると同時に、左腕は伸ばしたまま弧を描くように、右腕は軽く曲げたまま左腕に寄り添うように、ゆっくりと持ち上がる。

僕がその動きに見とれている間に、彼女の左腕は真っすぐ前に伸ばされていった。

僕がその動きに見とれている間に、彼女の左腕は真っすぐ前に伸ばされていった。

（そうか。『構え』なんだ）

僕の目には、彼女がそこには無い弓を持って、今まさに構えようとしているように見える。

彼女の右手が何かを摘むような形になると、両腕が少し持ち上がる。

（ああ、弓を張るんだ）

僕の視界の中で、彼女は両腕をゆっくりと降ろしながら、右手に力を込め、少しずつ後方にずらしていく。

そして、左右の腕がびたりと止まった。

（...すごい。ほんとに弓を構えているみたいだ）

彼女は真っすぐに前方を見つめ、射るタイミングを計っている。

まるで一枚の絵画を見ているようなその姿に、僕はただ見取れていた。

色（いろ）

突然決まった非番の昼下がりがりほど、退屈を持って余すものはない。

私は近所の小さな公園にあるありふれたベンチに座り、あくびを噛み殺していた。

平日の昼下がりの公園は思っていたよりも人がおらず、私は左手で玩んでいた缶コーヒーを口に含みつつ、目の前の母子をぼんやりと眺めていた。

いや、誓って言うが、変な気を起こそうと思っている訳ではなく。

その母子の妙な会話が気になるのだ。

その母子が公園に入ってきたのが、今から15分ほど前のこと。

母親は30代くらい、娘さんは5歳くらいだろうか、春の陽気に合わせて、二人とも柔らかい色のワンピースにカーディガンを羽織っている。

真っすぐ公園の中央に在る桜の木の前に向かうと、ゆっくりと母親がしゃがみ込んだ。

『良い？今から色当てゲームをするからね』

『いろあてゲーム？うん！』

にこやかに笑う子供に、母親もつられて笑顔になる。

その母親の笑顔が悲しげに見えたのは、気のせいだったろうか。

『良い？外れても良いんだからね。わかった？』

『うん！』

子供の元気な返答に笑顔で頷き、母親は桜の木を指差した。

『あの桜の花は何色？』

『あお！』

...え？

いや、ピンクだろ。

『外れ。ピンクだね...じゃあ次は、あのぞうさんは？』

『あかいろ！』

『惜しい、白だね』

結局その母子は、そんなやり取りを15分経った今まで続けている。

驚くべき事に、その子供は総てのクイズをことごとく外していた。

当然だろうが、答える子供が涙声になっている。

母親は子供の頭を撫でながら、また桜の木を指差した。

「もう一回行くよ。あの桜の花は何色？」

母親の問いに我慢が出来なくなったのか、子供は上を向いて大声で泣きはじめた。

「わかんない！もうわかんないよう！」

その慟哭にも似た泣き声に、思わず私の胸が締め付けられるように苦しくなる。

「だってあれはあおだもん！お母さんそう言ってたもん！」

激しく泣き続ける子供を見て、私の脳裏を『ネグレクト』と言う言葉が過ぎり、母親へと視線を移動する。

母親も、泣いていた。

何時からだろう、あまりに静かに泣いていたため、まったく気が付かなかった。

あの母子、何があったのだろうか。

「さっちゃん、ごめんね。訓練辛いだろうけど、今からしておかないと、普通の生活ができないからね」

母親は子供に気付かれないう、そっと涙を拭いて、優しく問い掛ける。

そこにきて初めて、違う言葉が脳裏を過ぎった。

「...色覚異常」

その予想外の事態に、思わず言葉が口から漏れ出る。

それが聞こえたのか、雰囲気を感じたのか。

子供が突然泣き止み、こちらを見詰めてきた。心なしか、助けを求めているように見える。つられて母親もこちらを見上げた。

ああもう、非番なんだけどな。

私は溜息とともに、ゆっくりと立ち上がり、母子の元へ近づいていく。

見ちゃった以上、関わらない訳にはいかんよな。

不審そうに見詰める母親に、私はにっこりと微笑み、尚も近づいていく。

治せるかどうかは関係ない。

彼女達の前まで来て、急に喉の渴きを覚え、私は缶コーヒーの残りを飲み干した。

見て見ぬ振りには出来ないさ。

私はその場でしゃがみ込み、目を真っ赤にしてきょとんと見詰める子供に笑い掛けた。

だって俺、医者なんだもん。

岩（いーわ）

調査結果報告書

笹木隼人様

平素お世話になっております。

当方にてお請け致しました御依頼につきまして、調査結果が出ましたのでご報告致します。

御不明の点がございましたら、下記担当者まで御連絡下さいますよう、よろしくお願い申し上げます。

記

調査件名：夫婦岩に関する地理及び伝承調査

調査箇所：N県S島

調査期間：2009年7月4日～2009年7月30日

調査人数：2名

調査費用：別紙参照のこと

報告詳細：

1. 地理調査

S島にある夫婦岩について、外形の測量、及び内部構造の調査を行いました。

結論としては、

・外形：雄岩は海上に約10m突き出ており、直径は約10m、斜度約60度の鋭い円錐状になっております。また海中は5mで岩盤に到達しております。更に雌岩については海上に約3m、直径は約6m、斜度が約45度の緩やかな円錐状になっております。こちらも5mで岩盤に到達しております。

詳細は別紙図面を参照していただければと思います。

また、内部構造についてですが、雌岩には空洞はございませんでしたが、雄岩には御推察の通り若干の空洞がございました。空間の大きさは概算で高さ3m×面積6㎡程度で、真下に向けて直径約1mの開口部分が見られました。

また、内部空間に小さな祠のような形の物が見受けられましたが、内部への侵入が不可能だったため、詳細は不明です。

（別紙図面及びX線画像参照のこと）

2. 伝承調査

N県立図書館、S町立図書館共に、対象に関する最古の文献である、島に咎人が居た江戸時代に書かれた獄史の日誌にも伝承の類は記載がされていないため、その発生日代、更には夫婦岩自体の出現時期も確定には至りませんでした。（参考文献一覧参照）

ただ、地元の神社に奉納されていた『口伝集』（明治6年頃と推定）によると、当時の漁村の長老が幼少の頃に聞かされたと有り、その内容から察するに、依頼人の推察通り、3代前の長老、当時の寿命から考えると更に100年ほど前にはこの伝説が成立していたものと考えられます。

なお、上記の内容については、別紙に詳細を記載しておりますが、ほぼ現在の伝承と合致しております。

念のため、以下に抜粋して記載します。

『突然現れた美男美女の夫婦神が、その持てる力で土地を繁栄させる。子宝に恵まれない夫婦神が海の神に願い、高齢になって海から子供を授かる。その後授かった辺りの海岸に対の岩が隆起し、民はその岩を夫婦岩と名付け崇めた』

また、該当する時期（江戸時代中期頃）における日本海上での海難事故の有無については、上記の獄史による日誌に1件記載がありました。

以上

なお、今回の調査は危険性が高いものと判明したため、当事務所での調査続行はお請け出来かねますので、ご了承下さい。

有限会社 D・O・D

地理調査担当 佐々木和馬

伝承調査担当 佐々木百合佳

イン (いーん)

その球が吸い込まれるようにネット下に落ちた瞬間、相手側のギャラリーの歓声が爆発した。

「くっそ、あと1点で追いつかれる」

僕の右隣で悔しそうに呟く岡嶋の声が、まるで耳元で怒鳴っているように大きく聞こえる。

「岡嶋、集中！サーブ来るぞ！」

僕の声とほぼ同時に、相手側のコートから銃声のような破裂音が聞こえた。

（ドライブ?! やば、目逸らした）

慌ててボールの軌道を追うが、見つからない。

「おれ！」

後衛の山崎の掛け声に、僕は瞬時に気持ちを切り替える。

山崎のレシーブ音を聞きつつ岡嶋を見る。

サインはオープン。ならば僕の役割は決まりだ。

「こい！」

岡嶋にボールが届く直前に、気合いと共にステップ開始。タイミングはもう分かっている。

ワン。狙いをつけたライトとセンターの間の奥隅を睨みつけながら。

ツー。ネットの向こう側でブロックの体制に入る相手チーム。やはり僕には2枚飛ぶつものようだ。

（さあこい、さあ！）

僕は下を向きニヤリと笑うと、気合いと共に跳び上がった。

跳んだ僕のタイミングに合わせて相手ブロッカー2人も飛び上がる。

この3年間、何万回、何十万回とやったアタック練習。皮肉なことに、今までで一番高く跳べていた。

岡嶋の正確なトスコントロールで、ボールは予定通りのタイミングで落下し始めているはずだ。

オープンを打つ川田に向かって。

僕が直情型であると言うデータを逆手に取った、最後の切り札である『捨て身のフェイント作戦』は、見事に2人のブロッカーを巻き添えに出来た。

（川田、あとは任せた！）

僕はニヤリと笑うと、そのまま落下する。

着地と同時に頭上と相手コートの方から破裂音。すぐにラインズマンに目を向ける。

ライト側のラインズマンは...旗を下げている。インだ。

奥は...イン！

僕はギャラリーの大歓声のなか、天に向けて雄叫びを上げた。

飢え（うーえ）

「ええそうよ。私は愛に飢えてるの」
悪びれる事も無く言い放つ華織に、正樹は憤りを隠せずにいる。
「だから、猛を捨てたのか。そんな理由で」
「ええ。愛がない関係なんて不用なもの」
しれっとした表情で華織は応える。正樹は怒りを抑えるように、目の前のすっかり冷え切ったコーヒーを一気に飲み干す。
「だから、猛さんには申し訳無いけど、よろしくお伝えくださいな」
華織の言葉に、正樹のカップを持つ手がびたり、と静止した。
「待て。あんたは猛に何が有ったか知らないのか」
正樹の問いに、華織は不思議なものを見るような目で応える。
「ええ何も。猛さんに何か有ったのですか？」
正樹は華織を観察するが、少なくとも彼の目には、彼女が嘘をついているようには見えなかった。
「...死んだよ。3日前に」
「あら...」
正樹の言葉が予想を超えていたからか、華織は目を見開き絶句する。
「泥酔してマンションのベランダから転落したらしい。体内から大量のアルコールが検出されたそうだ」
「アルコール...」
華織は一言呟くと、何かを思案するように黙り込む。
「部屋の内部は争った形跡も、何かを取られた形跡もない。リビングには大量のワインの空き瓶が転がっていたそうだ」
「ワインですって？」
華織が驚いたように顔を上げると、神妙な顔の正樹と目が合った。
「そう、ワインだ」
「でも、猛さんってワイン嫌いだったはずじゃ」
華織の問いに、正樹は無言で頷いた。
「仕事仲間の話では、ここ一月ほど、あいつかなり荒れていたようだが、先週辺りから急に大人しく...というより、何かに怯えるような様子になっていたらしい」
「猛さんの荒れた姿も想像できないけど、あれだけ嫌いだったワインを浴びるように飲む猛さんも想像できないわね」
思案顔で呟いていた華織は、ふと思いついたように顔を上げた。
「もしかして、あなたが会いに来たのって、私のアリバイでも聞き出すつもりで？」
華織の問いに、正樹は肩を竦める。
「まあね。どうせ近いうちに警察も来るだろうけど、猛の事は俺が始末付けるべきだと思ってね」
正樹の答えに、今度は華織が肩を竦める。
「まあ、さっきの様子で、あんたじゃ無いのは解ったから、他を当たってみる事にするよ」
正樹はそう言って立ち上がり、レシートを手に取った。
「...なぜ？」
華織がぼつり、と呟いたのが聞こえ、正樹はびたりと立ち止まる。
「どうして私がやってないと？」
華織が正樹を見上げる。その表情は真剣そのものだった。
「簡単な話だ。あんたは絶えず誰かに愛されてたい女性で、今は猛の事よりも、新しい男を見つける方が大事だろう？それにあんたは、いくら愛に飢えていても、逃がした魚にまで手は出さないだろうからな」
正樹はそう言って、レシートをひらひらとはためかせ、歩き出した。

魚（うーお）

「おなか、すいたねえ」
「うん...」
「だめだよ、余計におなかですくから」
「わかってるけど、がまんできないんだもん」
「流されちゃって食べ物無いんだから、がまんしなきゃだめだよ」
「でもお...」
「お寿司食べたいね」
「わあ良いね、お寿司」
「おいしいよね、大好き」
「もう！みんなやめなよ！」
「みんなは何が好き？」
「マグロ！」
「イクラ！」
「てっかまき！」
「トビッコ！」
「え〜？」
「え〜？」
「え〜？」
「おいしいじゃん」
「トビッコ、知らな〜い」
「うそお?!」
「知らな〜い」
「わたしも〜」
「飛び魚の卵だよお。プチプチしておいしいの」
「へえ」
「プチプチ好き〜」
「そうなんだあ」
「なんかおなか、よけいにすいた」
「だね」
「私も」
「だから言ったじゃん」
「そういえばさ、」
「なあに？」
「どしたの？」
「『魚』ってさ」
「おさかな？」
「さかな？」
「さかなクン！」
「言いかた、他にも習ったよね」
「うん」
「『ギョ』！」
「『うお』！」
「それってさ、変だよね」
「へん？」
「そかな？」
「だってさ、『ぎょ!』『うお!』だよ？」
「ギョギョギョ〜！」
「うお〜っ！」
「きゃはは」
「おかしいねえ」
「きっと、おさかなを初めて見た人がびっくりして言っちゃったんだよ」
「ギョ！なんだこれは！」
「うお〜っ、おいしいぞこれは！」

「うお～っ！」
「うお～っ！」
「きゃははっ！」
「あ、お船だ！」
「ホントにお船だ！」
「見えない～！」
「あれ、お父さんのお船だ～！」
「お～い！」
「うお～い！」
「きゃはは、うお～いっ！」
「あ、こっち来た～！」
「キタ～ッ！」
「おとおさ～ん！」

「痛かったね」
「怒られちゃったね」
「泣いてたね」
「そうなんしてたんだもんね」
「怒るよね」
「こわかったね」
「助かったね」
「うお～っ」
「ぷっ」
「きしし」
「うお～っ」
「うお～っ！」
「お父さん大好き～！」
「お母さん大好き～！」
「うお～...っうええん」
「びええん」
「うええん」
「うええん」
「ごわがっだ～っ！」
「じんじゃうがど思っだ～！」
「うお～ん！」
「うお～ん！」

羽化（うーか）

『また観察してるの？』

僕は背後からかけられた声に、モニターを見つめたまま『うん』と返事をした。

モニターの向こう側に映っているのは、ワンルームマンションとか言う狭い部屋の1室。

その部屋の中央にあるテーブルに、一人の人間の女性が突っ伏している。

肩を震わせている様子や、スピーカーから微かに聞こえてくる音から推測すると、恐らく彼女は声を殺して泣いているようだった。

『今何ヶ月目なの？』

『3ヶ月。多分もうすぐだよ。今度こそこの目で見たいんだ』

『あら、羽化しそうなもの？』

『多分。みんなの前で発表するんだから、ちゃんと羽化してくれないと困っちゃうよ』

モニターを見つめながら言う僕に、母はくすりと笑うと『無理はしないでね』と優しく声をかけてくれた。

母親の励ましに僕は奮起し、さっきよりも更に気合いを入れてモニターを覗き込む。

（今度こそ見てやるぞ、羽化の瞬間）

『旧世代の人類の一部には、蝶のように羽化をするものがいる』

そんな都市伝説のような噂が、僕達の住むステーションには昔から存在する。

僕達大気圏外に住む新世代と旧世代が交流することが全くなく、彼等の事は旧世代の人間が作ったらしい衛星を経由して観察する程度でしか知らないんだから、そんな噂が流れても仕方ないのかも知れない。

僕はモニターを見つめながらマイクを持ち、レポートの続きを入力することにした。

『...その旧世代の人間は、噂に出てくる『さなぎ』と類似点がたくさんあった。

つまり、

- ・下を向いて歩いている。
- ・溜息をつく割合が多い。
- ・他の旧世代との交流が少ない。
- ・基本的に自分の住まいから余り外に出ない。

そして、

- ・時折、テーブルに突っ伏して泣いている。

以上の点から、彼女...以降、仮にアゲハと名付けよう...アゲハは間違いなく『さなぎ』であろうと推測できる...』

突然アゲハがむくり、と起き上がるのを観て、僕は音声入力を一旦中止した。

アゲハは手近に有った箱から白い紙を取り出すと、半分に折り畳んで鼻をかみ、少し離れたところにあるごみ箱らしきものに投げ入れる。

普段ならここで溜息をつくはずだが、今夜のアゲハは少し違っていた。

何かを決心したかのように勢い良く立ち上がると、部屋着の上にダウンジャケットを羽織り、玄関へと歩き出したのだ。

『よし、いよいよだ』

僕は衛星のカメラを彼女にロックさせながら、拳を強く握り締める。そんな興奮状態の僕の事など知らないまま、アゲハは屋外に出て、ひたすら目的地に進んでいく。マップを確認すると、どうやら『バッティングセンター』に向かっているようだ。

うん、間違いない。これは羽化の前兆だ。

僕はわくわくしながら、アゲハを見守っていた。

結局アゲハは『バッティングセンター』で1時間ほど棒で球を打って過ごし、そのまま家に帰り始めた。

僕はその様子をモニター越しに観ながら、首を傾げる。

『おかしいな、特に羽化らしき事はしてなかった気がするけど...』

アゲハは明らかに先程とは変わっていた。表情は明るく、足取りも軽く、背筋はまっすぐに伸びている。美しさすら感じる。

それはまるで、羽化した揚羽蝶のようだった。

『え？僕、何か見落とした？』

慌てて映像をプレイバックするが、特におかしなところはない。

『有るとすれば、球打ちの途中で異種の旧世代人と会話してた位だけど...んん？』

良く見ると、会話の途中から、アゲハの雰囲気が変わっていた。

『いやでも、これはただの...』

...ああ。そっか。

『羽化』の噂とは、そのものズバリな不思議現象じゃなくて、単に『旧世代人は精神的にどん底に落ち込んでも、自力で立ち直る種族である』と言う格言のようなものなんだ。

『なんだよもう。発表は出来るけど...つまんねえなあ』

馬鹿らしくなって大きく伸びをする僕。

モニター上には、力強く歩き続けるアゲハの明るい笑顔があった。

浮き（うーき）

アタリが来ない。

照り付ける太陽にイライラしつつ時計を見ると、既に釣りを始めて2時間が経過している。

もともと期待せずにこの港に来たのだが、ここまで浮きがピクリともしない日も珍しい。

もうすぐ昼飯の時間だからだろうか、周りの釣り人達は釣果を自慢しあいながら、わいわいと釣り具を片付け始めている。

（アジ、キス、タコ、カレイ、カニ...すげえなカニは）

自慢話を恨めしく聞いていても仕方が無いのだが、浮きがピクリともしないうちは、何も出来る事は無い。

（とうとう魚にまで見放されたか）

ついそんなくだらない事を考えてしまう。

そんな姿を見てるのか見てないのか、浮きは何も言わず、ただ海の上をゆらゆらと揺れている。

（気楽で良いな、お前は）

無機物に当たりたくはないのだが、こんな日くらい構わないじゃないか。

（ほんと気の毒だよなあ、運が無いばかりに、すべき仕事が出来ないんだからなあ）

無機物なんだからそんな問い掛けにも応えるはずもない。

解ってはいるが、問い掛けを止める気もない。

だって、暇なんだから。

（このまま糸が切れてさ、流されっちゃった方が幸せかもな）

眼前には広大で静かな海がある。天気は快晴、旅立つには最適な状況じゃないか。

（でも大変だぞ、どこにたどり着くのか分からないし、足元はふわふわしてるし、釣り針なんて言う何でも引っ掛けるトラブルメーカーぶら下げてるし）

あれ、何だかどっかで聞いた話のような。

（新天地にたどり着くのも厳しいぞ。間違いなく陸地に押し戻されて、海岸のゴミ扱いされて、海猫を怪我させたり、ボランティアに処理されたりするんだぞ）

夢なんて、所詮そんなもんだ。いくら努力しても、でかい力には敵わない。負け犬は淡々と処分されるだけだ。

（それでも、糸を切って行きたいか？浮きさんや）

「...い、おい、キテるぞ！」

「え？」

耳元で怒鳴り声が聞こえ、びっくりして浮きを見るが、海に沈んでしまって姿が見えない。

「え、あ、ああ！」

「早く、早く！チャンスを逃がすんじゃねえ！」

「え、あ、はい！」

声に煽られるように竿を持ち、リールを巻きはじめる。

（こっちが要らぬ心配をしてる間に、ちゃんと仕事してたんだな）

慌てて糸を切らないように、竿の感触を頼りに巻くタイミングを測る事を忘れない。

（例え今成果がでなくても、淡々とすべき事をこなしていれば、何らかの結果は出るんだ）

ゆっくりと、しかし確実に巻き上がるリール。

（何を悩んでいたんだろう。出来る事なんて、たかが知れてるじゃないか）

足元の海面に、浮きの姿が見え始める。あともう少しだ。

（ありがとよ。おかげで先が見えた。もうすぐ引き上げてやるからな）

その瞬間、浮きが元気良く海上に飛び出した。

その揺れる姿はまるで、自らの仕事が全うできた事を喜んでいるように見えた。

浮く（うーく）

何かがおかしい。

4番打者の田中がうなだれながらベンチに戻ってくるのを視界の隅に捉えながら、私はマウンドで汗を拭っている相手チームのピッチャーを見つめた。

5回の表、我々の作戦により、彼の球数も既に150球を越え、スタミナもかなり消費している筈だ。実際に球速も見ても分かる程に落ちて来ている。

「...だったら、何故捕らえきれない？」

思わず出てきた呟きに、隣に座るマネージャーが振り向く。

「あの、監督？」

「どうした、斎藤」

「さっきから気になってんですけど、あのピッチャーの球...」

審判のストライクと叫ぶ声が聞こえる。私の目が自然とピッチャーに向いた。

「...ボックスの手前で、少し浮く気がするんですけど」

「え？ほんと？」

私は慌てて球筋をチェックするが、残念なことに球は大きく下に落ちた。

「なんだよ、こんな時にフォーク投げんなよ」

「監督？」

（浮くって事はライズかな。でも彼のデータを見てもそんな球を投げる兆候は無かったし...）

「か・ん・と・く？」

「でも茜ちゃんの目は確かだしなあ。ソフト部のエースだし...」

（し・よ・う・ちゃん！）

耳元で突然名前を呼ばれたので、思わず飛び上がりそうになる。

「な、なんだよ。びっくりするじゃんか」

「カントク、素に戻ってるよ」

「え？あ...」

いかん。積み上げてきたものが。

慌ててベンチの選手を見るが、みな試合に集中していて気がついていない。

「まったく、しっかりして下さい」

「う、すまん」

選手達にはとても言えない。

『鬼のタチバナ』が実は野球素人で、従姉妹の茜ちゃんが実は全権を握ってるなんて。

「茜ちゃんはしっかりしすぎなんだよもう...」

「だから、口に出てますよ、って。カントク」

「あ、ごめん」

まったくもう、と呟く茜ちゃんの声と、審判の2回目のストライクが重なり、私は慌ててマウンドに集中した。

と、そこに、田中が近寄ってくる。

「あの...監督...」

「なんだ、田中」

これでも高校・大学と演劇部だったんだ。切り替えの速さは伊達じゃない。

「奴の球、縦にすげえ回転してます、多分」

あの自信家の田中が珍しく、躊躇している事に、私は内心驚いていた。

「そうか。分かった」

私の応えに満足したのか、田中が軽くお辞儀をして離れて行くのを確認し、再びマウンドに集中すると、目の前ではピッチャーが大きく振りかぶっていた。

「激しい縦回転、浮く球...」

ピッチャーが投げた。球速が速い。

（下回転なら空気抵抗で下に落ちる。上回転なら...え？）

私は目を疑った。

確かに球は浮いたのだが、あれはライズボールじゃない。

「茜ちゃん、あれは...」

「うん、だからさっきから『浮く』って言ったの」

いやだってさ。

あれは『浮く』ってより『バットを避ける』じゃんか。

うちの選手達が一斉にマウンドに向かうのを見つめながら、私は内心、かなり呆然としていた。

「あれの理屈、解る？物理のセンス」

「うむう、普通の変化球なら、空気抵抗の関係上、もう少し早い段階で上に曲がる筈なんだよね。なのにあの球はバットをすり抜けるように上に浮いた...」

私はそこまで一気に言うと、キャップを取って頭をわしわしと搔いた。

「茜ちゃん、ちょっとあいつらの事、まかせるね。この回が終わるまでには何とかするから」

私の頼みに、力強く頷く茜ちゃん。

さあ、解析開始だ。

雨後（うーご）

雨は嫌いだ。
濡れるし。暗いし。
雨具持ち歩くの面倒だし。
会話が湿っぽくなるし。
湿度上がってじめじめしてるし。
カビ生えるし。
...大抵ろくなことがないし。
私は冷めきったコーヒーをやむなく口に含むと、窓の外の景色を一瞥した。

ここは高台にある小さな喫茶店。私はこの喫茶店を『避難所』と呼んでいる。
晴れた日は窓際の席から見下ろす夕暮れの美しい町並みを見て仕事の疲れを癒し、雨の日はそれこそまさに雨のもたらす憂鬱な気分を紛らわすための『避難所』として、この店を利用しているのだ。
もともとこの店はマスターの煎れるコーヒーとホットサンドで有名な店なのだが、だからこそか、夕方に店に来ると思ったよりも閑散としていて、だから私も安心していつもと同じ席を利用することができていた。
（ありがたいけど、経営大丈夫なのかな、マスター）
ふと見上げると、堺雅人似のそのマスターは、彼の特徴であるのほほんとした笑顔を振り撒きながら、カップの手入れをしている。
（...ま、大丈夫そうね）
私は一人納得し、近づいてきた奥さんに新しいコーヒーを注文した。
（少なくとも、今の私よりは大丈夫だろうな）
颯爽と歩き去る奥さんの後ろ姿を見ながら、ふとそんな事を思った。

雨の日は、大抵ろくなことがない。
両親が離婚を決めた日も、最初の彼にこっぴどいフラれ方をした日も...そして夫と子供が事故で亡くなった日も、いつも雨が降っていた。
だから、雨の日は何をしても上手くいかない。大抵失敗して一人でへこむ事になる。
（トラウマ、かなあ）
コーヒーを持って来てくれた奥さんに礼を言いながら、私は物思いにふける。
外を見ると、雨が止みはじめたのか、街の所々を日の光がスポットライトのように照らし出していた。

ふと、背後に何かの気配を感じて振り向いたが、そこには誰も居なかった。
一瞬夫と子供がそこに居るかのような錯覚に捕われたが、そこに聞こえて来たのが足元からの荒い鼻息。
視線を下に向けると、そこにはゴールデンレトリバーが1匹、お座りをしてこちらを見上げている。
（あら、ジョーじゃない）
ジョーはこの店のマスコット犬で、いつもはレジの付近でお客さんに愛想を振り撒いているのだが、たまに元気のないお客さんので励ましている姿を見かけていた。
（そっか、励まされてるのか、私は）
彼の優しい気遣いが、憂鬱だった気分を少し癒してくれる。
私は感謝の気持ちをこめて、出来る限り優しく微笑んで、頭を撫でてあげた。
嬉しそうに目を細めるジョーが可愛くて、何かあげたくなるけど、...ああもうツイてない、何も持ってないや。

「ごめんね、何もあげられるおやつは持ってないの。申し訳無いけど、他のお客さんの所に行ってね」

私がそう詫びると、彼はがっくりと頭を垂れてトボトボと歩き去る。
その後ろ姿があまりにもコケティッシュで、私は思わず吹き出した。

にこやかに微笑む奥さんに軽く会釈をし、少し気落ちしているように見えるジョーの頭を撫で、私は店の外に出た。
既に雨は止み、雨後のひんやりとした風が私の背中をそっと押してくる。
（雨の日も、案外悪くはないかもね）
家に帰ろう。
私は大きく伸びをしてから、まっすぐに歩き始めた。

明日はきっと、快晴だ。

丑（うーし）

丑三つ時と言う時間が昔存在していた。

今の午前二時から二時半ごろの事を指し。その時間帯故か、今でも真夜中の意味で使われる事が多い。

現代では丑三つ時を1時間遅い3時から3時半ごろと勘違いしている人も意外と多いようだが、その時間はあくまで丑の刻であって、丑三つ時ではない。

「...けしてお間違えなきよう」

「誰に講釈垂れてんの。ほら、そろそろ時間だから」

パソコンを弄りながらぶつぶつ呟いている大介に、仁王立ちの貴美が一瞥もくれず容赦のないツッコミを入れる。彼女の視界に映るのは、ありふれた普通の一戸建てだ。

「へいへい...まったく、ユーモアが解らない人って、人生愉しめないよ」

「あんたのそれが愉しんでる、って言うんなら、私は愉しめなくて結構よ」

自分の返答にわざと大袈裟に肩を竦める大介を無視し、貴美は改めて依頼内容を復唱した。

（今回の調査の対象は『丑三つ時の来訪者』。所謂都市伝説の類だが、依頼人は直接的な被害を訴えている）

貴美は依頼人が寝ているであろう、一戸建ての2階の中央の窓を見上げた。

既に電気は消えているが、センサーの数値は依頼人が睡眠状態にない事を指している。

（家族には私達の事は伏せている。この車の位置なら屋外からの侵入者が居ても一目瞭然だ。これで...）

「これでセンサーが反応すれば、まさしく『丑三つ時の来訪者』だね」

まるで貴美の想いを讀んだかのように呟く大介を平手ではたき、貴美は改めてモニターに神経を集中した。

二人が経営している『有限会社DOD』は所謂調査会社である。

元々は弁護士の下請として浮気調査や失踪人調査等を中心に行っていたのだが、3年前に佐々木夫婦を採用してからは、それらの調査よりもこちらの...所謂オカルト系の調査依頼の方が多くなった。

貴美も最初のうちは気味悪がって調査に参加しなかったのだが、大介の、

『どっちかって言うと、不気味で生理的に嫌で薄気味悪いのは浮気調査の方だと思うけどなあ』

という呟きを聞いてからは、むしろ積極的にオカルト調査に参加するようになっていた。

「...まあ、こっちの方が収入良いしね」

モニターに目を向けながら呟いた貴美に、同じくモニターを見ていた大介がこくこくと頷く。

「怖いのは、丑三つ時の幽霊よりも、丑の刻参りをする人間だもんね」

「何よ大介、その丑の刻参りって」

キョトンとした表情の貴美に、ニヤリと笑い掛ける大介。

「丑の刻参りとは、丑の刻(午前1時から午前3時ごろ)に神社の御神木に憎い相手に見立てた藁人形を毎夜五寸釘で打ち込むという、日本に古来伝わる呪術の一種であるのだよ、貴美君」

「分かったけど、そのドヤ顔ムカツク」

貴美が右手を上にと上げると、大介が慌てて両手を持ち上げた。

「あ、いや、ぶたないで...ああ、ほら、モニター！」

「何よ...あ、これ...」

貴美が大介に促されて見たモニターに、人影が映っている。

大柄な男性のようだが、フードを目深に被っているため、人相ははっきりしない。

「...依頼人は、女子高生だよ」

「うん、おまけに父親は小柄だった」

「階段のカメラは？」

「チェック済み。映ってなかった」

貴美はモニターを見つめながら鼻の頭をポリポリと掻く。考え込む時の貴美の癖だ。

「屋根から侵入した訳でもないし...サーモに反応してるから人間なのは間違いないし...」

「ねえ、貴美さん」

大介がいつになく真剣な声で呟く。

「何よ」

「これ、依頼人のひと、危なくない？」

「...あ！」

貴美は我に返ると、スライドドアを一気に開け放つ。

「大介！」

「分かってる！もうやった！」

大介の返答に2階を見上げると、依頼人の部屋でパトライトが回ってるの見える。

「対象は窓際に逃げたよ！」

「了解！」

貴美はそう叫ぶと、土煙とともに駆け出した。

臼（うす）

「へえ、それがそうですか」
老婆が重そうに抱えて運んできた石臼を見て、大介は感心したように呟く。
「お前さんも少しは手伝おうって気にならんのか...ああこら、さわんな！」
「触らなかつたら手伝えないじゃないですか」
「ええいうるさいわ。ほれこれが我が家に代々伝わる『金の臼』じゃ」
ひいふうと息を荒くしながら、老婆はさあどうだ、と言わんばかりに大介を見る。
大介は老婆の熱い視線を受け流しつつ、持参したハンディカメラを構えた。

『ええと、今映しているのが、今回の調査対象の『金の臼』です。持ち主の高梁トヨさん（78）の』
『75じゃい』
『え？ああ、（75）から伺った言い伝えと、依頼人から伺った伝説には類似点が多くありますので、目の前の臼で間違いないと思います』
『思いますとはなんじゃ。偽物だとでも言うんかい』
（ここでいきなりカメラが動き、しかめ面の老婆に向けられる）
『それを確認しに来たんですよ、高梁さん』
（カメラの向こう側で、老婆の顔が強張る）
『なんじゃと？』
『伝説によれば、この『金の臼』で胡麻を挽くと、臼が金色の光に包まれ、出来上がった金色のゴマ油はどんな毒にもたちどころに浄化するんでしたよね』（大介の声に、顔をしかめる老婆）
『くどい。さっきも話したじゃろうに』
『それを今からやって欲しいんですよ』
『無理じゃ』
（即答する老婆）
『何故です？』
『あんたは信用できん』
（老婆はそう言うと、愛おしそうに臼を撫でる）
『これは先祖代々ひっそりと受け継いできたものじゃ。世間に知られたら大変な事になる』
『でも、伝説の事を調べ始めたら、結構簡単に高梁さんにたどり着きましたけど』
（大介の反論にぐう、と唸る老婆）
『そ、それにな、これを使うには時期も材料もなく...』
『ああそれはご心配なく。伝説には『梅が見頃』とありますから間違いなく時期は今ですし、材料に使われていた当時の胡麻も...ほら、ここに』
（カメラの隅に包み紙が映り、老婆の顔が再び強張る）
『あとは何か必要なもの、有ります？』
『...ないわい』
（老婆が無言で左手を突き出すと、カメラが近づき、包み紙を手渡した。老婆は中身を覗きこみ、目を見張る）
『よう見つけたの、こりゃ確かに懐かしい胡麻じゃわ』
『これでも一応探偵なんでね。出来るかい、高梁さん』
（大介の声に、老婆はゆっくりと顔を上げる）
『仕方なかる。じゃけどな、上手くいかんかったら...』
（老婆はそこで言葉を区切り、カメラに目を向けた）
『いかんかったら？』
（大介の唾を飲み込む音が入る）
『...ま、勘弁の』
（老婆はそう言うと、クックッと笑いながら臼に胡麻を入れ始めた）

嘘（うーそ）

ふと気がつくと、僕は帰路の途中に居た。
鞆を持っていないということは、あの後そのまま学校を出てしまったのだろうか。

あの後。
あの時。
あの時、どうして、
どうして、教室になんて戻ったのだろう。

（確かに彼と付き合ってるけど、私が好きなのは...なの！）
（...のせいだから！私は悪くない！）

扉越しに聞いたひとみの叫びが。
彼女の爆発した本当の気持ちが。
これまでの彼女との思い出と、その時の表情が。
全てが頭の中でクロスオーバーしている。

ふと気がつくと、僕は途中の高台にある公園で、下に広がる夜景を見ていた。

そうだ。ここで告白したのは僕だ。
付き合って浮かれていたのは僕だ。
彼女達の間係をこじらせたのは、鈍い僕だ。

...と、その時、携帯が鳴った。携帯を取ろうと右手を見ると、強く握りしめ過ぎたのか、手の平に血が滲んでいた。
構わず携帯を取り出しパネルを見ると、彼女からのメールが来ている。

『待ってても来なかったから、先に帰って来ちゃったよ ✦ 何かを有った？』

「あんたとあんたの幼なじみとあんたの幼なじみの彼女との修羅場見ちまったんだよ、めぐみさん」
僕は一人ぼそり、と呟くと、キーボードをスライドさせ、ふにふにとメールを打ち始めた。

『ごめん、もうむ...』
ダメだ。
『無理』の『り』が打てない。
パネルが涙で良く見えない。
身体が、彼女との別れを望んでない。

僕は沸き上がる嗚咽を必死に堪えて、書きかけたメールを削除する。

『ごめんね思ったよりも疲れてたみたいで、図書室で寝てたんだ 🥱💧 でわまた明日！』

多分、彼女につく最初の嘘だろう。
そして、これからは更に嘘を重ねる事になるだろう。

全部、僕が悪いんだ。
悪い人は、罰を受けるべきなんだ。

これは、罰だ。

沸き上がる嗚咽を堪え続けながら、僕は一人、携帯を見詰めていた。

歌（うーた）

彼は鉄パイプで作られた仮設ステージの真ん中に立ち、声もなく集まった沢山の観衆をぼんやりと眺めていた。町を結ぶ道路がある程度復旧したからか、この3日間で全会場で重複含め150万人もの人達が来場してくれたと聞いたのが、先程歌い終えて降りていったステージ脇でのこと。企画立案をした大学生達が人目も気にせずわんわん泣いているのを見て、居ても立ってもいられず、思わず再びステージに上がってしまったのだ。

今回の野外フェスが企画されてから既に1年が過ぎていた。そもそもこの野外フェス自体、学生達の思い付きから始まっている。きっかけは首都圏の大学のアカペラサークルによる被災場所での応援ライブだったそうだ。アカペラなら器材も要らず、レパトリーも多岐に渡っているから、各避難所ではかなり好評だったらしい。最初は3大学の有志が各避難所を廻っていたのだが、気がつくとな国のアカペラサークルが参加連係して廻るようになり、被災地の至る所で楽しいハーモニーが響き渡るといふ不思議な状況が半年程続いたそうだ。

そして、この話はここで終わらない。各避難所でライブを行ったあとに、彼等は一枚のアンケートを避難所の方に書いてもらっていた。その内容は、彼も見せてもらったが、至極簡単なものだった。被災地でのチャリティコンサートの開催の是非。開催希望なら、コンサートに来て欲しいアーティストと演奏して欲しい曲目。この2点のみである。

どうやら学生達は最初から『被災者が本心からやって欲しいコンサート』を開催したいと考えていたらしく、それを確認するために各避難所を一つひとつ丁寧に廻っていたとのことだった。

無論、そんなアンケートを被災者一人ひとりに書いてもらえば、対象数もその年齢の幅も尋常なものではなくなる。半年間かけて集まった沢山のデータを集計するだけで、3ヶ月を要したそうだ。その結果が、この史上最大の無料野外フェスの企画に繋がることになる。

彼は観衆の表情を見ながら、恐らく一年前、彼の元にやって来た学生達の熱い闘志を秘めたあの表情が蘇っていたのだろう。彼等が彼にアポを取り付け、その場で書面にて渡してきた要望は、以下の通りだったという。

- ・会場は、可能であれば、各県の被災により更地になってしまった場所を使わせてもらう。
- ・会場をロック、アニメ、演歌等のジャンルに分け、夜店を各会場で広げて、被災地全体がお祭りのような盛り上がりを見せるようにしたい。
- ・被災者が希望したアーティストを出来る限り呼びたい。

「...これは、無理だろ」
彼がその紙を見て発した第一声が、これだった。
「最大の問題は、開催地だ。更地に会場を作らせてくれと言われて、その土地の所有者が良い気持ちになるとは思えないし、大体そこにある瓦礫の撤去だけでも莫大な金と時間と神経を使わなきゃいけない」
「あと、アーティストの問題もある。いくら被災者のためとは言え、彼等も忙しい身なんだ。全員があっさりOKするとは思えんぞ」

立て続けにまくし立てた彼に、しかし学生達は負けなかった。

1ヶ月後。
再び彼の元にやって来た学生達は、何枚かの紙を差し出してくる。中身は、会場設営の許可証だった。口をあんぐりと開けた彼に学生達が説明したところによると、どうやら直接現地に赴き、瓦礫の撤去...というより、大切にしていた品々の発掘に各大学の有志が協力すると言う条件を提示し、彼等のフェス開催の目的を説明して、必死の説得を試みたらしい。
「よくもまあ、OKしてくれたもんだ。ここまでされちゃあなあ」
学生達の熱い闘志が彼の何かを目覚めさせたのだろうか。
彼はアーティストへの参加協力要請を、結果、受け入れることになった。

再びステージの彼に戻そう。

彼は右手を上げ、観衆を静かにさせると、ゆっくりと口を開いた。

「あー、これにて今回のフェスは終了となります」

途端にざわめく観衆。

「はいはい、静かに。...今回のフェス開催にあたって、いろんな人達の並々ならぬご協力が有りました。大事な思い出の遺る土地をお貸ししてくれた地主さん、瓦礫の中から思い出の品を丁寧に取り出してくれた学生達、無償でこれらの会場設営してくれた地元の建設会社さん、忙しい中世界中から駆け付けてくれた様々なジャンルのアーティスト達」
彼はそこで一旦言葉を切ると、改めて観衆を見回す。この会場だけで3万は居るであろう観衆の誰もが、静かに彼の言葉を待っていた。

「このフェスは、今ステージ脇に居る...ほら、出て来い...こいつらが最後まで全て仕切っていました。こいつらが始めなければ、こんな...なんつうんだ、どでかいお祭り騒ぎも無かった、ちうことだ」

彼がステージに上がって来た学生達に左腕を伸ばすと、3万の観衆から一斉に歓声と拍手が巻き起こる。

彼は号泣する学生達を横目に見つつ、再び観衆と向き合った。

「ここに居る皆さんは、今回の震災でいろんなものを失ったと思う。申し訳無いが、俺達にはその失ったものを取り戻す力はない」

「俺達に出来ることは、この場所を見るたびに、辛い思い出だけじゃなく、『あんな楽しいことも有ったんだ』と笑って話せるような、そんな事しか結局できなかった」

彼が言葉を詰まらせ、そんな彼に観衆からの声援が飛ぶ。

「...ああもう、くそっ、
いいか良く聞けおまえら！」

歌は、世界を救わねえ！

歌は、地球を救わねえ！

歌が、人を救うんだ！

よっく覚えとけコンチクショウ！」

彼の叫びに、観衆が爆発した。これまで様々なコンサートやフェス取材した私だったが、あの瞬間程の感情の爆発は初めてだった。

間違いない。

彼等はきっと大丈夫だ。

歌は人を救うんだから。

(文責 月刊ライブレポート 春日真理亜)

内（うち）

僕は一人、車の中でほくそ笑んでいた。

目の前のノートPCには、愛するかなえサンの部屋が映っている。

昨日調査会社が盗聴器探しに来た時はかなり冷や汗をかいたが、あの馬鹿な連中は僕の仕掛けたダミーを取り除いただけで帰って行ったので、もう安心だ。僕の仕掛けた盗撮カメラは、無線LAN搭載の薄型ハイビジョンカムだ。旧式の発見機で見付けられる訳がない。

僕は頬が緩むのを感じながら、カメラの前に座ったかなえサンが髪の手入れをするのを眺めていた。

「もう大丈夫だよかなえサン。これでもう邪魔する奴は居なくなったからね。早く本当のかなえサンを見付けて、僕のものにしてあげる」

僕は液晶越しにかなえサンに囁くと、唇をゆっくりと近づけていく。

かなえサンの様子が変わったのは、あと少しで唇が液晶に触れる、まさしくその直前だった。

かなえサンは突然びくっ、と身体を強張らせ、顔をこちらに向けたまま瞳孔だけ右にスライドさせている。

どうやら、後ろを気にしてるみたいだけど、何だろう。

僕は嫌な予感がして、別ウィンドウを開き、リアルタイムに録画していた動画ファイルを再生してみる。かなえサンがびくっ、とする直前に合わせ、音量を上げてみると...間違いない、奥の方で物音がしている。

「誰か居るのか？」

かなえサンが後ろを気にしながらも再び髪を整え始めたのを見ながら、僕はその可能性について検証し始めた。

うん、有り得る。

かなえサンは女優だ。ストーカーが狙っていても何の不思議も無い。

不幸にも、今日はあの馬鹿な連中が中に入っているのだ。

あいつらの中にストーカーが居たのかもしれない。

僕は思わず携帯を取り出すが、ボタンを押そうとして、その指を止めた。

待てよ。違うかも知れない。

もし違えば、間違いなくかなえサンは僕の存在を確信する。迂闊なことはできない。

「...どうしよう」

僕は迷いつつ、再び液晶に目を向ける。

カメラの向こうでは、かなえサンが携帯で誰かと話しているようだった。

『...うん、多分気のせいだと思うけど、怖くて...うん、分かった』

かなえサンは大きく頷くと、バスローブ姿のままそっと立ち上がる。

「え？まさか見に行くの？」

僕はパニックった。ヤバイよ、ヤバイ！

『怖いから、切らないでね...』

かなえサンは携帯を握りしめながら、奥に見えるユニットバスのドアに向かっている。

「やだ、マジでヤバいって！電話の奴、止めさせるよ！」

立ち上がりたくても、怖くて身動きが取れない。

その間にも、かなえサンはゆっくりと奥に向かい...ドアの前にたどり着いた。照明が消えているため、磨りガラスの向こうは真っ暗だ。

『...いくよ...』

かなえサンは電気に眩くと、ドアに手をかけ、ゆっくりと開いた。

『ヒギャアアアアアアアア！』

突然ナニカがユニットバスから飛び出し、かなえサンに飛び掛かった。その勢いの良さにかなえサンともどもカメラの左側、視界の外まで吹っ飛んで、かなえサンの脚とナニカの毛むくじゃらな裸の下半身しか見えない。

「うわあ！」

僕は思わず叫び声をあげた。

「なんだこれ、化け物？ヤバいって！ヤバいって！どうする？！」

自分でもパニックっているのが解ってるが、何をどうして良いのか解らない。

その間にも、ナニカはかなえサンに何かをしているらしく、ナニカが動く度にかなえサンの脚が小刻みにびくっびくっ震えているのが見える。

『うぐっ...あぐっ...ごぼっ』

「かなえサン！かなえサン！」

喰われてる。

怖い。

ヤバい。

逃げなきゃ。

立て続けに頭の中を警告音が響くが、身体は石のように固まってしまっている。

そして、かなえサンの脚が、びくり、とも動かなくなった。

僕の頭の中の警告音はまだ鳴り響いている。

「か、かなえ...サン...？」

僕は聞こえる筈の無い問い掛けをするが、かなえサンはやはり動かない。

そのかわり。

化け物がむくり、と起き上がった。

「ひっ」

思わず悲鳴が漏れる。

化け物は腰を曲げた状態のまま、そのなんとも形容しがたい頭部を左右に揺らして...何かを探してるようだった。

「...まさか」

嫌な予感がした。

化け物がのっそりと、鏡台の前にやって来たのだ。

まさか、鏡が気に入らないのか？それとも内側に仕込んだカメラに気付いたのか？

『グギャア！』

化け物は叫び声を上げると、鏡台に襲い掛かった。カメラに鏡が割れる瞬間が写し出され、そして映像が途絶えた。

僕が我に返ったのが、その瞬間だった。

慌ててパソコンを閉じ、エンジンをかけ、アクセルを思い切り踏み込んで...

前を向くと、目の前に電柱があった。

部屋の外で激しい衝突音が出て、伊吹かなえは慌てて飛び起きた。

鏡台の前に居る化け物も、何事かと窓の外を覗こうとしている。

「馬鹿！その姿を晒しちゃダメだって裕也！内にいなさいよ、うちに！」

「あっ、そか」

かなえの叱責に我に返ったのか、化け物は慌ててしゃがみ込む。

「まったく、きみはだから最後の詰めが甘いよ、もう」

「ごめんよう」

かなえの畳み掛けるような叱責に、裕也と呼ばれた化け物もごもごと謝る。

かなえはすっと立ち上がると、化け物の前で仁王立ちになった。

「もう。カメラを見付けたのも、この作戦を立案したのもきみだから？せっかく褒めてあげようと思った矢先にこれだよ。

なんで素直に褒めさせてくれないかな」

窓の外、遠くから救急車のサイレンの音が近づいてくる。

化け物は済まなさそうに頭を搔くと、その不気味な顔をかなえに向けた。

「褒めなくても良いからさ、これ、取ってくんない？この内側さ、息苦しくて死にそう」

かなえは苦笑いすると、特殊メイクでガチガチにされた頭部の被り物に手をかけた。

討つ（うーつ）

勝負は、一瞬では終わらなかった。

二人が切り合いを始めてから一刻が経とうとしていた。

彼は息を飲んでその仕合を見届けていたが、予想以上の長丁場に神経がもたなくなってきたのか、時折ゆらり、と身体が揺れては、慌てて背筋を伸ばして仕合に神経を集中させている。

当の二人はと言うと、四半刻程前に刀を放してからは、ぴくりとも動かないが、彼等の身体の周りに漂う、汗が蒸発してできた“もや”が、仕合がまだまだ続いている事を示していた。

「お前さん、やるな」

右手に居た、擦り切れた着物を着た男が、刀を上段に構えたままもう一人の男に声をかける。

「お主も、よくぞそこまで技を研けたものだ」

もう一人の、西洋の服を着た男が、こちらは刀を中段の位置で構えたまま応える。

「お主、そこに至るまでに、何人の罪の無い人を斬った」

左手の男の問いに、右手の男がニヤリ、と笑う。

「罪の無い人、等と言うものが居る訳がないではないか」

「だからお主は斬ったのか」

重ねられた問いに、右手の男は高らかに笑う。

「人を斬るのは悪か？ならば今まさに俺を斬ろうとしているお前さんはどうだ？そこで親の仇を討つ為に立っておる餓鬼は？」

右手の男に話を振られ、彼はびくり、と身体を震わせる。

左手の男はと言うと、平然とした様子で刀を構えていた。

「今の俺には、以蔵が遺したこの刀しかない。何も残っていやしない」

右手の男の声に、力が少しずつ戻り始めている。

「刀は人を斬る為に在る。以蔵と俺は、刀と共にそうやって生きてきた」

左手の男は、中段に構えたまま、静かに話を聞いている。

「お前さんは違うのかい。排刀令を守らず、そうやって刀を振り回すお前さんは」

右手の男の問いに、しかし左手の男は応えない。

「ふっ、やはり同じではないか。人斬りは所詮人斬り...」

「可哀相な男よ」

左手の男が、静かに口を開いた。

「ほう、可哀相とな」

「ああ。お主は可哀相な男だ、と言ったのだ」

右手の男の表情が険しくなる。

「何故か。何も無いからか」

「違う。それが違うから、可哀相だと言っておるのだ」

左手の男の応えに、右手の男の刀が最上段まで上がる。

「違うだと？何が違うのだ。俺には刀しかない。以蔵と作り上げた...」

「そこだ。そこが違うのよ」

その次の瞬間の事だった。

右手の男に一瞬のためらいが生まれたのを、左手の男は見逃さなかった。中段から右下段に刀を下ろし、まっすぐに突っ込んでいく。

右手の男は一瞬反応が遅れるが、裂帛の気合いと共に、最上段から刀を一気に振り下ろした。

数瞬の後、勝負は決した。

「...改めて聞きたい。何が...違うのだ？」

刀を振り下ろした格好のまま、口から血を吐きながら、右手だった男が問う。

左手だった男は、見届けていた少年に頷きかけると、静かに口を開いた。

「お主も、何かを守るために刀を振るっておったのよ」

少年は震える両の手で形見の脇差しを持ち、半ば怯えた表情で仇討ちの相手を見つめている。

「何かを...守る？俺が？」

そう言って笑おうとするが、喉に溜まった血でむせてしまう。

「以蔵殿との思い出を、守っているではないか」

さも当然、と言わんばかりの声に、目を見開く右手だった男。

「拙者は師匠との約束を、この童は父親との思い出を。我等とお主は何も変わらんのだよ」

「はっ」

男は力無く笑うと、刀を杖にして再び立ち上がり、少年と向き合う。

「もう良いわ。童よ、遠慮なく討つが良い」

そう言った男の表情は、どこか晴れやかな表情であった。

討て（うーて）

この男は違う、と少年は思った。

目の前に居るのは、両親の仇の筈だった。
金の為に両親を斬り捨てた男の筈だった。
なのに。

少年の目には、目の前の男がそんなに野卑な人だとは思えなかった。

「早く討て。さもなくば、先に死ぬぞ」

にやり、と男が蒼白な顔に凄惨な笑みを浮かべる。

「彼はお主の父を斬った。お主にとっての仇であることに変わりはない」

左手に立つ侍が少年に語りかける。その言葉に少年は違和感を感じて、思わず侍を見る。

「父を...ならば、母は？母はいったい...」

その時、少年に天啓が降りた。

母の刀痕は左肩からの一刀。

そして、両親が二人で歩く時は、必ず母が右後方を歩くようにしていた。

まさか。

少年は目を大きく見開き、侍を見る。侍が何も言わず、静かに頷くのを見て、少年は再び男と向かい合った。

「...あなたは、母も斬ったのですか」

声を震わせながら問う少年に、しかし男は凄惨な笑みを浮かべたまま見つめ返している。

「はようせんか。俺が死んでも良いのか」

男の怒気を孕んだ鋭い声も、途中からその勢いを失っている。

少年は迷っていた。

確かに、父を斬ったのはこの目の前に居る男だ。

だが、母を斬ったのは、恐らく父だ。

ある意味では母の仇を討った男を仇として討つ事に、何の意味が有ると言うのだろう。

「お主は、何の為にここに来たのだ。それを考える事だ」

侍が静かに告げる。

「何の為...」

少年は改めて男を見る。男は既に虫の息であるにも関わらず、最期の気力を振り絞って立っていた。

「城太郎さん、」

名を呼ばれた侍が、少年を見つめる。

「この人、助けたいのですが」

少年の言葉に、侍はにこりと笑った。

独活（うーど）

大人って。

狡くて、
鈍くて、
いつもどこか痛がって、
いつも忙しい振りをしてて、

見えているものしか見なくて、
見えないものを本能で拒否してて、
自分の常識から外れた理屈は屁理屈と言いきって、
言いきられると腹を立てて、

流行を追う若者を馬鹿にして、
自分は無意識のうちに流行に流されて、

昔の事なんて都合の良いところしか覚えて無いのに「昔は良かった」などとのたまって、

同じ話ばかりして、
肝心な話はしなくて、
突っ込まれるとまた腹を立てて、

すぐに思考停止して、
トラブるとパニックって、
いきあたりばったりの行動をして、

社会のため、と建前を声高に叫んで、
実際は自分のためにしか行動しなくて、
保身の為には平気で嘘をついて、

子供には偉そうな事を言って、
自分の事は「もう良いんだ」とごまかして、

何か高尚な事を考えている振りをして、
実はガキンチョと何ら変わらないことを考えてて、

しなくても良い悩み事で頭を抱えて、
結局解決出来ずに投げ出して、

ただの揚げ足取りを論戦と呼んで、
仕事は戦いだと言いながら実際はただの部品に甘んじてて、

ストレスと言う言葉に敏感になりすぎたせいでかえってストレスを抱えてて、
「癒し」と言う言葉に縋り付くように自分の欲望を吐き出して、

他人に振り回されて、
家族を振り回して、

普段は家族なんて二の次だけど、
危ない時は家族を真っ先に守る。

大人って、
そんなただの独活の大木。

雲丹（うーに）

結局何にも変わりやしなかった。

札幌から出発してはや2ヶ月。途中で生活費を稼ぎながらのサイクルツーリングも、気がつけば網走市を過ぎていた。自分を変える為に始めた筈のこのツーリングも、気がつけばただ生活費を稼ぎ、食料が確保出来たらあとはただ自転車を漕ぐ毎日。

「...こんなん、だったかなあ...」

目の前のカゴを見下ろしながらつい漏れた独り言が聞こえたのか、雇い主のおじさんが平手で背中を思い切り張ってきた。

「ほれ、何ぶつぶつ言ってんのよ。たつたと運べ」

僕ははたかれた背中をピンと伸ばすと、慌ててカゴを持ち上げる。中身は今朝の漁果だ。

「親方、今日は重いですね」

僕の感想に、親方の苦い笑いが応える。

「まだまだだあ。もう少し採れりゃ、楽になんだがなあ」

親方はぼやくと、僕の顔を覗き込む。

「俺も、お前さんも、な」

にかっ、と笑う親方に、僕は何とか笑みを返す事ができた。

「はい、お疲れ」

お昼頃に親方の家に戻ると、奥さんがお昼を用意してくれていた。

「お、ウニじゃねえか。どしたのよ」

親方のテンションの上がった声に、奥さんが自慢げな顔を見せる。

「ヤマザキさんのおすそ分けさ。良いウニっしょ？」

奥さんの満面の笑顔が眩しくて、僕は思わず目を逸らし、逸らした事をごまかすように目の前のウニ丼を眺めた。確かにボリュームのあるおいしそうなウニだった。

「よっしゃ、食べるか」

親方は勢い良く椅子に座ると、丼の脇に置かれた山盛りの刻み海苔をがばっとつまみ、ウニの上のがばっと乗せる。

テンションを上げたままさっさと掻き込み始めた親方を横目に、僕も海苔を振りかけてひとくち口に入れた。

「...旨い」

「っしょ？」

思わず呟いた僕に、奥さんの満面の笑顔が向けられる。

「そりゃ旨いべや、旬なもの」

親方が口いっぱい頬張りながら僕に言い、行儀が悪いと奥さんのお叱りが飛ぶ。

「...んともう。ウニはさ、育つのに結構時間がかかるのよ。だから、採るにしても、何でもかんでも採って良い、って訳じゃないのさ」

なるほど、と僕は奥さんに頷く。美人で優しい奥さんの言う事は、何でもかんでも頷く僕。

「まあ、あせってん、ろくな結果にならない、って事だわ」

親方が口いっぱい頬張りながらそう言って高らかに笑い、また奥さんに怒られているのを見ながら、僕はまたひとくち口に入れる。口いっぱいに広がったウニの甘みが、さっきまでの陰鬱な気分を吹き飛ばしてくれた。

「そうですよね。焦っても良い事無いですもんね」

思わず呟いた僕に、親方と奥さんが笑顔で応える。

彼等の優しさに甘酸っぱい何かが込み上げてきて、僕はそれをごまかすように丼を掻き込み始めた。

畝（うーね）

（さあ、もうすぐだぞ）

僕は正面に伸びる畦道を見て、左手のロープを力無く握り締める。

そのロープの先には、我が家の愛犬、ロンが居た。

ロンは舌をハッハッと出しながらも、眼を爛々と光らせて前を見つめている。

（はは、溜めてんなあ）

ロンの身体の周りに『行きたいけど我慢してます』オーラが漂っているのを見て、思わず笑みがこぼれる。もちろん、歩くスピードは上げない。

（慌てるなよ。畦道に入って一本目の畝だからな）

ロンはこちらをちらちらと見ながらも、自分から率先して走りだそうとはしない。

一緒に暮らし始めてはや7年。最初は僕を引っ張り回していた彼女も、最近はややくペースを併せるということを覚えてくれていた。

あと5m。

彼女の散歩コースで、唯一彼女に全力疾走を許可しているのが、この300m近くある直線の畦道だった。

畦道の左手に垂直に横切る畝を目印に、僕も彼女も全力で駆け抜けるのが、僕達の散歩コースの山場になっている。

あと5歩。

僕はいつも通り、ロンがすっ飛んで行かないように、左手にロープを少し巻き付けた。張り詰めたロープから彼女の緊張感が伝わってくる気がして、何となく嬉しくなる。

あと4歩。

僕の心の中にあるセカンドに入っているギアに手をかける。

あと3歩。

空は快晴。夕焼けの鮮やかなグラデーションが僕達の上に広がっている。

あと2歩。

まだかまだかとロンがそわそわし始める。

あと1歩。

僕の中にある、今日一日あった嫌な出来事が一気に吹き出してくる。

ふざけんなや。

馬鹿なお前らの事なんて、知らんわ。

そして、僕達は見えない白線を踏んだ。

「ロン、行くぞ！」

僕は自分のギアをローに切り替え、一気に加速する。

隣でロンが全力で駆け抜けるのが見なくても解る。

あと50m。

僕達はギアをトップに切り替え、ひたすら走り抜ける。

息が上がって、頭の中が真っ白になり、嫌な記憶が次々と後頭部から抜け落ちていく。

あと10m。

先の道路を走る車はない。

一気に駆け抜けようと、僕達のギアがハイトップに切り替わる。

あと少し。

身体中が悲鳴を上げているが、知ったことか。

走りきるんだ。

ロンと一緒に、最期まで。

「うおりゃあ！」

僕は薄れていく意識の中、雄叫びを上げながら、ロンと二人でゴールの見えるテープを切った。

右派（うーは）

彼が案内されたその料亭の一室に入ると、上座には既に恰幅の良い男が座っていた。

彼がいつも議場で激しく対立しているその男も、与野党の立場が逆転した今ではその覇気を薄れさせている。

「ほお、与党の中心人物となれば、さすがに疲労も貯まりますか」

彼の皮肉を箆めた言葉に、男は瞬間顔を赤くするが、諦めたように力無く笑った。

「未曾有の大震災でしたからな。全精力を注ぎ込み頑張っていれば、疲労も貯まるよ」

彼は案内してくれた女性に礼を言い、下座に座る。

「珍しい、あなたがテレビアピール無しに動くことも有るんですか」

彼の皮肉に高笑いする男。

「まあ、とにかく、料理を愉しもうではないですか」

男は彼に笑いかけると、タイミング良く襖を開けて料理人が入って来た。

「で、本日の御用件は」

彼が料理を口に運びながら男に問うと、男は静かに箸を置き、深々と溜息をついた。

「大連立の事なんだが、何とかならんだろうか」

男の問い返しに、彼も深々と溜息をつく。

「なりませんね。先日のそちらの暴君殿がやらかしたうちの党首への暴言は、ありゃあ許されるものじゃないですからね」

やはりか、と呟いて肩を落とす男。

「あれは儂も止められなかった。まさかあそこまで阿呆だとは思ってなかったのな」

男のぼやきに、彼は鼻で笑った。

「思ったたからこそ、これまで利用していたのでしょ。誰も居ないこの場で、おためごかしはご遠慮頂きたい」

彼の皮肉に、男は「やはり通じんか」と高らかに笑う。

「しかしな、彼の言い分も解るだろう？今は非常時だ。与党だ野党だといがみ合う時では無い」

「解ります。しかし、そこにこだわっているのはそちらの暴君殿ではないですか。先日の『下請要請』が、まさしくそれを証明しています」

彼の返答に苦い顔を見せる男。

「そもそも、貴方の腹の中に、与党だ野党だ、左派だ右派だと言う発想が有る事自体が驚きですね」

肩を竦めながら言う彼に、男は如何にも不満げな表情を見せる。

「そうかね？これでもれっきとした理念は持ち合わせているのだが」

彼はその反論にすぐには応えず、口直しの緑茶をひとくち口に含んだ。

「ならば何故にあの暴君殿と手を組まれているのですか。目的は同じでも、そこに向かう道が明らかに違う彼と」

彼は一旦間を置き、男を見た。男は平然とした様子で彼を見ている。

「『我々国会議員には、背負うべきものが二つある。一つは国家の安寧。もう一つが...』」

「『...自分を推してくれた地元の有権者達だ』だったかな。懐かしい言葉だ」

彼の言葉を静かに引き継いだ男が、グラスの日本酒を一気に飲み干す。

「昔の貴方の言葉ですよ。『地元と国を天秤に掛けるならば、私は間違いなく地元を取る』ともね」

彼は挑むように男を見つめるが、男は物思いに耽っているかのようにグラスを見つめていた。

「そちらの暴君殿は、今、政党の議院達を背負うので一杯いっぱい、国も有権者もどちらも背負って無い。そんな彼と誰が手を組もうと？」

彼の問いに、男は応えない。

「私達には、責任が有ります。だがそれは、国民や地元の有権者に対してであって、決して党の為ではない。例えどんな事が遇っても、その基本を忘れる事はしちゃいけないんです」

彼は一気に言い放つと、上着を手に取り立ち上がり、軽く会釈をした。

「...これから更に厳しくなるぞ、日本は」

男の諦めたような呟きに、彼は柔らかい笑みを浮かべた。

「『力の強い政党が生き延びる訳ではない。力の強い政治家が生き延びるんだ』でしたか。今こそ我々の出番ですからね。何とか復興資金を捻出してもらいますよ。御覚悟の程を」

彼の言葉に、男は高笑いを上げた。

馬（うーま）

馬面という言葉が有る。

馬のように長い顔の人を指して言う言葉なのだが、私はどうも納得がいかない。

「だって、馬の顔は可愛いじゃない。ねえ、ソウタもそう思うでしょ？」

不思議そうに私を見ている葦毛の子馬にそっと手を触れると、ソウタは軽く震えるが、嫌がるそぶりは見せない。

私は横に回り、首の辺りを軽く撫でながら、夕焼けに紅く染まる牧場を眺める。

「今日は怖いおじさんも来なかったし、平和だったね、ソウタ」

（走れない馬は...まだ小さい...経費を考え...処分も考えないと...）

突然昨夜の会話が脳裏を過ぎって、胸の奥がきりりと痛みだす。

どんな話が有ったのか、高校生にもなれば私でも解る。

ソウタが危ない事くらい、解る。

そして、私が無力だと言う事も。

「...わっ、えっ、ソウタ？」

顔目掛けて生暖かい風が当たってきて、私は我に返った。目の前には、首を曲げてこちらを見つめている心配そうなソウタの顔。

「やだ、大丈夫だって。いくら貧乏でも、ちゃんとソウタのご飯は有るからさ」

そう言って軽く首の辺りを叩くと、ソウタは叩くなと言わんばかりに頭を大きく左右に振る。

そのリアクションが彼らしくて、私は思わず吹き出した。

「大丈夫。あんたは私が守るから」

私は胸に込み上げる想いに身を任せるように、ソウタの首をぎゅっと抱きしめた。

海（うーみ）

「あと少しだ、踏ん張れや！」

朦朧とし始めた意識の中、後ろから部長の怒鳴り声が聞こえてくる。

「おら、返事は！」

『ハイ！』

部長の叱咤にパーティメンバー全員（6人だけど）必死に叫び返す。傾斜50度の崖のような道を登ってる最中に叫ばせる辺り、やっぱり部長は鬼だ。

「おら！坂崎！動かねえと尻の穴に中指まで突っ込むぞ！」

坂崎...僕？

中指...マジ？！

「ひいっ！すみません〜！」

僕はブラックアウトしかけてた意識を無理矢理引き戻し、重い脚を必死に持ち上げた。

部長の決断はいつも急なのだが、今回の夏休み縦走5Daysは特に急な話だった。しかも暇人強制参加となってしまう、海に行こうと話していた僕まで巻き込まれる始末。

「海に行きたいね〜...だとお？！ワングルなら夏は山だろうが！」

叫ぶ部長に「ワングルなら海でも良いでしょうに」...とは言えず。

次の日から始まった鬼のような事前トレーニングをひいひい言いながら何とかこなし、やって来ました白山連峰。

トレーニングのおかげで何とか3日目までは無事にクリアし、今は4日目の昼前。

この縦走のメインイベントである鬼の登りを全員何とか切り切って、小休を取っているところだった。

「やれば出来るじゃねえか。ほら、あれがピークだ」

疲れてぐったりしている僕にのしかかりながら、部長が嬉しそうに話しかけてくる。息を切らしている僕は返事も出来ず、ぼんやりと尾根の先を見上げた。

そこには、雄々しくそびえ立つ小さな岩山。

うわあ、まだ八合目じゃんか。

「あと1時間位だな。頑張れよ」

僕のげんなり様子に部長は薄く笑うと、よっこらしょ、と立ち上がり、腕時計を見て、鬼のような怒鳴り声をあげる。

「あと1分！息整えとけよ！」

『海なんてのはよ、一人でも行けんだ。だけど山は違う。俺らみたいな素人に毛が生えたような奴らは、パーティ組んで行かないと危ないんだ。解るよな？』

出発前夜。

バイト帰りに部室でいそいそとパッキングチェックをしていた時に、部長が来てかけられた言葉が、これだった。

『いや別に僕はそこまで...』

弁明しようとする僕を手で制止する部長。

『良いんだ。分かってる。でもな、皆で見るピークからの眺めは、最高だろ？』

『そりゃあもう。晴れてたら文句なしですよ』

僕の答えに満面の笑みを浮かべる部長。

『だろ？このメンバーで登るのもこれが最後だろうし、まあお前には申し訳無かったけどよ、付き合ってくれや』

そう言った部長の表情が、少し寂しそうに見えた。

その部長が、今は鬼の表情で前を進むメンバーをせき立てている。

「ほら、マジで目の前だって！脚を前に踏み出せ！」

僕は現実と記憶がないまぜになった意識のなか、部長に言われるままにひたすら前へと進む。

無論、他のメンバーの様子を見る余裕なんて全く無い。

「あの切れ目まで行け！あそこがピークだ！」

部長の声も少し遠くから聞こえてくる気がする。

「坂崎くん！休んでる人が見えるよ！頑張ろ！」

紅一点の南田さんの可愛い声も、遠い。

ただひたすら前へと。

「ほら、元気な奴は走れ！」

部長の怒鳴り声とともに、武田さん、水上さんが猛ダッシュで登り始めた。鬼だ。

「さかざきい！お前ならまだやれるだろが！気張れ！返事は！」

遠くから聞こえてくる部長の叱咤。やばい、返事。

「ふあい！」

「よっし！行け！どんどん行け！」
部長の声に少し身体が軽くなった気がした。
まだいける。

「うおああえあ...っ！」
僕は言葉にならないかけ声とともに、ピークで待つ2人目掛け駆け出した。

10分後。
僕はピークの展望台の片隅で、南田さんが扇いでくれるタオルの風を気持ち良く感じていた。
横を向くと、快晴の空と山々が作り出す荘厳な景色が眼に飛び込んでくる。

「やったね、坂崎くん」
美人の南田さんの祝福に、情けないやら恥ずかしいやらで、思わず反対側に顔を向けると、目の前に部長が居た。いつものように腕を組み、無言で山々を見つめている。

このパーティでは最後の縦走。
下山すれば、部長は引退し、卒論と就職活動に忙しくなる。
感傷に浸ってるように見える部長が、僕にはとても眩しく見えた。

その部長の口が、ゆっくりと開く。
僕は彼の言葉を忘れないよう、神経を集中する。

そして、部長が静かに呟いた。

「...海、行きたかったなあ...女の子、良いなあ...」

てめえ。最後にそれかい。

産む（うーむ）

私は伸子が手術室に送り込まれるのを確認すると、誰にも気付かれないようにトイレに飛び込んだ。

（伸子には気付かれてない。大丈夫）

必死に自分に言い聞かせるが、沸き上がる吐き気を止める事が出来ない。

私は慌てて便器の蓋を開き、中に顔を突っ込み嘔吐する。

脳裏にはさっきの刑事達の言葉が懲のようにこびりついて離れない。

（伸子のご両親の白骨死体...院内でこの1年続いた乳幼児行方不明事件...妊娠13ヶ月を経過した伸子...）

2ヶ月前、眠ってる伸子の口元に付いていた生肉のかけら。

半年前、伸子の様子がおかしいと相談された時のご両親の怯える顔。

伸子の付き添いで来たこの病院で、妊娠1ヶ月を告知された時の伸子の驚きの表情。

そして、1年前のあの出来事。

今起きている出来事の、全ての中心に居るのは伸子だった。

（...いや、違う。伸子じゃない）

私は手術室に入る直前に見た伸子の、妊娠中とは思えないその痩せ細った顔を思い出す。

（病的な痩せ方じゃない。あれは...）

まるで、生気を抜かれているような。

さっき脳裏を過ぎったそのひらめきが、再び私に吐き気を催させる。

（私達二人が同じ目に会った筈なのに、何故男性経験の無い伸子が妊娠したの？1年前のあの日、私達に何があったの？何が伸子に起こってる？何が...何が...）

何が産まれるのか。

伸子は、何を産むのか。

吐き気は、一向に収まる気配を見せない。

便器は既に胃袋の内容物で真っ赤に染まり、胃液すらも出て来なくなっているにも関わらず。

（...真っ赤に？）

私は、今目にしているものが信じられなかった。

その、まるで鮮血のような吐瀉物に、まったく見覚えが無いのだ。

（私は...今日、何を食べたんだろう...）

込み上げる吐き気で意識が朦朧とする中、懸命に思い出そうとするが、何も思い出さない。

私は思わず後ろに飛びのくが、吐き気のせいで息ができず、その場に倒れ込んだ。

突然手術室の方から、誰かが泣き叫ぶような声が聞こえたが、すぐに、まるで電源を落とすように途絶える。

私は薄れゆく意識のなか、ああ産まれたのだ、と確信し、

そして、何かが私の口をこじ開けて這い出してきた瞬間、意識を失った。

梅（うーめ）

私が毎朝通る道の途中に、一本の梅の木があった。

普通の、なんて事のない家の庭先にある、あまり目立たない、私の背丈位の小さな木だ。

私は花が咲く頃になると、毎朝必ずこの木に軽く会釈をして通り過ぎる事にしている。

いや、違うな。

この木に、ではなく、梅の花をいつも愛しげに見上げていた老人に、私は会釈をし続けているのだ。

『...この木はな、家内が亡くなる前に植えたヤツでな』

いつの頃だったろうか、不思議に思って声をかけた私に、照れ臭そうに答える老人の声が脳裏を過ぎる。

『私の一部をここに置いていくからね...なんてよ。俺が庭弄りを面倒臭がってるもんだから、そう言やあ渋々でもやるだろう、ってさ。馬鹿だよな』

そう言って悲しげな笑みを浮かべる老人の姿を思い出すと、今でも胸が締め付けられる。

『...あいつの遺したものを、ほったらかしておくなんて出来る訳無いのによ』

その老人も2年前にお亡くなりになり、もう彼の姿を見かける事は無くなった。

私は今日も、梅の木に軽く会釈して駅に向かう。

梅の木に寄り添うように植えられている苗木が、まるで手を振るように、風で小さく揺れていた。

裏 (うーら)

たろう さんが入室しました！

じろう：あ、きたきた。

たろう：よっ。お疲れ👋

じろう：お帰りなさいませm(_)_m

たろう：なんやねん、執事か！

じろう：上着をお持ちいたします。

たろう：黒服か！ここは高級クラブか！

じろう：チャージは30万円になります💕

たろう：高っ！iPad何台買えんねん！

じろう：何で基準がiPadやねん！ごっつ解りにくいわ！

たろう：欲しいねん。

じろう：ああまあそりゃしゃあないな。

たろう：良いわあ、iPad。

じろう：何が良いねん、あんな半端なん。

たろう：決まっとるやん、あのデザインやがな(〜〜)

じろう：いや分かったからドヤ顔やめや。あんた作ったわけちゃうやろ。

たろう：あのつるん🎵とした手触りとかな、すぱーっ🎵とした液晶とかな、良いねん。

じろう：つるん🎵とかすぱーっ🎵とか解りづらっ！

たろう：...なあ、今ふと思たんやけどな、質問して良いか？

じろう：なんやねん急に神妙な書き込みして。

たろう：恥ずかしい質問やさかい、ちょっと書きにくいんよ。

じろう：なんやねん、なんかこっちまでドキドキするやんか。はよ書き。

たろう：ほら、どんなモノにも『表』と『裏』、あるやろ？

じろう：は？ああ、まあ、あるわな。

たろう：あれのさかいて、どこ？

じろう：はあ？

たろう：いやだから、表と裏の境目ってどこやって話よ。

じろう：知らんがな！なんやねん、なんかエッチな話や思たやんか！

たろう：うわあ、ムツリがここにおるわ、おかあさあん〜🤔

じろう：誰呼んでんねん！マザコンか！

たろう：おかあさあん〜...お母さんの表と裏...

じろう：やめや！なんかエロいわ！

たろう：じゃあおばあちゃん。

じろう：ああまあおばあちゃんなら裏があってもエロくな...怖いわ！寝とる時に障子の向こうで包丁研いでそう！

たろう：んもう、私の質問にどうして答えてく・れ・な・い・の？

じろう：何でオネエ口調やねん！キモいわ！

たろう：オネエさんの表と裏...

じろう：だからやめいや。想像したら怖なったやんけ！

たろう：...ほんとだ。

じろう：な？

たろう：オネエさんの表と裏の境目...

じろう：話膨らませてどうすんねん！オネエさんが身体くねらせながら、かばあっと開くとこ想像してもたやん！

たろう：...それは怖いな。

じろう：だろ？

たろう：でな、境目やけどな。

じろう：まだこだわったんかいな🤔そんなもん簡単な話やないか。

たろう：そ、そうか？

じろう：そやで。

たろう：ほなら、境目はどこ〜？

じろう：表と裏の境目はな、

たろう：ほおほお。

じろう：わしらの心の中にあるねん。

たろう：なに上手い事言ったみたいになっとなねん。

じろう：失礼しました～。

たろう：なに締めとなねん、まだ結論でとらんやないか。

じろう：御召し物をお取り下さい。

たろう：また黒服か！ここは高級クラブか！

じろう：料金はチャージ料金の30万円のみになります。

たろう：高いって！んなもん払えるかい！

じろう：困りましたねえ、ならば貴方の生命保険でもかまいませんが。ちょっと裏に行きませんか？

たろう：ぐっ。...まさか俺、今、店の裏で生死の境目？

じろう：ちゃんちゃん。

たろう：ありがとうございました～。

じろう：ありがとうございました～。

じろう さんが退室しました。

たろう さんが退室しました。

瓜（うーり）

男は日差しの眩しさに目を覚ますと、あくびを噛み殺しながら布団からのそり、と起き出した。

男は喉に感じた焼け付くような痛みをごまかすように頭をボリボリと搔くと、じわり、と熱の籠った空気が漂う廊下を、人気の無い台所へと向かう。

台所に入ると男は、流しの蛇口に直接口を付けて水を喉に流しこむ。井戸から汲み上げられた冷水が喉の痛みを和らげたのか、男は蛇口を止めると、片手で口を拭いながら、ゆっくりと辺りを見回した。

顎をさすりながら何かを物色するように眺めていた男は、突然しゃがみ込むと足元の床板を一枚めくり、大きな石が乗せられた土気色の壺を取り出し、そっと脇に置くと、おもむろに石を退かして、蓋を開ける。たちまち広がる糠の匂いに、男の喉がごくり、と鳴った。

その瞬間、隣の部屋から電話のけたたましいベルが聞こえてきた。電話の相手に予想が付くのか、男の眉間に深い皺が出来る。

しかし、男は立ち上がらない。おもむろに壺の中に手を入れると、糠のぬるり、とした感触にも構うことなく、ぐちゃぐちゃと手探りで何かを探し始める。電話が鳴り続けている中、神妙な表情で壺に手をつっ込んでいるパンツードの自分の姿からは、とても普段の凛々しさが感じられず、男は一人苦笑した。

と。不意に男の手に何かが触れ、男の顔に満面の笑みが広がった。一気にそれを引き上げる。

それは、瓜の漬物だった。

男は慌てて立ち上がると、流しで瓜に付着した糠を洗い落とす。

程よく漬かった瓜に食欲が刺激されたのか、男は落とし切れていない糠に構わず、そのままかぶりついた。

売る（うーる）

待ち合わせ時間より（わざと）遅れて来たファミレスの一角に、奴は居た。

既にテーブルの上には食べ終えた食器が無造作に広がっていて、その雑然さが見事なまでに俺のやる気を削いでくれた。

「まったく、お前が呼び付けたんだからさ、メシ食うの位待てもんかね、え？」

「おお、ウッス。先にゴチになってるから」

奴は俺の嫌みを軽く受け流すと、目の前にあるスパゲティをそばのように口に流し込んでいく。

「...っておい、ゴチってまさか...」

「んも？うん、ほれ、ほはへはいはら」

「金ねえって...ったく、しょうがねえなあ」

俺はわざとらしくため息をついてみせると、レシートを握りしめレジへと身体を向ける。

「ほ？...はへ、（んごくっ）待てって！」

「ああん？これ以上なんかないのか？」

俺がブチ切れ（たふりをし）て振り向くと、...ちくしょ、なんだあの『俺は分かってるよ』みたいなニヤニヤ笑いは。

ああ、めんどくせ。

「俺も忙しいの。お前と違って真面目に公務員続けてますからね」

「忙しいのに悪いね。まあほれ、座んなさいな」

そう言って相向かいの席を指差す奴に、俺は軽く殺意を覚えた。

『モテるには、やっぱ安定した職業に就かなきゃな』と言ってのけた奴のシリウマに乗って公務員になった俺に対し、奴は結局安定した職業どころか安定した人生すら送れないまま今日まで生きてきたらしく、久しぶりに再会したとは思えない位昔のままの奴だった。

「...んたによ、なんで着てるもんまで変わってねえんだよ」

ため息混じりの呟きに、奴は堂々と胸を張る。

「そらそうだ、一張羅なんだし」

うわあもう、こいつ真性の馬鹿だよ。

仕方ない、用件聞かか。

...聞きたくないけど。

「...まあ良いわ、用件って何だよ」

俺の熱の籠らない問いに、しかし奴は前のめりになってくる。顔は...やばい、満面の笑みだ。

「おうおう！それなんだがな！」

「ああもう、解ったから落ち着け！ちゃんと聞いてっから！」

俺が心底嫌そうに左手で追い払うと、奴は何故か名残惜しそうに座り直して手元のアイスコーヒーをずびずび飲み始める。

「...ってお前それ俺のじゃねえか？何ぶん捕ってんだよ！」

「いいじゃんか。それよりさお前、俺と一発ヤマ当て」

「断る」最後まで言わせねえよ。

「何だよおい、相変わらず最後まで話を聞かねえ奴だな。だから...」

「小学校時代の話を持ち出すな。だいたいお前の儲け話なんざロクなことがない」

俺は遠慮無くばっさりぶった切る。真実だから言い過ぎたとも思わない。

「何だよ、今度は安全確保ばろ儲けだって。なあ頼むよ」

奴の懇願に、しかし俺はぴくりとも反応できなかった。

「あのさ、俺、最近思うんだけどさ」

「なんだよ」

「この世界に存在するものってさ、『これ以上は無理』って言う...なんつうの、『許容量』つつうのか、そう言うもんがあると思う訳よ」

「きょ...？なんだよいきなり」

奴の戸惑いなんて気にしない。

「そんなにはさ、『想像力』とか『閃き』とか『儲けのネタ』ってのも有るんじゃないか？」

俺は一気に言い放つと、グラスの水を一気に飲み干す。

「ぶはあ。...まあ早い話が、お前が何を売るつもりか知らんけどな、それは既に誰かが思い付いてて、しかも大抵は失敗してんだよ。解るか？」

俺の考えに納得いかないのか、奴は膨れっ面で下を向いていた。

お前は子供か。アラサーにもなって子供か。

「...ああもう！解ったから、言ってみ？」

俺が降参、とばかりに両手を軽く上げると、奴は満面の笑みを浮かべて身を乗り出してきた。

「そこないと！...いやね、時代は水だよ、ミス」

「は？水？」

素っ頓狂な声を上げた俺に、奴はニンマリと笑いかける。

「そ。水をさ、中国に売り付ける訳よ」

「ち...お前、どうやってよ」

「決まってんじゃない、ネット販売よ。中国じゃ水がばかばか売れてるらしいからよ、適当に水道水をペットボトルに詰めてよ...ん、どうしたよ」

頭を抱えている俺に気が付いてくれたか、この馬鹿野郎。

「お前さ、三日前の新聞見たか？」

俺の質問に、キョトンとした顔をする馬鹿野郎。

「お？俺が新聞なんて見るわけ無いだろ」

「だと思ったよ」

俺は記事を思い出しながら、深々とため息をついた。

「三日前な、お前と同じこと考えた奴らが、サツに捕まったんだよ。違法行為なんだそうだ」

「ええ...まじか？」

「ああ、マジだ」

俺はそう答えて、また頭を抱えた。

やっぱり駄目だこいつ。

運（うーん）

運と言えば、昔大学で受けた講義を思い出す。

何の講義だったかは覚えてない。確か適当に入れた穴埋め講義で、その時も単なる暇つぶしで行っただけだったと思う。講師は若い男性で、ひょろっとした体型に眼鏡とボサボサ頭という、如何にも助手ですよ、と言う感じの人だった。

『今日は人が多いですね。雨が降っているからかな？こんな日に授業に来なくてはいけないなんて、あなた方は運が悪かったですね』

確かこんな感じのことを、ニコニコしながら言っていた記憶がある。その言い方にムカッとしたから、良く覚えていた。

『と、言う訳で、本日はその『運』について講義をします』

そうやって始まった『運』についての講義の内容を細かく話すことは、まあ昔の話だから無理だが、おおよそは次のようなことを話していた...と思う。

『運』や『運命』というものを、それこそ神仏や幽霊以上に確かなものとして信じている方は多いと思います。

しかし、それらを事実のみに限定して分析すると、面白い事が解ってくるのです。

まず始めに、何か運命的な出来事を想定しましょうか。

...そうですね、例えば真田くん、君がずっと欲しかったフィギュアを偶然リサイクルショップで見つけ、手に入れたとしますか。これをあなたは運命的な出来事と...ええ、思いますよね。

しかしこの事象を事実のみに限定して考えると、それは単に『そのフィギュアを誰かがリサイクルショップに売り付け、真田くんがそれを見つけて買い取った』だけですよね。

そこには関係者以外の介入も無く、ましてや何の神秘的な力も関わっていません。

ただ、真田くんは『タイミングが良かった』もしくは『普段から探す努力をしていた』からこそ、そのフィギュアを手に入れる事が出来た訳ですね。

でも、真田くんはそこに運命的な何かを感じ取った。何故か。

答えは一つ。『予測不可能な突発的事象に対する精神的衝撃が大きかったから』なのではないでしょうか。

ではなぜ『予測不可能』であったのか。...これも難しい話では無いですね、『主観的不可視の出来事が介在していたから』となる筈です。

則ち『運命』と言うのは単に、『自分の見えない所で起こっていた事象を認識出来なかった為に、その事象を要因とする新たな事象が自分の身に降り懸かった時に受けた衝撃を理解するために造られた言葉』である、と。

これは他の運や運命を感じさせる事象についても同様です。

と言う事は、『運』や『運命』とは、『神』や『幽霊』のような『目に見えないものに対する畏怖の念』から生まれた存在とまったく同じ起源を持つ...まあ、かなり曖昧で、抽象的なものなんだとは思いませんか？

まあ要するに、私が伝えたい事は、

『運や運命などと言う、人間が勝手に名付けた曖昧なものに縋り付くのは変だ』って事と、『テレビの占いコーナーのコメントって、普通に普段から注意してる事ばかり言うよね』って言う人はまさしく運勢の本質をついている、と言う事です。

自分からは見えない出来事にまでアンテナを広げ、素早く行動すること。

これが、運に打ち勝つ...言わば『強運を手に入れる』最良の方法なんでしょうね。」

もうひとつ、覚えていた事があった。

講義が終わった後、私はその講師を追い掛けたのだ。

「なんでしょう？」と首を傾げる講師に、私はずっと聞きたかった事を口にする。

「先生は結局、運命を否定しているのですか？」

すると、彼はにっこり笑って、

「この世界では、全ての出来事が連鎖反应的に繋がっています。そしてそこにはただ、事実しか存在していません」

「てことは...？」

「運や運命なんて、どうでもいい事でしかない、って事ですよ」

そう言って高らかに笑う彼。

その彼と結婚してはや15年。

もしかしたらこれこそ運命の出会いだったのではないかと私は今でも思っている。

エア（えーあ）

さて次のコーナーは...

『それちょっとイタいでエア〜？』

はい、このコーナーは、あなたが目撃したイタイ『エア〇〇』を教えてください...って言うコーナーですね。早速行ってみましょう。

一通目は...はい、品川区のラジオネーム『タイノシイ』さんから。

『夕暮れの教室で田中くんがしていたエアカラオケ』

...うんうん、イタイねえ（笑）

帰宅部なのに何となく帰りそびれて残ってた教室で、何となく歌い始めたら盛り上がっちゃってな。

それを目撃されるなんざ...ああイタイねえ（笑）

さあ次は、長野県の『魂こがして』さん...うわあ、これもイタイなあ（笑）

『飲み会で無理矢理やらされてた新人のエアAKB（しかも男一人）』

イタたたた...（笑）

こういうのは、やらされてするもんじゃないやね。

せめて歌わせてあげて〜（スタッフ笑）

...って次も凄いな。神奈川の『ハイペンション』、いつもありがとう〜。

『20年位前に、隣の家ベランダで、隣のお兄さんがエアギターしてました。多分アコギだったと思うので、エア弾き語りかも知れません』

くはあ、『時間ですよ』かいな（笑）...え？ディレクター知らないの？...ふうん、時代だねえ。

...はあ、歳取ったなあ、俺も。気を取り直して、次行きますか！さいたまの『おからバー』さん...健康に良さそうな飲み屋だなおい。

『教習所のロビーの片隅で、お兄ちゃんが一人もくもくとやってたエアドライブ』

...いやこれは許してあげて〜（笑）

多分仮免の試験4回位落ちてて、後が無いから必死なんだよ、きっと...あ、続きあったのか。

『練習してるのかと思ったら、何か横を向いて話し掛けるムーブがあったので、あれはきっとエアドライブデートの可能性が高いかと』

うわあイタイ。

まだ免許取って無いのにデートの妄想って（笑）

なんかもうドライブ用の選曲も済んでそう（笑）

えーっと、次がラストかな。メールいっぱい来てて、選ぶの大変（笑）みんないつもありがとうね。

で、最後は名古屋の『たけ』さん！

『スタジオで一人マイクの前でするエアラジオ番組』

...って俺?!（笑）

いやこの番組は普通に放送されてるって...されてるよね?...ほらディレクターも...いや頷いてよ〜！（スタッフ笑）

まったく、油断も隙も無いな、この番組（笑）

えーっと、このコーナーでは、『あなたが目撃したイタイエア〇〇』を募集しています。
採用者には番組特製ギターのピックをお送りしますので、どしどし送って下さいませっ！

では曲に行きますか。

一通目の『タイノシイ』さんが聞いた曲、山崎まさよしの『one more time one more chance』行きますか。イタいけど（笑）

では、どうぞ！

...いやホントに流れてるんだよね？ディレクターさあん...（泣）

えい（えーい）

「えいっ」

彼女の気の抜けた掛け声が、キレの無い竹刀の振りと相まって、道場の静寂をささやかに乱す。

私はもうどこからつつこんで良いやら分からず、とりあえず頭を抱えてみた。

「先輩！どうですか?!」

そう言ってにこやかに笑う彼女を、私はうちの部員と同じようにぶん殴っても構わないのだろうか、いやだめだ。

「う、うーんと、...いややっぱりダメかな？」

私が遠慮がちに応えると同時に、彼女の大きな両目に涙が溜まっていく。

「いやいや、ダメじゃなくてね...んああもう、どうしろって言うのよ」

私が途方に暮れているうちに、彼女も少し落ち着いたのか、袖口で涙をごしごしと拭くと、上目遣いで私を見つめてきた。

「泣いちゃってごめんなさい。悪い所は直しますから、遠慮無くおっしゃって下さい」

「...と言われても、ねえ」

真摯な眼差しを向けてくる彼女に、まさか『あんたには争い事は無理だわ』とはっきり言える訳も無く。

そもそも痴漢対策を私に相談されても、痴漢に会った事が無いから具体的な事は言えないし。

仕方ない。

「うーん、あなたの問題点は、多分、声だね」

「声...ですか？」

キョトンとしている彼女に私はにっこりと笑って、静かに立ち上がる。

「いい？行くよ」

そう言って私は姿勢を正し、丹田に力を籠めて、裂帛の気合いを放った。

「ひっ...！」

びっくりした彼女の息を呑む声が聞こえ、私はゆっくりと彼女に向き直る。

「びっくりした？」

「は、はい...」

素直に頷く彼女。

「こういう声を出すとね、普通は結構怯むもんなのよ。それが女性なら、特にね」

私はそこまで話すと、再び彼女の前に座り込んだ。

「よく時代劇とかで、大奥の女性がなぎなたを手に掛け声をあげてるのを観るでしょ？」

「あ、はい」

「あれってね、自分を鼓舞する意味も有るんだけど、何より声を上げる事で、相手を怯ませる効果が見込めるから、って意味も有るんだ」

「怯ませる...」

彼女が私の言葉を飲み込むのを確認してから、私は話を続ける。

「相手を怯ませれば、隙が生まれる。隙が生まれれば、自分の行動に選択肢が生まれる」

「...選択肢ができれば、精神的に余裕もできる...？」

彼女の問いに、私はわざと満足げに微笑んだ。

「大事なのは、どんな状況にも対応できる冷静さと...」

「と？」

真剣な表情で私を見詰める彼女。

彼女が本当に守りたいもの、って何なのだろうか...と、心と私は考えた。

「守りたいものを何としてでも守るんだ...って言う必死の覚悟ね」

「守りたいもの...」

私の言葉を真剣に反芻する彼女を見て、私はゆっくりと立ち上がる。

「さて、さっきの気合いの入れ方の講義、する？」

私の問いに、彼女は静かに頷いた。

駅（えーき）

鉄道は、お客様が居てこそ、その存在に意味を持つ。

早い話が、乗る人が居なきゃ、それはただの無駄金遣いの鉄の箱、ただのうらぶれた建築物に過ぎないってもんだ。

そう自分に言い聞かせつつ、俺はホームの端で夕陽を見つめていた。

もちろんまだ就業中だから制服のままだし、両手にほうきとちりとりを持っているから、はたからみたら随分と情けない姿に見えるかも知れない。

「情けない...か。だよな」

ぼそり、と呟いた俺の声がひんやりとした海風にさあつ、と流されていく。

情けなくもなる。

我が愛するこの駅の、今日が最後の日なんだから。

駅の周囲にある町並みは静寂に包まれている。その町の姿からはとても、数年前の賑やかさを想像する事すら困難だろう。

バブル時代にはベッドタウンとしてその栄華を誇っていたこの町も、バブルが弾けてからは一気に廃れて、今や町はまるでゴーストタウンかのような佇まいを見せている。

無論、町に付随している我が夕暮駅も当時のままで居る事は出来なかった。路線そのものが経営危機に陥り、第三セクタへの委譲が決まり、人員削減の煽りを受けた結果の廃駅処分決定に、リストラされずに何とかやっている俺が反抗出来る訳が無い。

俺に出来る事はせいぜい、廃駅処理に関わる書類作成と、セレモニー終了後の駅構内の掃除位だ。

「結局、最後まで付き合っちゃったな、この駅と」

殺風景な位綺麗に掃除を終えたホームをぼんやりと眺める。

入社してから10年、ここに居るのが当たり前のように生きてきた俺だから、ここに設置されているものを見るたびに、何らかの思い出が走馬灯のように蘇ってくる。

「懐かしい...か。もうそんな歳になっちゃったんだな」

10年前の元気だった若僧が、目の前をめんどくさそうに走り抜けて行った気がして、俺は思わず苦笑いした。

人は変わり、町も変わる。

当然、駅も変わらなきゃいけない。

「ならば、俺も変わらなきゃ...だな」

明日からは俺も駅を離れ、会社の立て直しに全精力を注ぐ事になる。

俺は再びホームを見回し、異常が無いことを確認すると、深々とお辞儀をした。

エゴ（えーご）

（註：本来の意味としての『エゴ』の例文が思い付かないため、現在一般的に使われている『エゴイズム』の略称としての『エゴ』を使っています）

発端は、文化祭の出し物決めだった。

中山さんの仕切りで幾つか案は出たものの、いま一つ決め手に欠けていて、なかなか決まらなくて。

結局、打ち合わせが始まった7時限目を遙か越えて、時計は6時を指そうとしていた。

「ねえ、もういい加減決めちゃおうよ、なかやん」

さっきから時計をチラチラと見ていた原さんが、痺れを切らしたように中山さんに言い、クラスの何人かが賛同するように頷く。

「私だって決めたいけど、案が出ないじゃ決まらないじゃない」

いつも元気な中山さんもそろそろ疲れが見えてきたらしく、声に力が無くなっている。

「さっきの...何だっけ、展示で良いんじゃない？」

後方窓際で大きな欠伸を噛み殺しながら牧野くんが発言し、それに追従するように男子の何人かが「そうだそうだ」と合いの手を打つ。

「あら、『俺はやだよ、面倒臭い』って反対したのは、牧野くんじゃない」

中山さんの反論に、むすっと黙り込む牧野くん。

そして再び教室が重い静寂に包まれた。窓の外から聞こえてくる野球部の掛け声が、皆の焦りを更に加速させる。

数分後。

教室の重い静寂を破ったのは、天谷くんだった。

「...悪い。用事有るから、帰るわ」

「え？ダメよ、みんな都合が悪くてもちゃんと残ってるじゃない。天谷くんだけ抜ける訳にはいかないよ」

慌てて反論する中山さんに構わず、さっさと鞆を手に立ち上がる天谷くん。

「だから、帰るな、って言ってるでしょ！」

中山さんがキレるが、天谷くんには何の効果も無い。

天谷くんは無言のまま、堂々と後ろのドアを開ける。

「こ...のっ、そういうのを『エゴ』って言うんだからね！」

中山さんの叫び声も、天谷くんが閉めたドアに虚しく阻まれた。

「く...っ、なんて奴！エゴの塊じゃない！」

中山さんがキレたのか、目をぎらつかせて鼻息を荒くしている。

「あんな奴、もううちのクラスの間じゃない。部外者よ、部外者！」

やばい。

これで、天谷くんは今後『空気』扱いに決定したわけだ。

まあ、それも仕方ないが、これで私達が天谷くんを追従出来なくなったのが、とても痛い。

私達は目を血走らせている中山さんの逆鱗に触れないように目を伏せる。更に重い空気が、教室内に澱のように溜まっていた。

「...はっ、エゴティストがエゴイズムを批判するってか。それこそ皮肉そのものだよな」

教室に包まれていた重い空気を、鋭いナイフのような言葉が切り裂き、全員が一斉に声の方を向いた。

「沢田...お前今の」

牧野くんの声もかすれている。

普段からあまり自分の意見など話す事の無い、『空気』だった沢田くんが、突然反応したのだ。

この予想外の『不意打ち』に、誰もが呆気にとられていた。

「ああ、俺だよ。こんな阿呆らしいやり取り見せられたら、言いたくもなるだろう」

「阿呆らしい、ですって？！沢田くんあなたね...！」

激昂した中山さんに、沢田くんはわざとらしく肩を竦めて応える。

「中山さん、何で今日決めないといけないんだ？」

沢田くんの正論に、中山さんがぐっ、と言葉に詰まる。

「天谷んちはな、母親が入院中で、保育園で待つ妹さんをあいつが迎えに行かなきゃいけないんだ。それを引き留めたあなたの方こそ、エゴイストなんじゃないのか？」

静かに、しかし力強く話す沢田くんに、中山さんは何も言い返せない。

「...で、提案なんだけど」
仕方ないな、と言わんばかりに溜息をついて、沢田くんが語りかける。
「...何よ」
目に涙を溜めた中山さんが、何とか搾り出すように応える。
「今日は一旦、話し合いを終了しないか？」
「な...っ！」
中山さんが何か言おうとするのを手で制する沢田くん。

「で、だ。全員が必ず一つ、出し物の案を考えて、明日無記名で紙に書いてあの...そう、そのティッシュの空き箱に入れる、ってのは、どうだ？」
沢田くんの提案に、所々から賛同の声が上がる。
「確かにそれなら悪くない気がするけどよ、書かない奴はどうすんだよ」
牧野くんの質問に、苦笑いで返す沢田くん。
「うちのクラスには、『こりゃねえだろ』って言うウケ狙いの『悪ノリ』する奴は居ても、書かないなんて言う『ノリの悪い』奴は居ないだろうが」
沢田くんの応えに、牧野くんがニヤリと笑う。
「くっそ、ハードル上げやがって」
牧野くんの言葉に、他の面々が吹き出し、空気が一気に軽くなった気がした。

「で、俺と中山さんで明日の昼休みに黒板に全部書き出すからさ、それを見て飯食いながらみんなで決めれば良いんじゃないかな？...あ、司会は苦手だから、中山さんに任す」
「私が?!それかなり無茶振り!」
突然名前を呼ばれ、中山さんが泣きそうな声で叫ぶと、至る所から声が飛び出してくる。
「良いんじゃない?その方が面白そうだし」
「ウケ狙いで良いんなら、考えてみるかな」
「なんか書けば良いんでしょ?なら何とか出来そう」
「なかやんも、楽しく決めればその方が良いんじゃない?」「まあ、確かにそうだけど...」
皆が沢田くんの提案に賛同する様子を見ながら、私は彼の本質を見たような気がして、少し身震いした。彼は、空気のような存在の振りをしながら、クラスの仲間の事をしっかり把握していたに違いない。それも、表面的な把握ではなく、中身まで。

「もう!はいはい分かりました!沢田くんの提案を採用します...みんな、忘れないでよ、ほんとに」
中山さんのメの言葉に、全員が「はい」と返事し、一斉に帰り支度を始める。
私も鞆に筆箱をしまいながら、その実、目は沢田くんを追っていた。

彼には私は、どんな風に見えるのだろうか。

私がふと感じた彼への想いは、結局、彼の死を看取った今になっても胸の奥に残ることになる。

餌（えーさ）

実は、少し前からちょっとだけ気になっている事があったの。隣の蒲田さんの事。
あれは...そう、2週間くらい前だったかな。普段は静かな蒲田さんの家から、夜中に妙な物音がしてきたのよ。
物音自体はそれ程大きなものではなかったけど、あの物静かな蒲田さんの奥さんが、夜中に夫婦喧嘩するとは考えられなかったからさ、思い切って次の日の朝訪問してみたのだけど...

「ええ、実は、うちの人が派手に転んじゃって。今日から出張なのに何も準備してなくて、慌ててみたいで」
そう言って恥ずかしそうに笑う奥さんを見て、私もその時は自分のそそっかしさが恥ずかしくて、照れ隠しにお庭の手入れについて褒めたりして場をごまかしてたんだけど、その時、また別の気になる事を見つけてね。
あそこのわんちゃんって、ほら、ダックスフントだったじゃない。
それまでは自分の息子のように室内で飼ってたのに、その日は庭の隅に繋がれててね。

ちなみにあなた、犬は飼った事ある？
.....あるのなら分かるかしら、犬の餌に、普通生のひき肉って出すかしら？無いわよねえ、やっぱり。
確か蒲田さんのお家も、それまでは普通のドッグフードあげてた筈だったのよ。そんな話をした事もあったし。
それが、その時は...ううん、その時からずっと、生のミンチをあげてみたいだったのよね。多分。
離れて見てたから自信無いけど、少なくとも先週くらいまでは、ずっとだったと思う。
だから、って訳じゃなかったと思うんだけど、そのわんちゃんの目つきが段々と怖くなってきてね。

...ええ、今ならその理由も解るんだけど、その時は何も気がつかなかったわね。
ただ、あの目が...そう、獲物を見るような、あの目がね、怖かったなあ。

え？あの時のこと？
ごめんなさい、私は怖くて見なかったのよ。
確か...第一発見者は、新聞配達のお兄ちゃんだったんでしょ？可哀相にねえ、トラウマになったんじゃないかしら。

だって、ねえ。
新聞を入れてふと庭を見たら、蒲田さんの奥さんがわんちゃんに襲われて酷い状態だった、って話じゃない。
お兄ちゃんの叫び声にやじ馬に行ったうちの旦那や近所の奥さん達は、余りの酷さにまだ寝込んでるわよ。

まあでも、そりゃ、襲われて当然よね。そういうお肉を食べさせてたら。

...え？ええ、おかげさまで、今は挽き肉どころかお肉を見るのもダメ（笑）
昨日までは食べる事すらダメだったのよ（笑）

旦那さんもお気の毒にね。いくら浮気してた、って言っても、愛犬の餌にされるなんてねえ。
まあ奥さんにしても、まさか自分のあげた餌のせいで自分まで餌だと思われるなんて...ごめんなさい、自分で言っても気分悪くなっちゃうなんて。
申し訳無いけど、これくらいで良いかしら。
...あらこんなに？いやお詫びなんて。
こちらこそ何か憑き物が落ちた気がします。

...え？あのわんちゃん？
ええ、怖いよね、まだ見つかって無いのでしょ？
町内会でも、いつ我が子が襲われて食べられてしまわないか、って外出禁止令まで出してるけど、とにかく早く見つけてほしいわよね。

...え？どなたがそんなことを？
いやですよ、うちに入り込むのを見たんだなんて。
それに匂いについては、多分隣の匂いですよ。うちの中にも凄い腐った匂いが入って来て、旦那がそのせいで更にうなされてね。酷いもんですよ。

...うちの旦那ですか？まだ奥の部屋で寝込んでますわよ。

...そうね、よろしければ見舞ってもらえます？

...あらそう、残念ね。

え？あら、もうですか？

お名残惜しいですけど、確かに顔色がお悪そうですし、仕方ないですわね。うちでお休みに...あらそう。残念ね。

では、お大事に。

ごきげんよう。

壊死（えーし）

「ねえ、田口さん。大丈夫？」

突然声をかけられた私が驚いて振り向くと、そこには同じクラスの長谷川鳴海さんが立っていた。

「大丈夫って、何が？」

私の様子におかしな所は無かった筈なのに、彼女はいったい私の何を見て声をかけてきたんだろう。

「あ、いやその、頭が痛そうに見えたから、ちょっとだけ気になってね」

そう言って照れ隠しに笑う彼女に、特に怪しげな様子は無い。

何か様子がおかしい。

...『繋いで』みるか。

私は右手でいつものように両眼を隠し、神経を額に集中させる。傍目に私が呆れてため息をついているように見せる為の軽いため息も忘れない。

彼女との『リンク』開始。

私の額から一本の線が伸びてまっすぐ彼女の額に刺さり途端に彼女の思考イメージが私の脳に流れ込んで来て何これ私の額が何か気持ち悪いぐにゃぐにゃじゃないえ人の患部が穴になって見えるってしかも最近では精神的な病が壊死したように見えるってああだから私の頭部が壊死したように見えたので声をかけてきた訳か私はケーブルを引き抜き一気に額に戻し、
神経集中を、解いた。

「...えっと、ホントに大丈夫？」

閉じた目の向こう側で、長谷川さんが声をかけている。

勿論今何が起こったかまでは気づいていない...筈だ。

「大丈夫よ。ただ疲れてるだけだから」

嘘だ。

もちろん、長谷川さんも私の嘘に気付いている。

そして、私がこれ以上の接触を望んでいない事も。

「ん。分かった。変なこと聞いてごめんなさい」

彼女はそう言って軽く頭を下げると、自分の席に戻っていく。

私は机の中から教科書を取り出しながら、さっきの長谷川さんの思考を反芻する。

確かにここ1ヶ月くらい、クラスの生徒と『リンク』した時に、彼女のイメージが『恩人』というカテゴリに納まっている事が多かった気はしていたが、まさか『患部が見える』なんて異能が在るとは思わなかった。

かく言う私も、『リンク』なんて儀式をしないと発動出来ないテレパスと言う異能を持ち合わせているのだけど。

まあ良いか。

私はいつものように思考を一旦シャットアウトし、授業モードに切り換えた。

S (えーす)

「...えす」
生徒会室に戻ってきた『女王』がふらふらと会長席に座り、頭を抱える（?!）のを見た私が慌てて何が起こったか尋ねた答が、それだった。
「えす...って、アルファベットのSの事？」
私の質問に、『女王』は力無く首を振る。
「解らないのよ、それが」
「解らない...って、じゃあ...」
「理事長が校長と話しているのが聞こえてきたの。河田さんと高城さんが『えす』で、何かまずい事をやらかしたらしい、って」
女王にしては珍しい困惑した様子に、本棚の整理をしていた書記の谷崎くんが振り向く。
「河田さんと高城さんって、あの？」
「知ってるの？谷崎先輩」
私の問いに、ちっちゃい谷崎くんがこくん、と頷く。
ああもう、可愛いなあ。
これで先輩じゃなかったら最高なのに。
「ああ。あの二人、異常なくらい仲が良いからね。レズじゃないか...って噂もある位だし」
うわあ、有りがちな話。
「レズって...またそんな極端な...」
確かに極端に仲の良い女の子って居るし、目に余る時も有るけど、同性愛まで疑うのは無いだろう。
私は同意を求めて女王を見るが、どうやら今の話に思う所が有ったらしく、何かをしきりに呟いていた。
「レズ...えす...いや確かにえすだった...」
「会長？」
私の声に我に返ったのか、女王は呟きを止め、まっすぐ顔を上げた。
「お母様には手を出すなど言われた。どうしようか私も迷ってる」
わ。珍しい。女王が迷ってる。
「えっと、あの理事長が手を出すな、って言ってたなら、大した事のない話か、私たちではどうにもならない話かのどちらかですよ」
しまった。女王のお母様を『あの』なんて言っちゃった。
「確かにそうなんだけど...谷崎はどう思う？」
女王に問われた谷崎くんは、いつの間にか広げていた辞書から顔を上げてこちらを見た。
「『えす』と言う呼び方ですが、俗語で幾つか使用されています」
「ふうん。続けて」
女王の言葉に谷崎くんが頷き、窓際に有ったホワイトボードにつらつらと何かを書き始める。
『①Sとは"sadism"のことでサドと略して使われることも多い。『どエス』もこれ。
②Sとは"speed"のことでスピードと呼ばれる覚醒剤や覚醒剤全般を指して使われる。
③Sとは"escape"のことで、学校を抜け出したり、サボったりすることである。
④Sとは"smoking"のことで喫煙という行為やタバコ自体を指して使われる。
⑤Sとは"sister"のことで女学生の間で「同性愛」や同性愛の相手である女学生を指して使われる。
⑥Sとは"singer"のことで単なる歌手ではなく芸者を意味する。
⑦Sとは"schon"のことで美人や美少年を意味する。
⑧Sとは"spy"のことで「密告者」「告げ口をした人」を指して使われる。』
「...とまあ、こんな感じですね」
わあ、一気に書きやがった。
「ふむう...サド、美人、サボり切りは理事長が問題視するような話じゃないか。喫煙、スピード、スパイ、芸者、...あ、同性愛も有るんだ」
私の問いに、谷崎くんがこくん、と頷く。
「ええ。ちなみにこの中で今でも使われるのは、スピード、スパイ、サド位ですね。後は死語になっているようです」
「その3つか...確か、覚醒剤のトラブルは、半年前に解決したはずよね、副会長」
女王の問いに、私は同意する。確か半年前の学園祭の時に、女王のお仲間が力技で解決した案件だ。
「ならば、後は...」
「スパイ、ですか」
何でそこでそれを選択するの。
二人が真面目な顔で頷き合うのを見て、私は慌てて話を遮る。

「ちょ、ちょっと待って下さいよ、この学校にスパイなんて来る必要性なんて有るんですか?!」

しかし二人は表情を変えない。

「私立で、金持ちが集まる学園だからね、全く無いとは言えないと思うよ」

「今は教育現場も競争社会だからな、無いとは言えんぞ、副会長」

ああもう、何で理事長が止めたか分かったよ。

「あのですね会長、多分…」

引き留めたくても、私の声などもはや聞こえてない。

「よし、事は急を要するな。私は二人の背後を探るから、谷崎は四天王と連携をとって二人の監視を始めてくれ」

「了解しました」

「いやあの、か…」

「この学園は私のものだ。好き勝手にさせる訳にはいかんぞ！」

「はい！」

女王の気合いに、何故か敬礼をして走り去る谷崎くん。

いや確かに可愛いけれども。

「会長…？」

私が恐る恐る問い掛けると、女王は拳を握り締めながらこちらを向いた。

よし、今なら。

「会長、その『S』はスパイじゃなくて…」

「うむ、心配しなくても、無茶はしないから。では行ってくる！」

女王はにこやかに微笑むと、颯爽とした足取りでドアから出て行ってしまった。

気が付けば、生徒会室に残されたのは、私一人。

「…ああ、行っちゃったよ。何であんなんで会長やれるかな、あの女王様は」

私はぼやきながら、筆記用具を鞆にしまう。

もちろん、帰宅するためだ。

「どう考えても『S』 = 『女性の同性愛』の方が有り得るじゃない。しかもそれなら理事長が引き留めたくなる理由も解るしさ」

今は死語でも、理事長が女学生の頃なら使われていた筈だ。

まして恋愛関係は、女王の最も鈍い分野だし。

…まさか、だから女王はわざと除外したのかな？

「…あほらし。帰ろ」

馬に蹴られてなんとやら、だ。

私は鞆を持つと、すっと立ち上がる。

もちろん、帰宅するためだ。

決して理事長室になど行くわけが無い。

こんな馬鹿馬鹿しい事に付き合っている場合じゃないのだ。

「…ああもう！全く！」

私は思わず吐き捨てると、勢い良くドアを開けた。

似非（えーせ）

「エセ科学って知ってるかい」

ベッドの上で唐突にそんな話を切り出す彼に、私は一瞬どきり、としながらも、表面上は平静を装って、彼を見つめた。

「どしたの突然。した後の会話にしては随分と唐突じゃない？」

「ん？いやね、今日もそう言う話を見つけてね。その時は後で調べてみようと思ってたんだけど、すっかり忘れてたんだ」

彼は天井を見上げたまま、話を進める。

「そもそも、エセって、『似非』と言う漢字を当てるんだ。『似て非なるもの』って意味だね」

彼の声に少しずつ力が籠り始める。昔はこんな語りも煩わしくは感じなかったのに。

「似非科学ってさ、アプローチの仕方は星の数ほど在るんだけど、その発生に至るプロセスはまるっきり同じなんだよね」

「発生プロセス？」

私の問いに、彼は上を向いたまま頷く。

「そ。...ほら、どんな理論や研究も、突き詰めれば『データを基に検証を繰り返し、結論を導き出す』と言う過程が有るよね」

「まあ、確かにそうね」

「似非科学も、その過程に於いては普通の科学と同じなんだ。ただ普通と違うのは...何だと思う？」

突然の問いに、面倒臭いと感じながらも私は応える。

「ううん、解らない」

私の答えに、彼は柔らかな微笑みを見せた。

「それはね、『検証から結論に至る際に、半ば強引に持論へと誘導してしまう』と言う習性が有ることなんだ」

「強引に？それじゃあ結論にならないと思うけど」

思わず漏れた疑問に、微笑みで応える彼。

「そう、結論になってない...つまり、持論を証明するに足る根拠に成り得てないんだね」

彼はそこで一旦話を区切ると、腕枕している右腕を器用に使って、私の頭を優しく撫でた。

「俺、その結論に至るプロセスの部分に最も興味をそそられるんだ」

「それって、心理的な話？」

「そう。どんな心理的要因が有ってそんな結論に至ったのか。そこにはきっと、人間にとって大事なものが隠されている気がするんだ」

「ふうん、大事なものが...ねえ」

私は興味が無い事を悟られないように細心の注意を払いながら、彼に合いの手を入れる。

「例えば『希望』とか『願望』とか...そういうもののこと？」

私の呟きに、彼の手が止まる。

「そうかも知れないし、そうじゃないかも知れない。誰かに望まれたせいかも知れないし、誰かを望んだからかも知れない」

彼の言葉がふいに止む。

「私、そろそろ...」

切り上げ時を見ていた私がゆっくりと起き上がるが、彼は何も言わない。

私が立ち上がり、脱ぎ捨てていた下着をつけ始めても、彼は引き留めようとはしない。

化粧を直しながら、私はふと気がついた。

そうか。

今の話は、私の事だったのか。

周りに流されて、自分の願望の為に自己を正当化している私の。

「じゃあ、行くね」

そう告げてドアを開ける。

「ああ。原田さんに、よろしくと伝えて欲しい」

私の背に優しく触れる彼の声が、今はとても悲しかった。

蝦夷（えーぞ）

津軽を発って2日、激烈な嵐を抜けきった我々は、目の前に広がる大地を無言で見詰めていた。藩命により意気揚々と敦賀を出発した始めの頃と違い、長い船旅による疲労と、停泊した港で聞いた様々な噂が、彼等の新天地に対する恐れへと繋がっていたのだろうか。彼等は甲板に立ち、神妙な表情で、今から乗り込む事になる大地を見詰めていた。蝦夷、という神の島を。

藩の切迫した財政難を打破すべく、蝦夷に赴くべきだと言う提案に志願した者は、そのほとんどが武家の若者であった。当時の蝦夷地は開拓が始まったばかりで、入植していた者達の大半が一獲千金を狙う食い詰め者だった事を考えると、侍の力が弱まっている時代だったとは言え、武家の人間が乗り込んで来るのはまさしく異例の事。現代で言えば、財政難に喘ぐ夕張市の若い職員達が、起死回生の策として、何のツテも無いままに、単身赴任でアフリカにレアメタルの輸出会社を興すようなものだ。これを無謀といわず何と言おう。

無論、この船に乗っている者達は、この策が無謀である事を理解していた。場合によっては、二度と故郷の土を踏めないかも知れない、と言う事も。

「来たのだな、蝦夷に」
陸地を見詰めていたうちの一人が静かに口を開くと、呆然としていた他の面々も我に返ったように彼を見る。
「ああ、来た。思ったよりでかいんだな、蝦夷は」
隣に立つ男が感嘆の声を漏らし、それに呼応するように所々から感嘆の溜息が聞こえてくる。
「なあ、兄者」
感嘆の声を漏らした男に、脇に立つ少年が問い掛ける。
「どうした」
「藩命によりここまで来ましたが、ここまででかいと...」
男は一旦言葉を切った弟に不安を覚え、つい、と顔を向ける。弟の陸地を見詰める目は、いつも通りの素直さを湛えている。
「でかいと、何だ」
男の問いに、彼は陸地を見るのを止め、男に真っすぐな視線を向けた。

「ここまででかいと...どれくらい沢山の米が作れるんだろうね」
彼の問いに、その場に居た全員が吹き出した。

枝（えーだ）

大学生の頃、登山部だった私は、無駄に金を浪費しつついろんな山に引っ張り回される毎日を送っていた。まあ、主体的に登っていた訳では無いにせよ、登山途中に見る風景の見事さや、仲間と登る楽しさもあり、登山自体は楽しかったと思う。ああ、もう一つ楽しみがあった。実は山の中は普通じゃ考えられないような不思議なことが結構存在するのだが、それを見つけるのも楽しみの一つとなっていたのだ。

と、言う訳で、小ネタ3連発。

その1

あれは確か、福井県の内陸部に有る山々を縦走...まあ要するに、尾根沿いに一気に山々を渡り切る登山をしていた時の事だった。確か経ヶ岳を抜け、私の故郷である浄法寺山に向かって山々を渡り続けていた時だったと思う。尾根から見える景色を眺めていた私が、ふと下腹部を見下ろした時、太い松の樹の先、多分私の手首くらいの枝の辺りに、直径1m位の黒いボールがくっついていたのだ。『んを?』とか叫びながら良く見ると、毛が生えていて、何だか柔らかくそうに見える。『...先輩、あれ、新種の生物かなんかですかね』私がそう尋ねて指差した先を見て、先輩が一言。『ああ、ありゃあ、熊だわ』

その2

縦走と言えば、琵琶湖の西側に有る山々（名前は...忘れちゃった。てへっ 🎵）を縦走した時の事も思い出す。あれは夏休み前、近づく屋久島登山に向けてのトレーニングも兼ねたものだったか。登山客の少ない、低めの山々のため、山頂から下りてすぐの尾根沿いもかなりのブッシュ...まあ道が枝だらけで見えない状態で。枝だの笹だので腕や顔に傷を負いながらも、先頭の先輩のパワー溢れる突進に巻き込まれるように突き進んでいた私達は、尾根の中腹であるモノと遭遇した。

オンロードバイク、しかもナナハンだ。バイク乗りのパワー先輩によると、明らかにオンロード仕様のバイクだと言う事で、おまけにこのバイク、先輩が持ち帰りたくなる（無理だが）程見た目が非常に綺麗で、つい最近そこに残されたように見え、その場に居た全員が戦慄を覚えた記憶がある。

そりゃそうだ。ここはいくら低い山々だと言っても、標高500mは越えていて、しかも尾根沿い、道はブッシュで見えないと来ている。ブッシュが伸びる前に捨てられたのなら、海風の当たる場所だ、既に錆びで酷い状態になっている必要がある。

私達はそこで小休止を取り、解明をしようとしたが、『ヘリコプターで運んでる途中でワイヤーが切れてここに落ちた』と言う話が出た時点で阿呆らしくなってやめてしまった。

なので、20年経った今でも、この謎は解明されていない。

あ、ちなみにこのバイク、白地で、サイドに緑のラインが走っていて、ネイキッドタイプじゃない奴でした。確か、カワサキの...ううむ、バイクを良く知らないから覚えてないな。確か、当時、うちの大学でも普通に走っていたタイプだったと思います。

解る方、ご一報下さい。

その3

謎と言えば、このトレーニング合宿にはまだ不思議なことがある。

先程の出来事から数週間後、私達は奈良県の、某鬼伝説の有る山々を縦走していた。

そもそもこの山々、登山口からおかしな事が続いていた。

登山口の脇に流れてる沢に、魚や虫どころか川草すら生えて無かったり、一つ目の山の山頂手前でいつも冷静な仲間の一人が突然奇声を上げたり（無論彼にはそんな記憶は無かった。多分疲労から意識が飛んだためだと思うのだが）と言った具合に。

パーティーリーダーだった先輩（その1の熊の人だ）も、2日目の夜にテントの外の叫び声を聞いた（多分ヨタカの鳴き声だとは思っているのだが）時点で、流石にヤバいかと思っただけで、とうとう3日目の朝に、快晴の下、下山をする事に決定し、当然全員が賛成して、緊急下山ルートから下山し始めた。

下山開始から1時間位経った頃だったろうか。

アレを、少し離れた樹の枝の辺りに見つけたのだ。

人間って、恐怖感が理性を上回ると声が出なくなるものなんだ、と、この時初めて知った。

まあ今考えると、多分疲労と蓄積した恐怖感から、猿か何かを見間違えただけだと思う。
多分、そうだ。

だってねえ。

現実に居るはず無いもの。

天狗なんて。

えっ（えーつ）

札幌を出発してから、既に3ヶ月が過ぎようとしていた。

現在地は、釧路の手前。

近づく冬を不安がっていた僕に、網走の雇い主さん夫婦が、

『道東なら、雪なんて積もらないって。せっかくだから知床廻って行って来れば良いっしょ』

とアドバイスしてくれたので、素直に従ってここまでやってきたのだ。

幸い、網走での稼ぎが思ったよりも多かったのだ、釧路までは何とか普通にいけそうだし、知床の自然を満喫して、何となく大自然のパワーを貰った気がするし、今の僕は元気百倍、自転車のペダルも異様に軽く感じる...

...えっ？軽い？

思わず下を向き、僕は目を疑った。

この30分ほど緩やかな下りだったので、気が付かなかった。

気が付けばチェーンが外れていた。

それも、いつの間にか切れてしまったらしく、チェーンそのものが、無い。

「えっ？えっ？うっそお？！」

僕は下りを走り抜けながら、思わず素っ頓狂な声を上げる。

「いや、やばいっしょ、これ！」

探しに戻ろうにも、どこで無くなったかが解らない。

もし1時間前の地点で切れ落ちたのなら、この緩やかな下りを今度は登っていかなきゃいけないわけで。

「いやそれは無理っしょ！」

大きなアールを描いたカーブが目の前に来て、僕はバイクの兄ちゃんたちのようにハングオンをするように颯爽と曲がる。

僕カッコいい！

...嫌そんな余裕無いだろ、お前。

そしてそこから更に30分後。とうとう下り坂が終了した。

目の前には海岸沿いの平坦な一本道が、それこそ先が見えないくらいにまっすぐに伸びている。

「...これを、チェーン無しで自転車で走れ、っていうんかい」

当たり前だが、基本的に自転車はチェーンが無ければ走れない。

ここまでの経験からチェーンがきれた時用のパーツは持っていたけど、チェーンそのものは持ち合わせていない。

そして、自転車屋さんを探す前に、次の町がどのくらい先にあるかも解らない、ときた。

僕は仕方なく自転車を降りて路肩に倒すと、自分はその脇に倒れこんだ。

幸いなことに、本日は快晴で、しかも今は午後1時。

多少気温は低いけど、風邪を引くほどじゃない。

しかも、この時期ならまだ、テントを張っても死にはしないはず。

少しは安心できる材料もあるわけだ。

少し立ち直って、とりあえずバックから地図を取り出してみる。

「えっと、さっきのが羅臼岬で、下ってきたんだから...」

地図上で見ると、この先は標茶町。

うん、あと5km位か。

「自転車なら楽勝なんだけどなあ...」

さすがに荷物を積んだ自転車を引いて5kmは、キツイ。

かといって町まで歩いて行き、自転車屋でチェーンを購入し、また歩いて戻ってくる元気も無い。

「ああもう、ついてねえな」

打つ手が思いつかず、再び路肩に倒れこむ。
視界一杯に広がるのは、吸い込まれていきそうなくらいの青空。
こんな青空を見ていたら、悩んでいることが馬鹿馬鹿しくなってくるくらい。

そんな時だった。

にゃああん。

不意に、そんな鳴き声が聞こえたのだ。
有り得ない鳴き声。

「えっ、ええっ？」
思わず起き上がって声の方を見る。

間違いない、猫だ。

冷静に考えて欲しい。
ここは、人気の無い海岸線だ。
そして、人に向かって鳴き声をあげるような、そんな人懐っこい野生の猫は居ない。

...ということは。
近くに民家がある？

僕はがばっと飛び起きる。
驚いた猫が飛び退る。
慌てた僕がその場で硬直する。
猫は警戒しつつ、少しずつ後ろに下がる。
僕は慌ててバックに手を伸ばす。
猫は警戒しつつも、僕の動きに興味を示したのか、後退をやめる。
僕はバックから湯がきサラミを取り出す。お手製の自慢の一品だ。
猫の目の色が変わる。
僕はサラミをラップにのせて、軽くほぐしてやる。
猫まっしぐら。一気にかぶりついている。

よし、これで餌付け完了。
あとはこの子に民家まで連れて行ってもらえば！

...っと、ここではたと気が付いた。

猫って、帰巢本能無いじゃん。

得手（えーて）

彼が突然立ち上がって部屋に籠ったのは、一週間ほど前の事だった。

「人には得手不得手が有るんだから止めなよ」

といくら説得しても彼は諦めようとせず、

日に日に痩せ細っていく彼を見るたび、私の胸は締め付けられるように痛んでいた。

そして、今日。

彼の部屋から大きな物音がしたので慌ててドアを開けると、彼が床に突っ伏して倒れていた。

げっそりとした顔や腕の至る所に負った傷を見て、我慢ができなくなった私は思わず叫んでいた。

「もうやめて！所詮無理なのよ！文鳥に求愛のダンスをさせるなんて！」

干支（えーと）

「ねえじーじ、質問があるの」
老人保養施設にある、春の陽射しが入る集会室。
椅子に座っている父の膝に乗った娘が突然父に尋ねた。
「なんだい？じーじは何でも答えるよ」
大企業の重役だった頃とは違い、すっかり丸くなった父の優しい声に、娘の表情がばあっと明るくなる。
「えっとね、何で干支って12匹しか居ないの？他の動物さんが可哀相だよ？」
娘の問いに父は顔を上げて遠くを見る。
一瞬父の顔が退職前のそれに戻った気がした。
「付き従う動物が沢山過ぎると、神様でもね、どんな動物が居たか解らなくなるからなんだよ」

海老（えーび）

僕はイカが嫌いだが、海老も嫌いだ。

あのどぎつい色、わしゃわしゃと動く脚、生死のさっぱり解らない目。

例え皮を剥いてフライにされて出されたとしても、その身体から伸びていた脚を思うと食べられる訳がない。

食べる事さえ嫌なんだから、食べられるなんてもっと嫌だ。

「.....だからこんな所来たくなかったんですよ！」

目の前の巨大海老は、噂以上の大きさに僕達に襲い掛かる。

「うるせ！流されてたてめえを拾ってやったのは誰だ?! いいか船長命令だ、黙ってたた」

そう叫んだ船長の頭が海老の脚で吹っ飛ばされたのを見た僕は、また意識を失った。

絵馬（えーま）

私は絵馬の願いを一枚一枚見て愉しむのが日課である。

たかが絵馬と馬鹿にしてはいけない。

絵馬こそ人間の精神構造のコピーなのである。

人に見せる面は見せる為の体裁を整えておきながら、人に見せない裏側には自分の勝手な願いを、それこそ手書きの雑な字で書きなぐっているものなのだ。

そう考えてみれば、誰もが絵馬に興味を持つのでは無いだろうか。

だから私は絵馬を愉しむ。

今手に取った絵馬にもビビらない。

例えその裏面に

『これを見た人が呪われますように』

と血文字で書かれていたとしても、ビビらない。

背後の人の気配にも、気にはならない。

笑み（えーみ）

愛する孝之さんへ

貴方がこれを読んでいる頃には、私はもうこの世には居ないと思います

さっき貴方が私にくれた微笑み、とても嬉しかったです

貴方を裏切って傷付けた事、何とか生きて償おうと思っていたのですが、結局何も出来なかった事を、今でも後悔しています

貴方のくれた微笑み、とても懐かしく思いました

多分私は天国には行かないと思いますが、貴方のその微笑みを救いに、あちらでも過ごしていこうと思います

私などよりずっと素敵な女性と出会われますよう、あの世からお祈りいたしております

私のただ一人の旦那様へ

M（えーむ）

あの日から3日。

僕は相変わらず窓枠に座り、ベランダに干されたシャツを見詰めている。

3日経って汚れ始めたMサイズのシャツが、晴れた空の下で風に吹かれて静かに揺れるたび、彼女のあどけない笑顔が思い出されて、胸が裂けるような焦燥感に囚われる。

「今日は天気が良くて、なんか幸せだね」

買い物に出ようとした彼女の、出掛けに僕に放った最後の言葉が、彼女との甘い思い出をナイフのように切り裂いていく。

僕は何時になったらあのシャツを片付けられるんだろう。

僕の想いなどお構い無しに、薄汚れたシャツは風にただ静かに揺れていた。

鯉（えーら）

「えー、もうちょっと鯉張ってない？」
私は背後ではしゃぐ女子高生達の言う通りに、顎の辺りを少し広げてみる。
「あとね、目はもっと細かったかな」
はいはい。
「唇はもっと薄い」
薄い唇ね、了解、っと。
「そそ、こんな感じ」
そう言ってはしゃぐ彼女達に、私は強張った笑みを向けた。
「あの、君達が目撃し……」
「凄いね、ホントに居そう、こんな中国人」
「は？」
「じゃあ本番行こうよ」
「ほ？」
「ほらおじさんも早く！」
「あ、はあ」
「はあじゃなくて！全く最近の警察はこれだから」
そう言ってはしゃぐ彼女達を見て、私は激しい不安を覚えた。

衿（えーり）

その講義が始まってからずっと、前に座っている卓也の衿元の汚れが気になっていた。テスト前で集中しなくてはいけない講義なのに、板書で顔を上げる度に目に入るから、気になって仕方がない。なんでこの人は白いシャツなのにまめに洗わないのだろうか、汚れてるのを敢えて着て来たんだろうとか、あれだけ汚れてると洗うのが大変だとか、ああもう段々と腹が立ってきた、大体この人は付き合ってた頃からずぼらだったとか、ネトゲしかしてないから世間知らずだとか、なんでこの人を今でも好きなんだろうとか、なん...
...あ、授業終わった。
くそう。

L（えーる）

ただいま。とリビングのドアを開けた瞬間に私の目に飛び込んできたのは、私のワイシャツを着て鼻歌を歌いながら、鏡の前でモデル立ちしている花梨の姿だった。

「花梨さん、どしたの？」

私の声に花梨の鼻歌が止み、モデル立ちのまま鈍い動きで振り返る。

「あ、あのさ、3Lのシャツってどんな感じかなって思っただけで特に深い意味はなくて」
慌ててまくし立てる花梨。

花梨は身長が150cm位なので、3Lのシャツが彼女を飲み込んでいるように見える。

「まあ、可愛いけどね」

私がそう言って微笑むと、花梨は顔を真っ赤にして俯いた。

エロ（えーろ）

子供が使う性的表現は基本的に『エロ』と『H』に分けられる。

子供達の会話を良く聞いていると、これらには使い方に法則性がある事が解る。

例えば『エロ』は、授業中に『エロマンガ島』を見てニヤリとしたり、発言に性的な単語が出て来た子を『うわ、エロだ』と冷やかすなど、性的な言葉の代名詞としてのみ使用される。

対して『H』は、スカートめくりをした子に怒るとき等の、性的な行動をした時に使用される。

因みに私が良く言われた『スケベ』は、覗き等といった、『H』よりも大胆さが増した時に使用され...

...いやしてませんよ。無実ですってば。

宴（えん）

気が付けば、饗宴は最高潮に達しようとしていた。

満月をスポットライトに踊り狂うものや酒を片手に大声で笑い合うものなど、誰もが狂ったように騒いでいるが、全員が狐面を付けているため、その表情までは解らない。

やがて一人が立ち上がり狐のような嬌声を上げ、狐の女面を付けて踊っていた踊り子を担いで暗がりに駆け込んでいくと、他のものも関を切ったように踊り子達を奪い取っていく。

数刻後。嵐のような一瞬が過ぎ去った後の誰も居なくなった草原を、月明かりが静かに照らしていた。

おい（おーい）

私は床の間の食卓につい先程買って来た箱を置くと、おもむろに箱を開け、中に入っていたデジカメを取り出し、早速ファインダーを覗き込んだ。

妻が許してくれてから購入まで1年、実質30年ぶりの一眼レフに心が躍っているというのもあるのだろうか、明らかに自分がにやけているのが解る。

（使い方は良く解らないが、……まあ時間はたっぷり有るんだ）

私は苦笑しつつ、カメラをゆっくりと背後に向ける。

「おい、カメラ、買ったぞ。約束通り一枚目はお前だから、じっとしてろよ」

私はファインダーに映る妻の遺影に向け、静かにシャッターを切った。

追う（おーう）

彼女は余りに退屈だったので、寝ていたベッドから抜け出ると、ぼんやりと居間に入りそれを見つけた。大きさはお茶碗くらいで全身をふさふさした毛で覆われたそれは、彼女を見たからか、食卓の下でじっとしていた。彼女が不思議に思って近づくと、それはすっと逃げる。かっとう頭に血が上った彼女が追うが、あと少しと言う所で逃げられる。

5分程それを続けたらどうか。
彼女がようやく居間の片隅にそれを追い込む事に成功した。
既に息が上がっている彼女は、それでも
『ふにゃっ！』
と言う叫びと共にそれに飛びかかった。

結果は言うまでもない。

おお（おーお）

『おおなんということだたけしよ、しんでしまうとはなさけない』

脱力感とともに画面に出てきたメッセージを眺めながら、俺はコントローラーを放り投げた。

全く今日はツイてない。会社ではいびられ、定期は落とし、好きな人が男と歩いてるのを見かけ、ゲームでは自信たっぷりに挑戦したラスボスにボコられて。

（何やってんだ、俺）

馬鹿馬鹿しくなって後ろに倒れ込むと、天井に貼った一枚のポスターが目に入る。天国をイメージした印象画だ。

「おお何と言う事だ猛よ……か。ホント情けないな」

じわりと溢れてきた涙で、天国がゆらゆら揺れていた。

丘（おーか）

小学生の頃から心と脳裏に浮かぶ風景がある。

青空の下、草原に一本の道路がまっすぐに伸びていて、遥か遠くに大きな丘が見え、爽やかな風が肌を撫でる……そんな風景だ。

私は当時その風景を写真や絵画ですら見たことがなく、何故そんなに鮮明に思い描く事が出来るのかまるっきり解らなかったが、

その風景を思うだけで、辛い気持ちが爽やかな風に流されていくように薄れていくような気がした。

だから今も私はその場所を探し続けている。

恐らくは、私の最期の地となるであろう、その場所を。

沖（おーき）

私は今、ゴムボートの上で途方に暮れている。
波に揺られるのが気持ち良くてつい寝てしまったせいで、気付いたら沖に流されていたからだ。
ボートにはオールもない。海流が速いから泳ぐ訳にもいかない。

「それよりも、問題は...」
私は泣きそうな声で呟くと、改めてボートの縁を覗き込む。

そこには沢山の海から伸びた腕が、びっちりとはばり付いていた。
そのなめくじのようなぬめりを帯びた生気を感じられない腕達は、何らかの意思を持ってボートを移動させているように見える。

「...どうなるのかな、私」

その問いに答えるものは、ない。

奥（おーく）

彼女から突然電話があったのは、引越し記念の写メを何枚か送ってきた直後だった。

「なんだ、声聞きた...」

『...なんか居るの』

私のふざけた調子を遮るように、彼女の震える声が聞こえてくる。

「なんか？」

『うん、奥の部屋...』

確か新しい部屋は1DKで、ダイニングの奥は和室だったはずだ。

「まさか。気のせいさ」

私の慰めに、彼女が声を押し殺して叫ぶ。

『だって見てたよ！ちっちゃな...が...』

その時だ。電話越しに彼女の絶叫が聞こえ、電話がいきなり切られたのは。

何が起こったのかは今でも解らない。

彼女が見つからないうちは解らないままだろう。

桶（おーけ）

寝起きのボンヤリとした意識の中裏庭に下りた私は、時折鶯が鳴く朝の雰囲気を愉しみつつ井戸に近づくと、手押しポンプのハンドルを握り、手桶を蛇口の下に置いて、ゆっくりとハンドルを動かしはじめた。

始めのうちは少し赤みがかった井戸水が次第に澄んだものになっていき、朝のひやり、とした空気と一体化していく。

手桶の中に澄んだ水が溜まるのを確認した私はハンドルから手を離し、手桶にそっと両手を入れる。

刺すような冷たさが手から脳の奥底まで一気に走り抜けた瞬間、私は朝と一体になった錯覚を覚え、ぶるっ、と身体を震わせた。

押し（おーし）

「んとに仕方ないね。押しが強いんだから全く……」
おばちゃんがそう言って差し出してきた鍵を受け取ると、彼は満面の笑顔で、
「済まないね、借りは必ず」
と告げてそそくさと立ち去ろうとするので、おばちゃんが慌てて引き止めた。
「それよりあんた、何がどうなってるのか教えなさいよ。自殺の有った部屋で何があったかを、家主として知る権利って言うものが有るはずよ」
おばちゃんの詰問に彼はニコリと笑う。
「それを知るために行くんだって。じゃね☆」
そう言って颯爽と立ち去る彼におばちゃんが叫ぶ。
「ちょっと！押しが強いにも程が有るわよ！」

雄（おーす）

「世の中にはね、雄と雌しか居ないの。ね、分かる？」
薄れ始めた意識の先から、彼女の楽しげな声が聞こえてくる。恐らく先刻のまま私に馬乗りになっている筈だが、感覚が無いので良く分からない。

「で、生存競争において、雄と雌では常に雌が勝つの。これも分かる？」
彼女の言葉がまた更に遠くなる。首に巻かれた紐が首に食い込んでいるが、何故か痛みは感じなかった。
「だから、大樹に負けないのも当然なの。分かって、ね？」

なんだこれ。

これで終わりだなんて言うなよな。

彼女のヒステリックな笑いが響く中、最後の意識の線がふつり、と切れた。

落ち（おーち）

「……でね、あいつがさ、そこで何て言ったと思う？」
美紀がそこで一旦話を区切り、試すような目で私を見つめてきた。
（またどうせ下らない落ちなんでしょうに）
私は心の中で大きな溜息を吐いた。
「うーん、わかんないなあ」
と応えた私に美紀は満足げな笑みを見せ、
「『ごめん、美紀に見取れてて見てなかった』だって～！どんだけ綺麗なのよ、私」
何だよ、のろけかよ。
友人達が美紀にきゃいきゃい言うのに苦笑しながら応え、手元の珈琲を口に含む。
冷えきってまずくなった珈琲が、この場の雰囲気にとっても良く似合っていて、私は思わず笑い出した。

乙（おーつ）

私が寢室に用意されていた浴衣を着てダイニングに入ると、食卓には何の料理も乗っていなかった。

「美佳子、晩飯は？」

なるたけ優しい口調で問い掛けると、

「康雄さん、こっちに来てもらえます？」

何故か美佳子の返事がベランダから聞こえてきた。

よく分からないままベランダを覗いた私は、満天の星空の下、キャンプ用のテーブルの上に料理を並べている美佳子を見付けた。

浴衣姿の美佳子は私を見て柔らかく微笑むと、竹製のベンチを指差す。

「ね？こういうのも、乙なものでしょ？七夕だしね」

「.....そうか、七夕だったか。すっかり忘れていた」

私は自嘲するように笑うと、静かにベンチに座った。

音（おーと）

僕は暗闇の中にいた。

手を伸ばすが触れる物も無く、足元の地面も安定感が有るのか無いのか良く判らない。がむしゃらに走り出したいが怖くて脚がすくむし、大声で叫びたいが声が出ない。

果てしない絶望感と虚無感が僕を襲い、僕はその場にしゃがみ込んだ。

.....カン。

どれくらい経った頃だろうか。

遠くから微かに音が聴こえてきた。

.....カン、カン。

間違いない、音がしている。

.....カン、カン。

僕はふらふらと立ち上がり、音のする方へと歩き出す。

.....カン、カン。

拍子木を打つようなその音に導かれて、僕は縋り付くように歩き続ける。

希望をもって。

鬼（おーに）

「鬼の始まりってさ、縄文人なんじゃないか、って思うんだ」

眼鏡を掛けてパソコンに向かっていた良介が、ふと思い出したかのように私に語りかけてきた。

「卒論の話？私は専門外だから良く解らないけど……」

相向かいに座って持ち帰った書類を眺めていた私も、良介に目を向けずに応える。

「うん。いや、鬼ってさ、怖くて残忍な異種族のイメージから作られた架空の存在じゃない？で、これまでは日本に流れてきた異人が正体かも、って言われてたけどさ、なんかそれもじっくり来なくてね」

「はあ、まあ、良く解らないけど」

私の曖昧な返事を気にせず、彼は続ける。

「で、ふと思った訳だ。『もしかしたら、弥生人がその勢力を拡大していた頃、先住の縄文人をそんな風に恐れていたんじゃないかな』って」

彼の話が熱を帯びてきたので、私は仕事の手を止めて彼を見た。

「でもちょっと待って。弥生人って縄文人より良い武器を持ってたから、あつという間に縄文人を北の方に追い出したんじゃないかって」

「そうだよ。大体は合ってる」

「なら、何で弥生人が縄文人を怖がるのよ」

私の問いに笑顔を返す彼。

ヤバい、話が長くなる。

「あのさ、今風に考えてみてよ。さあ農業をしようとして新天地に来た人達が、自分達よりも先に来て我が物顔をしている猟師の団体に出くわしたら、しかも自分達よりも体格は良いし、顔付きも違う、話も通じないとすれば、まず感じるのは恐怖じゃないかな。何されるか判らないって言う」

「まあ、うん」

彼の勢いにたじろぐ私。

「恐怖から脱出出来た人は、対抗する武器のレベルアップに努め、成功し、結果的になんとか彼等を北の果てに追い出す事に成功した訳だ」

あれ？それおかしい。

「え？じゃあなに、その言い方だと、弥生人は最後まで縄文人達を恐れていたみたいじゃない」

「うん。だってさ、そもそも、狩猟民族に農耕民族がぶつかって勝てる訳無いじゃん」

「あ…」

言われてみれば、確かに。

「だから、追放するのがやっとだったと思うよ。そして、追放してからも、縄文人への畏怖を忘れなかった」

彼の話に違和感を感じない。

「で、弥生人の血を引く本州の日本人には、その畏怖だけが受け継がれて、今の鬼伝説に繋がる…って訳ね」

私の答えに、彼は優しく微笑んだ。

「そうです。ご明察」

よし。

私は一人納得すると、彼に向かってニッコリと笑った。

「はい、もう良いでしょ？途中でだから良い子にしててね」

彼は一通り話終えて満足したのか、「はい」と素直に頷くと、再びパソコンと格闘し始めた。

ほんとかわいいんだからこの、メガネ男子め。

私はため息を吐くと、改めて手元の仕事に集中した。

人生とは、分からないものだ。

まさかこんなたわいもない話が、この後あんな事件の引き金になるとは、私も彼もまったく予想できなかった。

尾根（おーね）

夏の晴れ渡る空の下、山頂から見下ろす風景ほど爽快なものはない。

その山が高ければ踏破する難易度も上がるが、その分だけ爽快感もまた上がっていく。

私は爽やかな風を肌を感じながら、今まさにその爽快感を満喫しているところだった。

ふと眼下を見下ろすと、次の山に繋がる尾根に沿って伸びる登山道が、まるで急降下するジェットコースターのように思えて、私をゾクゾクさせてくれる。

「っしゃ、そろそろ行くか！」

私はそう言って勢い良く立ち上がると、軽く伸びをしてから、ザックにそそくさと食器を片付け、腰だめに抱えて歩き出した。

斧（おーの）

目が覚めると、私は見慣れない部屋の中で、粗末な藁のベッドに横になっていた。

状況が飲み込めないまま身体を起こし、ともかくは、と身体を確認していく。

「異常無し、か...あれだけの事があって、それでも私は無傷だったのか」

私が無傷であれば、シリアやガンボスは喜ぶだろうか。

ふとそんな思いが、彼等の最期の姿と共に浮かんでくる。

「.....シリア」

王族としての本能が、大声で叫びたい衝動だけは必死に押さえ付けるが、視界が涙で滲み、奥底から沸き上がってきた熱い固まりは押さえ付ける事が出来ないまま嗚咽となってあふれでてきたが。

男が左手に手斧を、右手に皿を持って扉を開けて入ってきたのはそんな時だった。手斧を見ただけで軽く悲鳴を上げ、その場に固まってしまった私に、男は無表情のまま皿を突き出してくる。

「.....食えば、少しは落ち着く」

男の言葉には敵意を感じなかったが、だからといって味方だとも思えない。

皿に手を出す事も出来ずにいた私を見た男は、つい、と目を背けると、部屋の中央にある、テーブル代わりの酒樽の上に皿を置いて、静かに部屋を出ていった。

伯母（おーば）

皆に優しく、いつも笑顔で、人が嫌がる事を率先してするようなタイプの伯母が、ある日ふらっと居なくなってからもう5年になる。

伯父を始め沢山の人が探し回ったが、結局足取りが掴めず、失踪の理由も解らないまま、誰もが小さなしこりを胸に残して今も生きていた。

もちろん私にも一つだけしこりがある。

それは伯母が失踪する少し前、遊びにきた伯母の家で、テレビを観ていた時の事だった。

『.....私ね、ぞうさんになりたいんだ』

テレビとはまったく関係の無い伯母の話に、私は伯母を見上げる。

『ぞうさん？ばおーんの？』

私の問いに伯母は微笑み、

『うん。そのぞうさんだよ』

『ぞうさん、おっきいよね！』

『うん、おっきいし、優しいよね』

『うん！おばちゃんみたい』

私の言葉に心底嬉しそうな顔をする伯母。

『ありがとう』

『でも、なんで？』

私の問いに、窓の外を見上げる伯母。

『ぞうさんはね、自分がもう長くない、って解ると、群れの誰にも言わずに立ち去るの。みんなに迷惑をかけないようにね』

『長くないって？』

私が理解できずにいると、伯母は優しく撫でてくれた。

『解らなくていいの。...ね、他の人には内緒ね、お願い』

そう言って悲しそうな微笑む伯母の顔が、私の胸にしこりとなって静かにたゆたっている。

もちろん私は約束を守り、誰にも言っていない。

それが、象になりたかった伯母の、ただ一つの願いだったのだから。

帯（おーび）

その刑事さんは愛嬌のある顔で微笑みながら、テーブルに平たい布をそっと置いた。

「これは？」

私の問いに、彼は微笑みを崩さないまま、

「お母さんの遺品です」

と答える。

母の遺品。

10年前に突然姿を消した、私を捨てた母の。

「な、なんで?! 何故今頃になってそんな.....!」

高ぶる感情を抑え切れず、叫ぶように吐き捨てた私に、しかし彼は静かな眼差しを向けている。

「高梨さんがお持ちだったんですよ。お亡くなりになるまで、ずっと抱きしめて」

高梨さん.....確か、今回の被害者の方だった女性だ。

「高梨さん.....と言う方が、母の遺品を？」

私の問いに、彼はゆっくりと布をめくり始める。

「犯人の供述によると、高梨さんは殴る蹴るの暴行を受けながらも、これだけはやめてくれと叫び続け、そのまま息を引き取ったそうです。

何故このようなものをそんなに大事に抱えていたのか、僕はそこが気になって仕方なくて」

彼は呟くように話しながら布を優しく開いていく。

「そこで、彼女の過去を調べてみたところ、5年前まである施設に勤めていたことが分かりまして」

「施設.....？」

私がおうむ返しすると、彼は手を止めて私を見上げた。

「ええ。末期のガン患者の為の施設です」

末期ガン？

まさか.....。

「まさか、そこに母が.....」

私の掠れた声が聞こえたのか、彼はにっこりと笑って答えた。

「はい。8年前まで」

一瞬、私の視界が真っ暗になった。

この刑事さんが言っている事が理解できない。

二の句が継げない私を悲しげな目で見たと彼は、再び視線を落とし布に触れる。

「高梨さんは退職前、しきりに周囲の仲間にこう言っていたそうです。

『私には約束があるの。例え命に代えても、守らなきゃいけない約束が』

と」

布は二重になっていたらしく、彼は二枚目を静かにめくり始める。

「高梨さんは9年前に、仕事の苦しみから自殺しようとしたんだそうです。それを、ガンで蝕まれた身体を引きずって止めたのが、あなたのお母さんでした」

お母さん。

自分よりもまず他人の心配をするお母さん。

間違いない、私のお母さんだ。

「あなたのお母さんは、自分の死が近いことを知り、誰にも言わずにその施設に入ったんだそうです。私が死ぬ事で、誰も悲しんで欲しくないから、と」

彼の言葉が、ゆっくりと私の胸に入り込んでくる。

私の知ってる母が、そこにいた。

「高梨さんは言っていたそうです。

『あの人は最期に、娘の成人の晴れ着を見れないから残念だと薄く笑っていたの。だから私、あの人に、あの人が持っていたこれを、成人した娘さんに絶対渡すから、って約束したんだ』
って」

ふと気がつくと、布は既にめくられていて、中から古い着物の帯が現れていた。

「これ……」

私は知ってる。

これは、母の帯だ。

「助けられない人達を見送る事に疲れていた高梨さんを、あなたのお母さんは優しく抱きしめて言ったそうです。『貴女が居なかったら、私は娘に貴女と同じ思いをさせていただろうし、私はそれに耐え切れなかっただろう。貴女は私と娘の恩人だ』と」

帯を見詰める私の視界が、じわりとぼやけ始めた。

お母さん。

「……父が」

「はい」

「父が生前、私に、『お前は幸福になれ』と言い続けていました」

お母さんの話をすると、いつも悲しげな笑みを浮かべていた父。

お母さんが居なくなっても捜そうとせず、かと言って籍も抜かなかった父。

「父は、知っていたのかも知れません。知っていてなお、
……それでも、母の願いを叶えたかったのかも知れません」

私の途切れとぎれの独白を、彼は静かに聞いている。その彼の優しさに、私の中の何かが一気に溢れ出してくる。

「お母さん……！」

優しくかったお母さん。

お母さんを一途に愛し続けた父。

「私は……私……は」

なんて幸せな娘だったのだろう。

何も知らず、ただ生きているであろう母を憎み、ふがない父を憎んでいた、幸せな娘。

「……帯の間に、あなたへの伝言が挟まれてました。どうぞ」

伝言？

私は顔を上げ、彼の差し出した紙切れを受け取った。

「……！」

その紙には、ミミズの這ったような字で、たった一言だけ書かれていた。

『良子ちゃんへ。私の大切な宝物です』と。

オフ（おーふ）

「.....なるほど、新しいカクテル缶の案を提出したら、山花さんに怒鳴られた、と言う訳ですね」

マスターの低く落ち着いた声に、カウンターでグラスを弄んでいた男が頷く。

「『お前はカクテルを馬鹿にしているのか！』ってね。まあ確かにカクテルは良く分かりませんが」

男のボヤキに苦笑しつつ、男が先刻差し出してきた紙を手にとって.....マスターは思わず吹き出した。

「ちょっとマスター、それはないよ」

男が口を尖らせて文句を言うと、失礼を詫びたマスターが

「ですが、」

と口を開く。

「これでは、売れないと思いますよ」

マスターの言葉に、思わず男が身を乗り出す。

「またまた、そんな事ありませんって。今流行の『カロリーオフ』に『アルコール0』を加えた、最強のスクリュードライバーですよ？売れない筈が無い」

自信たっぷりに語る男に、マスターは優しく微笑む。

「有るんですよ、そういうカクテルも」

「へ？いやしかし.....」

「知りませんでしたか？」

マスターの問いに頷く男。

「まあ、それだけ認知度が低いという事ですね」

マスターが紙を男に戻すと、男はため息を吐きながら紙を受け取った。

「そうか、売れてないから...」

「そもそもノンアルコールカクテルは、酒の代用品でしかないですからね。好んで飲まれる物では無いでしょう」

マスターの言葉に思わず顔を上げる男。

「それもそうか。なら、ノンアルコールは蛇足だったんだ」

一人ため息を吐く彼の前に、マスターがつい、とグラスを差し出す。「これは？」男の質問に、マスターは微笑み、

「『ハーベイ・ウォールハンマー』です。由来は.....言うまでもないですね。私からの奢りですよ」

マスターの応えに、男は薄く笑った。

「悔しさをバネにしろ、って？ったく、マスターには負けたよ」

男はそう言って、伝説のサーファーの悔しさと共に、グラスを一気に飲み干した。

おや（おーや）

あるはれた日にぞうさんがのしのしとさんぼしていると、うさぎさんがこまりがおで木を見上げてました。

「おや、なにをしてるんだい？」

ぞうさんが聞くと、うさぎさんは、

「木の上においしそうな実があるんだけど、取れないの」

と、かなしそうに答えます。

ぞうさんが見上げると、

なるほど、おいしそうな実がいっぱいなっていました。

「おやおや。ようし、取ってあげよう」

ぞうさんはそう言って、長いお鼻で実をそっとつかみ、そのままうさぎさんにあげました。

「わあ！ありがとう！」

うさぎさんはうれしそうになんどもあたまを下げると、実をだいじそうにもってぴょんぴょんとんでいきました。

檻（おーり）

「...象さんが兎さんとさよならしてどンドン先に行くと、今度は小さな檻に可愛い子猿さんが閉じ込められてるのを見ました。

象さんが不思議に思って

『子猿さん、どうしてこんな狭い所に入ってるの？』

と声をかけると、子猿さんは、

『悪い人達に捕まったの。逃げられないの。お母さんと離れちゃったの』

と、泣き出しました。

象さんは悪い人達が怖くありません。

『ようし。こんな檻、壊してあげるよ。すみっこでじっとしてて』

象さんはそう言うと、檻の上半分に長い鼻を巻き付けます。

みしみし、ばああん！

檻は簡単に壊れてしまいました。

『わあ、ありがとう象さん！』

子猿さんはうれしそうにぴよんぴよん跳びはねると、象さんにぴよこん、とお辞儀をして、走り去ってしまいました」

折る（おーる）

「……象さんはそれから、お散歩の途中で出会った動物達を助けていきました。
例えば牙が傷ついても、
足の裏に棘が刺さって血を流しても、
疲れて倒れそうになっても、
それでも動物達を助けていきました。
しかし、そんな無理は長く続きません。
ある時、鹿の群れの為に大きな岩をどかしてあげたせいで、牙をぼきり、と折る事になったのです。
実は象さんの牙は、折れてしまうと力が出なくなり、やがて死んでしまう程に大事な物でした。
そんな事など知る事のない鹿達は象さんに何度もお礼を言って立ち去ります。
さて、象さんはこの後、どうしたでしょう」

俺（おーれ）

「どうしたんでしょうか……って、そりゃ牙を治しに行ったんじゃないか？」

ぶっきらぼうな俺の返事に、彼女は薄く笑って首を振った。

「ううん、治そうとはしなかったの。ねえ知ってる？象はね、自分の死期が近い事を知ると、必ずある場所へ向かうの」

それなら俺も知ってる。

「象の墓場だろ？象も本能でしか知らないと言う」

俺の答えに彼女は小さく頷く。

「そう。だからその象さんも、牙をその場に残して、ほかの象がしたのと同じように、微笑みながら墓場へ向かったの」

そう言って微笑む彼女が、俺にはとても眩しく、悲しく、はかなげに見えた。

オン（おーん）

なんだこの話は。

確か彼女が子供の頃に良く読んでくれた絵本の話じゃなかったのか。

「.....また随分と悲しい話だな」

俺がなんとかそれだけ答えると、彼女はまたいつもの悲しげな笑みを浮かべる。

「私、この話は幸せな話だと思うんだ」

その言葉に思わず目を見張る俺。

「そりゃ、そいつは幸せかも知れんがな、遺されたものはどうする？」

俺は彼女を見つめる。

彼女がその象と同じように生きている事を知ってるだけに、なおの事自分の気持ちを伝えなければならないと感じていた。

「良いか、俺は許さない。愛する者がそんな事になったなら、全力でなんとかする。誰も俺の前では死なせないぞ」

俺の奥底に在った何かのスイッチがオンになったかのように、俺は自分の思いを一気に吐き出し、彼女を見て.....

そこで初めて、彼女が静かに涙を流している事に気付いた。

「ありがとう。」

でも、忘れないで。

この話は、沢山の動物達や自分の家族に感謝しながら墓場で眠りにつく所で終わるの。

家族や伴侶を愛していたし、助けた動物達を恨んでもいなかったの。

.....それだけはお願ひ、忘れないで」

彼女の有無を言わせない口調に俺はため息を吐くと、肩をすくめて苦笑した。

「まったく、こんなに頑固だとは思わなかったよ」

俺の返事の軽さに、彼女がくすり、と笑い、俺も小さく吹き出した。